

丙寅
大正學原道記

202

299

202-299



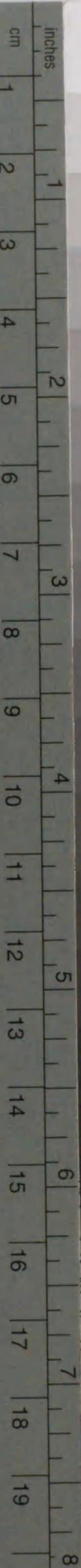
1200800072994

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches





第庵高橋義雄著



大正茶道記



東京

第文社藏版

第庵高橋義雄著



丙寅
大正茶道記



東京
第文社藏版

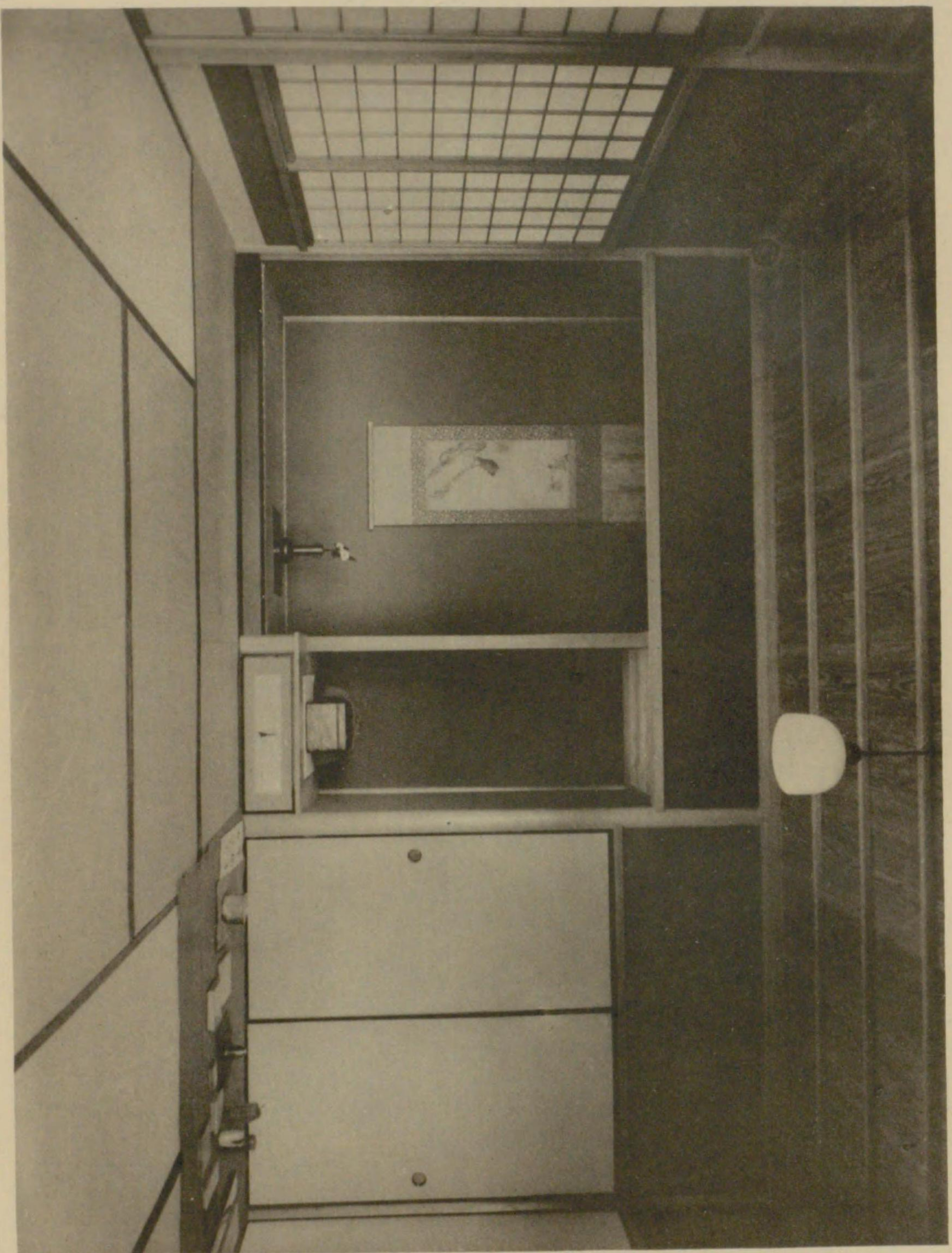
大正茶道記

東京
第文社藏版

淡月微風
紅燈籠
四
淡月微風
紅燈籠
四

住友春翠男書簡 (住友春翠男參照)

晴ニ暮於女知リ柳屋何所遊シ加賀物言三因
學書自他事奉指馬馬女知女二福字事常早遊
加是此家信傳已早事上七都敬上
得能加有之當奉養事馬言所奉別乙紙
高部ニ馬倉庵付宮一ノ加子事善好早遊
遊持期二七年一宮御事是引紙此為
意亦ニ延引一由仁外希ニ採月四年
年ニ何能事亦又何年高柳馬起築一
事書去之興 大正十四年十二月末
住友春翠男
高橋夫人
情傳本



不味軒廣間 (丙寅大師會參照)





中興名物瀬戸獅子香爐（富士開き参照）



ノソカウ茶碗銘熟柿（熟柿進上參照）





大正茶道記絶筆の日の著者



絶筆の辭

大正十五年十二月二十五日畏くも聖上陛下が崩御ましませしに依り、余は當日を以て大正茶道記を絶筆する事とした、回顧すれば余が茶道記を時事新報に掲載したのは、明治四十五年一月三十日馬越化生翁の櫻川茶會が最初で、爾後大正八年迄は表題を東都茶會記と稱し、同九年より大正茶道記と改めて前後正味十五年間斷なく之を繼續した、而して此十五年間には外に世界空前の歐洲大戦争あり、内に前代未聞の癸亥大震火災あり、其多事多端は何れの御代にも比類なき程であつたが、國運は益々盛んに文化は益々進み、單に茶道上より見ても劃世的大變革が此間に行はれた、即ち大正初年より舊大名家若くは諸名流家の藏器處分が相踵いで

出で來り、折も折、歐洲戰爭の餘蔭に依つて經濟的大成功を遂げた連中が争つて其藏器を買収したので、彼の關ヶ原戰爭後名器の所有者が俄に變轉したるが如く、舊大名所持品が續々新富豪の手に移り、在來の什器を其儘保存する大名家は今や全國で十指を屈するに過ぎざるに至つた。又癸亥大震災後、中京及び京阪地方に財力の膨脹を來したる影響として、彼の地に名器の流入多く、随つて之を使用する茶人の氣分にも變化を生じ、所謂東京茶風が關西を風靡するに至つた。斯かる茶道上に大變化があつた大正の御代を通じて正味十五年間茶道記事を繼續し、斯道の興隆に聊か微力を效す事を得たるは、余が生來無上の幸慶として大に満足する所である。猶ほ茲に一言を加へざる可らざるは、余が大正元年より思ひ立ちたる大正名器鑑編纂が、癸亥大震災火災の爲め中途で大障害を蒙

つたに拘らず幸に之を中絶するに至らず、大正十五年十二月十六日其跋文を書き畢りて、表題の示す通り大正聖代中に之を完結するを得た事、余の自ら満足する所であるが、是れも思へば余が多年茶道記を執筆して居たので、諸家の名器檢覽の際、各方面に後援者が起り、先づ名器の所在を告げ來り、猶ほ進んで拜見の手引を爲し、名器所藏者も余の希望に應じて快く其藏器を開示せられた。其御蔭を蒙る事少からず、即ち茶道記を執筆した陰徳が名器鑑編纂上に陽報せられた譯であるから、是れも併せて茲に鳴謝して置かうと思ふ。

大正十五年臘末

赤坂一木伽藍洞に於て

箒庵 高橋 義雄

丙寅
大正茶道記

目次

熟柿進上
不昧公轉墓
殿山新年會
椿庵新席
今里茶會
華甲自祝茶
春宵文星會
夷川邸鑑器會
住友男春翠

一
九
二一
二九
三九
四五
四九
五三
六一

澤庵二大字

五味八珍

對茶杞憂

心月庵忌

花季茶會

晚春茶會

金澤松雲庵

目黒の筍飯

糟谷耕雲庵

諸戸伴松軒

丙寅昭乘會

網島夜會

六九

七三

八二

九〇

九七

一〇一

一〇五

一一六

一二〇

一二六

一三八

一四二

二

觀空庵初陣

一木初風爐

無別法茶會

青山初風爐

江戸風茶會

富士開き

簞瓢茶會

猿庵初風爐

萬松館夜話

美濃茶人

雨夜鶉飼

連歌的茶會

一五一

一六一

一六五

一七三

一八〇

一八六

一九六

一九九

二〇七

二〇九

二一六

二二四

三

遠州流後繼
 松滴庵夜話
 佛法僧
 新曲佛法僧
 岡崎大樹寺
 仲麿堂朝茶
 無塵庵額開き
 月色虫聲
 栗飯一炊
 晚秋殘茶
 丙寅大師會
 鹽原觀楓會

四

二二八
 二三四
 二四〇
 二五一
 二五四
 二六〇
 二六四
 二七五
 二七九
 二八三
 二八七
 三〇六

伊豫切披き
 時雨茶會
 嵯峨臨川院
 丙寅光悅會
 返り咲き
 椿山莊新席
 大橋邸新席
 一木庵茶會

五

三一六
 三一九
 三二六
 三三四
 三四一
 三四八
 三五九
 三六七

丙寅 大正茶道記 目次終

丙寅 大正茶道記

箒庵 高橋義雄 著

熟柿進上

(大正十五年一月廿一日)



熟柿とは千宗旦の命名に係る樂燒第三代ノンカウ事吉兵衛道入作の赤樂茶碗である而して之を進上した者は曩に親孝行茶會を催した馬越幸次郎君夫婦で之を受納した者は舊臘福祿壽茶會を開かれた嚴父化生翁である此熟柿進上たる近來珍らしき茶道上の美談で人情輕薄の今日之を聞くだに甚だ愉快な經緯であるから茲に其荒筋を申述べる事としやう。
馬越幸次郎君は嚴父化生翁の趣味を繼承して、昨年十一月初旬麻布市兵衛町自邸に

名残茶會を催し、初陣よりして先づ稀代の功名手柄を顯はされた、余は當時此茶會に參列して餘人は扱て置き、嚴父化生翁が之を見て如何に感悦したのであらう、又幸次郎君として何物か之に上越す親孝行があらうと感覺したので、此一會を親孝行茶會と名づけ、拙作茶杓に親孝行の銘を書き付けて早速君に贈呈した處が君の喜び大方ならず、舊臘夫婦同道我が一木庵の納經記念茶會に來會せられた時新年是非とも一會を催して彼の茶杓披きを爲すべしと豫告せられたが、頓て一月廿一日午後五時市兵衛町邸にて粗茶一服進呈すべしとの案内に接したので、定刻參邸例の六疊寄附に打通れば、白地に金泥を以て松に浪模様を描いた新調六曲屏風一双を立廻はし、赤地綾り氈の上に時代桐洞火鉢辻井播磨造手焙と千鳥模様織部焼火入を備へた不味好み半月蓑盆を置き並べ、席隅の唐金鳳凰風呂には絲目羽釜を掛け、溜塗金縁茶盆には藍繪阿蘭陀茶碗と祥瑞柑子口香煎入とを取合せ、傍に唐津燒蓋置及び小形砂張建水を添へ置かれたが、嚴父の寶庫より狙ひ撃ちに目星しき者を選抜し來られた丈けありて、席中の雜器一として珍奇ならざるなく、余等は寄附より早や眼の正月に出逢ひ

たる心地がした、而して此外猶ほ席上に狩野山雪筆極彩色廿四孝畫帖を飾られたのは、言ふ迄もなく親孝行茶杓披きに無くて叶はぬ一品で、元屏風の張り交ぜを畫帖に仕立て直した者と覺しく、紙中が聊か荒れたる感じはするが、各一尺四方位の大きさに、山雪には珍らしき精妙の筆致であつた、斯くて今夕の相客は化生大人、野崎幻庵、仰木魯堂、山澄靜齋の外京都の道具商北岡猪三郎が加はつて總勢六人であつたが、前記の因縁があるので特に余が正客、幻庵が二客、化生翁が三客となつて順次入席する事と爲つた。

二

馬越邸本席は前會通り六疊敷で、床には伊部耳付下膨ら花入に、北岡氏が京都より持參の寒菊と梅一枝を活けて薄板の上に置かれたが、此花入は古銅型で兩耳寸法の恰好一段優れ、下膨らの前後に笑靨の如き凹せある愛嬌得も言はれず、聞けば岡山池田侯家傳來で、新太郎少將の愛藏なりしと云ふ、扱て一同着席するや主人立出でて慇懃に挨拶の後直に炭手前に取掛られたが、其器物は左の通りであつた。

釜 古蘆屋作海老銀付

爐縁 時代黒柿

香合 交趾荒磯
香九重

炭斗 一閑張神折敷

羽箒 鶴

灰器 南蠻内澁

灰匙 時代利休形

火箸 時代桑柄

如上器物中古蘆屋釜は松竹梅鶴地紋で金味飽くまで古く殊に銀付の海老が極めて精巧にして殆んど明珍作を見るが如くなるは他に其比類を見ず新年用として斯くまで目出度き者あるべしとも思はれず又交趾荒磯香合は世間に甚だ稀有なる中にも是れは釉色光澤鮮麗にして蓋の甲には黄地に萌黄及び紫色の荒浪模様あり此浪より白檀色の鯉が躍り出て其上の雲中に朱色の日輪あり又身は黄地に紫浪模様で一香合中に斯く數色を具備したるは彼の大龜と雖も或は及ばざるべしと思はれた、而して此處に此香合を使はれたのは寒中凍池の鯉を得たと云ふ二十四孝中の一例を聯想しての作意なるべく又以て主人が如何に此一會に苦心せられたかを卜するに足る斯くて炭手前終るや大内椀模様皆具て懷石を運び出されたが其献立及び器具は左の通り。

汁 白味噌、火取百合、青海苔
向付 搔きはうばう、山葵、柑酢
椀 鴨、赤鱈、花菜、落の葉

燒物 外黒内櫻楓蒔繪重箱
吸物 蘭の花
八寸 若鷲、豆慈姑

香物 燒物重上段に入れて、大根味噌漬
酒器 祥瑞蓋鏡目銚子、青磁酒次、染付耳付盃及び萬曆赤繪兩耳盃
菓子 遠山

懷石は花月樓喜助の庖丁で、今夕は一段の上出来なり器具は酒器に於て拔群の名品を示し、雨過天青色で腰に白筋模様ある青磁瓶子形德利並に萬曆赤繪兩耳付盃の如き、美人天上より落ちて茶席忽ち春なるべしとても形容すべき者であつた。

三

一月廿一日は舊曆十二月八日で、釋迦が菩提樹下で大悟徹底したと云ふ臘八である、然も此日は大寒の入りで、夜寒骨を刺すばかりなるにぞ、懷石後の申立は元の寄附に設けられたが、片雲なき大空に八日月の光り凝つて露地に人影を印する寒夜の光景も亦中々に風情あり、慾を申せば合圖は銅鑼七點と云ふ處なれども程なく主人自ら出迎はれたから再び入席して床中を見れば下方に黒く遠山を畫きて其上に左の一首を題した小堀遠州筆鷄旦小色紙を掛けられた。

有馬にて鶏旦

宗甫

世の人のならひに祝ふ春はあれと

けふ立つ春に似る春そなき

是れは遠州藏帳品で、小堀權十郎蓬雪の箱書美事に、表具は遠州自ら好みたりと覺し
くて、好事の有らん限りを盡して居る、斯くて景文筆藪相子風呂先の前に伊賀焼の白
形耳付で、上半身白く下半身尻張りて、赤焦げ藥の景色面白き水指を置き、茲に濃茶手
前を興行されたが其器物は次の如し。

茶入 中興名物豊後口廣

袋 針屋切

茶杓 箒庵作銘親孝行

茶碗 青井戸銘金鳳

建水 木地曲

蓋置 青竹引切

茶 好の白

前掲器物中、豊後口廣茶入は瀬戸窯四代破風焼で、阿部豊後守忠秋が所持した口廣茶
入なので此名あり、大正名器鑑其の他諸茶書に詳載してあるから今又絮説せざるべ
し、青井戸銘金鳳茶碗は今度始めて拜見する者だが、高臺内外カヒラギ美事に現はれ、

輓轡靜に作行上品にして疵少く、金鳳の銘は藪内先代宗匠竹翠の筆である、此名物茶
入と茶碗の間に拙作茶杓を配用せられたのは、親孝行の銘あるが爲めとは云へ、主人
夫婦が誠心誠意此微物を敬重せられて、態々茶杓開きの一會を催されたる芳情に對
して何と感謝すべき言葉もない、斯くて濃茶一巡するや薄茶は同席で行はれ、茶入は
嵯峨棗茶碗は彫三嶋と乾山作鶴龜模様、茶杓は不味好み塗物で、唐物天皮盆に雪輪と
有平笹を盛り、夫人が代つて點出されたが所謂熟柿進上の一幕の切つて落されたの
は、此薄茶手前の將に終らんとする時であつた。

四

馬越邸の茶室で薄茶の將に終らんとする時、兼ねて打合せてあつた者と覺しく主人
夫婦が末座に打並んで、何やら水引を掛けた一包を取り出し、拙者共近年まで茶事に
何等の趣味なく打過ぎし處、今夕の御二客幻庵君等より、斯くては折角老父の集めた
茶器も終に其用を爲さぬ事とならうから、親孝行と思つて時々茶事を試みては如何
と御勸告のまに、昨年十一月初めて名残の一會を催した處が、今夕の正客箒庵君

より親孝行の銘ある茶杓を頂戴して愈感激の至りに堪へず、同茶杓開きの一會を開くと同時に、老父に對して何かな親孝行の事實を示したく、百方苦心の末、漸く一品を手に入れたれば、同郷の先輩幻庵先生の手を経て、令夕之を老父に進上する次第である。と述べ了れば、幻庵老は頓て席を進めて、第三客たる化生翁に向ひ、御聞きの通りの次第にて、今度若夫婦が何かな老大人の悦ばれさうな一品を進上せんとするに就いては、昔し唐土の二十四孝が、冬日竹藪に入りて、笱を求め、寒中凍池を温めて、鯉を得んとした苦心にも劣らず、大に物色した末、漸く千宗且銘ノンカウ作熟柿を獲たので、今夕拙者が之を老大人に取次ぎ進上する事に爲つた、而して若夫婦が特に此熟柿を選まれたのは、自身等は未だ若輩の澁柿なれども、大人は既に老熟した熟柿の如しと云ふ意味もあらん、又此茶碗の茶溜りに千宗且の花押ありて、高臺脇に其第二子江岑宗佐の熟柿と云へる書付あり、即ち父子合作と云へる處に自ら深長なる寓意があるかも知らぬ、何は然れ、父子間に於て斯かる目出度き贈答の行はるゝ事は、古來稀有の美談にして、我が同郷の先輩たる馬越長老一家の繁榮は、子々孫々際限ある可らず、而し

て今夕其贈答の取次役に當つたのは、誠に光榮の至りなれば、拙者も此機會に於て聊か祝意を表すべく、小堀蓬露作銘不老門、同宗本作銘長生殿二本入茶杓一箱を化生翁に進呈すべしと、右二包を翁の前に差出せば、翁は喜色満面で自分は多年茶席に入りましたれど、今夕ほど嬉しく思ひたる事なしと言はれたが、是れは全く翁の眞情であらうと思ふ處で、此熟柿と云へる茶碗は、昨年十一月井上侯家藏器入札會に現はれた者で、赤樂の光澤麗しき上に、粉の吹きたるが如く、白釉のムラ／＼と漂ひたる景色、全く熟柿其物の如くにして、從來千家名物として知られた者である、而して是れが右様の次第で、今度故侯の熟交化生翁の所藏に歸したのは、熟柿茶碗の爲にも誠に祝着の至りである。

不昧公轉墓

(大正十五年一月廿四日)

雲州松平家第七代羽林次將贈從三位大圓庵不昧宗納居士治郷公は、文政元年四月二

十四日薨去せられ遺骸は其翌月芝西久保天徳寺境内に葬られて、同十二年逝去の彫樂院夫人伊達氏と二基の墓碑が天徳寺後丘腹に相並んで居た然るに昨年松平家當主直亮伯が思ふ所あつて之を小石川音羽護國寺境内に移轉せられた其墓地は三條實美公の塋域と隣接する面積五十六坪で當家の上として餘り廣くないので伯は二基の墓碑を一基に纏め且つ參拜者の便利の爲め三條公神道碑寄りの一廓を選まれたが玉垣及び碑字彫刻等の工事に數月を閲して舊臘末に至り轉墓全く竣功を告げたので小堀遠州以後三百年間茶道第一人者たる松平不昧公の遺骸と靈魂とは長へに神齡山護國寺に鎮座せらるゝ事となつた處で余は本件に就き最初より聊か周旋の勞を執つた關係があるから東京市中の一史蹟移轉とも見るべき此轉墓の事由を同人に報道するのは今日が最も好機會であらうと思ひ參拜者の道しるべかたゝ左に其大略を記述しやう。

雲州松平家は徳川家の近親であるので歴代主公は宗家に倣ひて大抵淨土寺に葬られたが不昧公は夙に禪學に志されたから別に一見識を立て當時に於ては非常の破格を以て芝天徳寺に其墳墓を卜し雲州松江の月照寺には壯麗なる廟所があれども遺骸は實に當寺に葬られたのである余は數年前石黒況翁吉田楓軒等と同道して公の墳墓を參拜した事があるが寺後の丘腹に塋域あり十數級の石段を登れば正面に古雅なる廟門があつて其門扉の向つて右に彈指左に圓成の各二大字が彫刻してあつたが是れは鎌倉圓覺寺の誠拙和尚追諡大用國師の筆蹟である而して其廟門の突き當りに不昧公と彫樂院夫人の墓碑が相並んで屹立して居た。

二

不昧公及び彫樂院の墓碑は公の嗣子月潭公齊恒の建立に係り流石は十八萬石雲州大守のだけあつて其高さ一丈四尺に達する堂々たる者で向つて右手に出雲石の四足石燈籠と天然石蹲踞石とがあり其傍に卵形の筆塚の碑が立つて居た又月潭公齊恒のは不昧公の歸依大嶺和尚の住持して居た麻布の天真寺に在つて是れも立派な墳墓である其外松平家には尙一箇所の墓所があつて東京に三墓地が分在するので當主直亮伯は後世子孫の爲め成るべく此墓所を一寺に取纏めて永代修理の行届く

やうにしたいと云ふ意思を抱かれ震災前に於て一度余に其墓地の選定方を相談せられた事があつたが強いて取急ぐ事でもないので暫く其儘にして居た處が程なく癸亥の大震災が轟發して天徳寺、天真寺の墓所は何れも大破損を蒙り、姑息の修理では到底間に合はぬばかりでなく、天徳寺の方は區劃整理の爲め墓地としての存立を許さぬやうな事態に立至つたので、直亮伯は豫ての理想を實行するのは此時なりと爲し、今度は一場の茶飲み話でなく當面の實行問題として再び墓地整理に關する相談を持ち出されたので、余は松平家の墳墓を音羽護國寺に移轉するのが、護國寺の爲めにも松平家の爲めにも共に極めて好都合なる次第を述べて伯の決意を促した、其次第は外でもない、古來東京には南都若くは京都などの如く寺院が景勝の地に在つて、參拜者に幽雅清淨な氣分を味はしむる趣向を缺いて居る、是れは大都市の社會政策上極めて遺憾なる事である、佛法に於ては伽藍說法と云つて伽藍夫れ自身が人の信仰を導き精神を淨くする効能のあるもので、例へば京都の金閣寺、銀閣寺等へ參詣して寶物を拜觀し、庭園を巡覽し、茶室に立寄つて薄茶一服を喫すれば、信仰好古其他種

々の觀念が起つて、自然に氣分を爽快にし、動もすれば荒び易い精神を鎮靜するものである、殊に東京の如き信仰に乏しく氣風の荒つばい土地柄に於ては、最も此伽藍說法の必要があらうと思はるゝからである。

三

音羽護國寺は徳川五代將軍綱吉の生母桂昌院の祈願に依り、亮賢僧正の開基で、元祿年間、草創せられ、寺域約十萬坪を算したが、維新後皇族墓地として宮内省より其半分五萬坪を召上げられ、更に他の二萬五千坪を陸軍共同墓地に割かれて、現在護國寺の境内は約二萬五千坪に縮小した、併し東京市内の寺院としては第一景勝の位地を占め、音羽通りより山門を入つて高丘上に本堂が巍然として峙ち、本堂竣成後間もなく五代將軍が薨去したので書院庫裡等に着手するに至らず、云はゞ半出來の儘にて今日に迄んだのは甚だ遺憾の極みであるが、老樹鬱蒼として展望西南に開き、三條公を初め、山縣、大隈、島津、酒井、南部等諸名家の墳墓が立並んで、其境内に入れば何となく京都の智恩院、南禪寺を聯想せしむる趣あり、東京市内では他に之に比肩する寺院が

ないから當寺が茲に中興の計畫を立て、本堂に接續して書院庫裡等を建造し、茶室並に寶物館をも新設して、境内に永眠して居る名公巨卿の遺物を參詣者に縦覽せしめ、薄茶一服に心氣を清淨ならしむる趣向を立てんか、信仰、教育、風雅等各方面に於て社會に好感化を及ぼすべき適當の場所と爲るだらうと思ふ、余は此意味に於て當寺に不昧公の轉墓を歓迎し、公の茶徳に依つて寺域を茶化するの、護國寺興隆の爲めにも、社會政策上思想善導の爲めにも最も適宜な計畫であらうと考へたので、頻りに其間に周旋した處が、幸に寸志が貫徹して護國寺貫主小野方良行、執事佐々木教純師等も能く此意義を諒承せられ、三條公家と酒井伯家の墓所隣接地に於て、五十六坪の塋域を松平家に贈呈する事と爲つたので、松平家に於ても大に悦び祠堂金一封、不昧公遺墨で疊一枚敷位の紙面に枕流と各一字づゝ書かれた二大幅並に狩野榮川院筆不昧公肖像を寄贈して其好意に報いられ、尙ほ轉墓の結果として大用國師筆彈指圓成の四大字彫刻の墓門蹲踞石、石燈籠をも併せて永久護國寺に寄託する事となり、松平家に於ては昨秋より着々轉墓工事を進行して、舊臘立派に完成を告ぐるに至つたのである。

四

音羽護國寺境内に於ける不昧公轉墓の場所は、三條實美公の墓地に隣接して、樞其他の大木が林立して居る、是れは三條家が始めて當寺内に墓地を選定せられた時、近隣の清淨を保つが爲め、餘分に保留せられた地域だが、神道碑も既に建立せられて、今は全く不用と爲つた五十六坪を護國寺に返還せられた處恰も不昧公轉墓の議が起つたので、護國寺より更に之を松平家に寄贈する事と爲つたのである、而して今度移建せられた不昧公の墓碑は其高さ一丈四尺であるから、是れが三條公の神道碑と相並んで大樹の下に屹立した處は實に此寺城内の一壯觀である、猶ほ此墓碑の前に移置せられた筆塚の碑は不昧公薨去後嫡子月潭公が父君の生前使用せられた廢筆を埋めて其上に建てられた者で、其碑文は有名な塙保己一が之を撰み、等學院文詮即ち酒井抱一上人が之を書かれたのである、然るに此碑は嘉永年間地震の爲めに破損したので、元治元年に改建せられ、卵形の天然石表面に原文を彫り付け、裏面に雲州の文學

神村通平が改建の事由を誌して居るが、其原文は左の通りである。

筆塚の銘

硯のいのちは世をもてかぞへ、墨の壽は月をもてかぞふるとかや、久しきはめてたけれど、其いさほし多きものは筆にこそありけれ、花のものとなさけ、月の前のおもひ、之ならでは述ぶることあたはじかし、こゝに八雲立つ出雲國治らせたまふ松江の先の君民を養ひ、國を治めたまひし事は、いふべくもあらず、すべて萬の道にすぐれさせたまひ、とりわきて物かくわざを好ませたまひて、若くおはし、ときは、こゝとさへぐ唐様にのみ心を寄せたまひしが、後には京極黃門の筆の跡を學ばせ給ふ、やがて其の境にいたらせ給ひぬれば、貴きも賤しきも翫び、一くだりをも得たらんものは家に秘めおきて寶とす、月をかさね年どしを積みて、遠きも近きも争ひ求めしほどに、其の用ひさせ給へる水ぐき十の瓶にも餘れりとこそ、さるをこの四月の頃失せたまへれば、今の殿孝養の御こゝろ深くおはします餘りに、空しく廢れんことを惜ませたまひて、智永禪師の昔に習ひ、これを埋めて筆塚と名づけ、御墓の側ら

に石ぶみを立てさせたまふ、おのれも赤坂の御館にたびの浦のたびくまうのぼりて天淵の深きおほんめぐみを蒙りしかば、仰せにまかせてこれをしるす。
文政のはじめのとし神有月中亥の日

檢校保己一

ひと筆の跡はまつ江の君が名に

千歳の後もなほ残らまし

等覺院文詮謹書之

五

松平家に於ては不昧公轉墓の結果として、芝天徳寺に在つた墓門蹲踞石燈籠を護國寺に永久寄託せられたので、余は不昧公記念茶席一棟を護國寺境内に造り、如上遺品を夫れくの場所に利用すべく思ひ立つたと云ふのは、第一墓門は形式が如何にも幽雅で、其扉には大用國師筆彈指圓成の四大字が彫付けてある、抑も國師は鎌倉圓覺寺の住職で、不昧公の歸依淺からず、彼が圓轉超脱の機略に就ては種々の美談が残

つて居るが、今姑く之を省き、國師の餘技としては最も書畫が巧妙であつたので、不味公の爲めに此門扉を書かれたものであらう、而して此四字は證道歌の彈指圓成八萬門の語を取つた者である、不味公が嘗て鎌倉圓覺寺に國師を訪はれた時、國師は直に出迎へて虚空に大圓を描いたのを見て、公は一語をも交へず直に駕を返されたこと云ふ事だが、公が大圓庵と稱せられ、又此彈指圓成の門扉が出来たのは、蓋し名公と名僧と禪味の契合を暗示する者であらうから、余は不味公記念の茶室をば最非共圓成庵と命名したく思ふのである、又蹲踞石は横長き自然石の一端に圓穴を穿つた者で、何れは公の遺愛品であらう、又石燈籠は雪見燈籠に似寄つた四足形で出雲石を以て造られた者である、斯くて茲に門蹲踞石、石燈籠が揃つて居る以上は、唯一棟の庵室さへ造れば夫れて立派な記念茶寮が出来上る譯であるから、余は何卒此願望を成就したいと思つてゐた處が、作年十一月井上侯爵家の道具入札々元と爲つた、二十八人の道具商連中が早くも此事を聞き傳へ、折から余の報告に依つて不味公轉墓の事由並に記念茶室建立の希望を知り、直に滿腔の同情を表せられた、同入札會委員長馬越化生

翁が中間に立つて勸説する所があつたので、右札元一同より不味公記念茶室一棟を護國寺に寄進する事に爲つたのは誠に近來の美舉で、我が同人諸君は新年早々此福音を耳にして、東都茶界の爲めに必ず快哉を高呼せらるゝ事であらう。

六

今度護國寺境内に建立せんとする不味公記念茶室は、四疊半小間、假に圓成庵と云ふ十疊廣間、假に不味軒と云ふに水屋、納戸、臺所を包含する三十餘坪の建物で、大體京都桂離宮の松琴亭に倣ひ、他日種々の茶會に使用する便宜を計り、腰掛待合を大きくして、同時に三十人位休息し得るやうに設計し、仰木敬一郎氏が一切の工事を擔當する都合であるが、護國寺の正門を入り石段を登り詰めて左折し、高城義海和尚記念碑の背面に展開する高燥の空地が其指定場所である、而して此記念茶室寄進に就て想ひ出さるゝは、往時不味公が小堀遠州の茶恩に關して戯れに道具商等に警告せられた布達文で、其文中に左の一節がある。

寛永年中小堀遠江守政一公茶事に達せられ、殊に器の新古直段を夫れゝに分け

られ、夫れより以來、數寄道具屋共、家業繁昌、仕り、今日安穩に家内を育て候も、政一公の御茶徳故に、候處、端々には、右御茶恩忘却、仕り候者有之やに、被存候、右體の儀有之間、敷事に、候條、當年より二月六日は、數寄屋を清淨に致し、早朝より、釜掛け掃除等、念入慎み申されべく、鳴物は、無用に可被致候、鉦は、不苦候、尤もガンと云はぬやうに、可被候、此段申達候。

とあり、是れは、不味公が、遠州の茶道に於ける、高德を述べ、道具商等が、其茶恩を忘却せぬやう、戯作に託して、此文を作られた者だが、大正今日の、道具商等が、不味公の茶徳を敬慕し、大道具入札會のあつたのを、機として、茲に、不味公記念茶室一棟を、寄進したのは、誠に殊勝なる心掛で、不味公も、往年小堀遠州の爲めに、時の道具商等を、訓戒した一言が、今や自身に對して、應報せらるゝのを見て、流石は大正時代の、道具商なりとて、必ず満足せらるゝ事であらう、此記念茶室は、來る四月中に、完成する筈であるから、今年には、彼の大師會を、護國寺に催すと同時に、同茶室開きをも、舉行する事となるべく、左あらば、雲州松平家と、馬越化生翁とが、小間と、廣間を受持たるゝのが、當然で、結句、不味公

の茶徳に依り、護國寺も一段、幽雅の趣を帯び、東京市内に、京都の鷹峰光悅會、八幡松花堂會の如く、最も趣味深き年中行事が、催さるゝ事と爲るであらう、因つて、今先づ茲に、不味公轉墓より、記念茶室建立に至る、徑路を報告し、置き、追つて、同茶室開きの、巨細を報告する前提と爲す次第である。

殿山新年會

(大正十五年二月一日)

碁敵は、憎さも憎しなつかし、と云ふ川柳點があるが、是れは、茶敵にも共通して、茶人は、時々招き合ひ、ウント溜飲を下けずには、居られぬ者と見える、舊臘、益田鈍翁の馬越化生翁主催、福祿壽茶會に、招がるゝや、程なく、御殿山太郎庵に一會を催して、其返茶とも見るべき、堂々の茶陣を張られたが、化生翁が、年末多忙勝て之に、臨席する機會がなかつたので、鈍翁の遺憾、大方ならず、新年に入りて、二月一日正午、愈茶敵化生翁を、太郎庵に迎ふる事と爲つた、而して、其相伴役には、余の外に、白石村治田中親美、山澄靜齋

が指名を蒙つたので、定刻太郎庵の寄附に馳せ参ずれば例の長爐には時代竹自在で手取釜を掛け、錫縁青漆盆には鈍阿焼茶碗と南京赤繪香煎入を組み合せ、席上には赤地縫取敷物の上に時代桐わらび蒔繪火鉢と光琳、乾山合作の梅模様三足火入を備へた具足櫃、蓑盆とを並べてあつたが、更に壁床を見返れば、時代松鶴蒔繪小硯箱を飾りて、其上に宗旦が右方に粗筆の藁屋を畫き左端に

露地はさひたるもよし

旦花押

と認めたる横物を掛けられたので、寄附より早や新年氣分を催し、化生翁先達の下に順次太郎庵へと繰込めば、時なる哉床には庵主好みと覺しく時代模様取合せよき名物裂表装で、淺黄臺紙の中央に張付けた寸松庵色紙を掛けられたが、其歌は

つらゆき

うめのかのふりおけるゆきにうつりせは

たれかことくわきておらまし

と云ふので、古今集に雪のうちの梅の花をよめると詞書きある紀貫之の自詠である、

是れは明治三十年前後庵主が故朝吹柴庵翁と名古屋に滞在中、同市の瓦落多道具入札會に粧末な表具の此色紙が現はれたとて、土地の道具商が註文取りに來りたるを庵主が見て、是れぞ好き掘出し物御參なれと思つたが、若し之を柴庵に氣取られて、君は寸松庵を一枚御所持だから、是は拙者に譲り給へと言はれたら、一言もなく之に服従するより外ないので、一向感心せぬ顔付してソト柴庵を顧みれば、君は之を何と見る若し偽物であつたら詰らぬから、歸京の後篤と御所持の分と見較べた上で入札しやうではないかと云はれたので、内々ホツと胸撫で下し成程夫れが宜からうと言ひつゝ、柴庵の便所へ立つた後で、其座に來合せた大阪の戸田露朝に是非とも取れよと註文して、歸京の汽車が濱松邊に來つた頃實は是れく白狀したので、果ては大笑ひと爲つたと云ふ思出多き一軸であるさうだ。

二

太郎庵に入席劈頭床に掛つた寸松庵色紙から、茶事上に逸話多き余等共同の亡友朝吹柴庵翁の上に及んで、暫時追懷談に花が咲いたが、庵主の物語り一亘り相濟むや直

に炭手前に取掛られて使用の器物は左の通りであつた。

釜 利休所持田屋絲目、炭斗、瓢、香合、吳洲松川菱

羽箒 大鳥、權十郎銘殘雪、灰器、南蠻内溢、灰匙、時代銀製竹の皮卷柄

火箸 時代桑柄

田屋絲目釜は共蓋で、絲目筋全面に繞り、鉦鼓耳が珍しくドツシリとして如何にも利休所持らしく見受けられた。松川菱香合は所謂形物で世間に類品も多いが、當家のが此手の白眉と云はれて居る。羽箒の大鳥は鴻と書く事もあるが、鶴とも違ひ又鷺にしては幾分柔か味があつて、何地産の鳥やら分明でない。而して今日使用の分は純黒の羽先に二箇所白斑があるので、權十郎が殘雪と命名したのであらう。兎に角非凡の羽箒て之を實用するのは何とやら勿體なく思はれた。南蠻内溢灰器も亦平常のより深く、何れ劣らぬ名品の顔揃ひで、然も其組合せの澁くして苦いのは流石に當庵主の獨擅場と頷かれた。斯くて炭手前終るや溜塗丁斧目平膳、黒塗椀皆具てお手料理の懐石を運び出されたが、其器具及献立は左の如し。

汁 嫁菜、三州味噌、向附 祥瑞樹詩入、寒鰯、防風、岩茸、山葵、甘酢、椀 胡麻豆腐、海老、花茶、露の臺

焼物 羽釜形土器、貝杓子、強肴 志野四方入肴鉢、吸物 燕巢、松の實、伸し梅

八寸 山吹漬、百合、若狭鰯、香物 三島小鉢、白菜、酒器 祥瑞豆人形蓋鐵銚子、宋胡

菓子 蕎麥饅頭、蒸して

黒塗椀に祥瑞樹詩入向附の膳附は一見胸の透く心地がした。而して酒器の逸品揃ひは言はずもがなだが、別して宋胡録德利は天下第一品と謂つても決して過褒であるまいと思ふ。懐石は庵主が食物博士だけに唯其調理の好いばかりでなく、材料の種類が多き事是れ亦天下無類なのは前記懐石附に據りて直に夫れと會得されるであらう。

三

太郎庵で懐石終つた後庭前の腰掛に中立すれば、本年は舊臘より天氣續きて他地方には大雪の報を聞くのに、東京だけは氣候も至つて温和なる中にも、今日は殊に春めいた和風晴日の其露地に銅鑼七點の合圖を耳にする心地好さ、茶人ならでは容易に此趣味を味はひ得ぬであらう。扱後席の床如何と見れば、一見遠州作と思はるゝ平竹

二重切花入の上段に鶯神樂の一種を活け下段に小田原より到來の早咲ボケを活けて根締に薺をあしらつた風情得も言はれず遠州には平竹御免と云ふ名物竹花入があるが此二重切花入は蓋し其共竹なるべく大徳寺江雪和尚が其銘を昔男と附けたのは其平竹に對して業平と云ふ意義を寓した者らしく思はるゝ斯くて庵主の濃茶手前を見れば其器物は左の通りである。

水指 中興名物南蠻不識 茶入 中興名物高取耳附 袋 唐物茶地緞子織止

茶杓 古田織部作原叟筒 茶碗 名物手井戸銘翁 建水 砂張

蓋置 青竹半枯 茶 松の花

如上器物中々興名物南蠻不識水指は舊冬井上侯入札會に現はれた一品で余は最初より之を當庵主眞向きと睨んで居たが果して當家に舞込んだのは誠に其所を得た者である而して此水指には細川三齋好みと千宗旦好みの二つの塗蓋があつて夫れ々其作意を示して居る處に面白味がある元來此水指は口縁に一箇所落窪んだ處があるが三齋は其邊に構はず之れに普通の形の塗蓋を掛けたのを或る時宗旦が見

て其落窪んだ處に覆さるやうな塗蓋を取合せたのは如何にも行届いた仕方ではあるが庵主は此双方を比較して三齋の方が應揚にして小節に拘泥せず如何にも武人らしい氣性を現はして居るのが面白いとて當日は三齋好み蓋を使はれたが余等も此意匠合せに於ては三齋の方を勝とする庵主の批判に賛成しやうと思ふのである。

四

太郎庵濃茶器物は其醜柄が目出度い新年氣分を現はした名品揃ひで名物手井戸茶碗は銘を翁と云ひて時代古く大疵繕ひが所謂翁さびの姿を示して居る高取耳附茶入は中興名物で釉色の美麗にして且つ變化多きと茶入の大きなのに割合はして兩耳の極めて小さいのが遠州の好みに投じたのであらず而して庵主が此茶入を使はれたのは近頃少しく遠耳に爲つたので耳付茶入に聽力を借りたのであらうとは庵主に聞えぬやうに囁いた座客側の樂屋落である斯くて此茶入茶碗に配するに古田織部の蟲喰茶碗を以てしたのは寸分動かぬ組合せであつたが正客化生翁が一本槍に此茶碗を古織と鑑定したので座客一同より龜の甲より年の功なりとヤンヤの喝

采を博されたのは、當日客方の勳功第一であつた、扱て濃茶一巡するや薄茶は同席で、令孫女が代點せられ、水指は高取一重口と代り、茶入は二人静と云へる名物袋の掛つた凡鳥棗、茶杓は利休象牙、茶碗は御本藏繪に丹礬釉美事なる黄瀬戸筒を取合せ、唐物朱縁盆に紅白打出、及び煎餅惣菓子盛て首尾克く一會を結ばれたが、庵主と正客とは四十年來の茶友として、後席に於て様々の奇談逸話が湧出た中にも、彼の懷石の時に現はれた宋胡録、徳利は明治二十年前後、庵主が未だ茶道に踏入らざる前、花入として之を使用されたのを今日の正客が一見して大に興し易しと爲し、庵主方のお出道具、商相彦事、柏木彦兵衛に旨を含めて、窃に彼の徳利を取出すべく策戦計畫を立て、當時茅場町の物産會社一室では、兩人机を並べて居りながら、何喰はぬ顔して相彦よりの吉左右如何と待ち居りしに、取出の相談九分九厘まで進みたる處で機敏なる庵主に看破され、遂に談判中止となつたので、正客も其内幕を庵主に白狀して果ては大笑ひと爲つたさうだが、今日此思出多き宋胡録、徳利に對して、四十年前の事を追懷する庵主と正客との興味は、他人の想像し能はざる者があらう、此等が即ち彼の茶敵の

憎さも憎し懐かしと云ふ處で、誠に茶味津津たる者がある、而して今日此兩茶老の相遇戰を飽くまで傍觀する事を得たのは、相伴役たる余等の役徳て是れは有難く兩老に感謝せずばなるまい。

椿庵新席

(大正十五年二月十一日)

芝浦製作所長、東京放送局長、岩原謙三君の茶的雅名は通常謙庵として知られて居るが、君は茶事を催す毎に必ず椿事が出來するから寧ろ椿庵と云つたが宜からうと云ふ人あれば、イヤ君には始終珍談が付き纏ふから珍庵と呼ぶのが適當だらうと云ふ者もある、然るに癸亥大震災の前年茶事中君の茶室に手飼の狎が飛び込んだと云ふ大事件發生以來、同人中より更に狎庵の稱號を奉るべしとの提議があつて、是れには中々賛成者が多く、二つ名のある彌太五郎源七どころではなく、何れを夫れと定め兼ねるので、此程岩原君に交渉した處が、狎庵は絶対に御免を蒙る、珍庵も幾分嘲笑の意

味を含んで居るから是れ亦之を否認するが、謙庵の號が若し拙者に不當で、君等が是非椿庵と言ひたいならば夫れだけは敢て辭退せぬから、爾今椿庵と改稱しやうとの確答があつた、乃ち今度の新席記事劈頭に於て先づ此事を同人に報告する次第であるが、扱て此椿庵新席とは何を指すのであるかと云ふに、君の芝茸手町本邸は癸亥の大震火災に罹つて茶室も無論烏有に歸したが、茶器收藏の寶藏は幸に祝融子の魔手を通れたので、今度母屋の新築と同時に茶室も美事に落成し、目出度く紀元節を初日として新席開きの一會を催す事と爲つたのである、而して其初日の客組は益田鈍翁、白石村治、田中親美、山澄靜齋、余も亦之に参加するの光榮を得たから、同日正午茸手町岩原邸に推參し、正門を潜つて右手の寄附に罷り通れば、二度目の建築とて萬事從前よりも勝手好く、三疊隅板席の壁床には浮田一蕙筆若菜籠の圖を掛け、釣棚には松鶴龜、蒔繪硯箱を飾り、隅板の上には鐵打出し、窠れ瓶掛に寒雉瓢形鐵瓶を掛け、茶盆には染附茶碗と刷毛目瓢形香煎入を組合せ、席上には桐大洞火鉢と、萩三足火入を供へた桐溜塗四方入、蓑盆を置き並べて、残る方なく初春氣分を發揮されたが、中にも一

蕙筆若菜籠の一軸は何とやら本席の趣向を暗示するかの如き感じがした。

二

震災後の新築岩原邸は幾分建坪を縮小されたが、夫れだけ露地が廣々として植込みの間に流れを取り、寄附より飛石傳ひに松葉を敷き詰めた露地を進み行けば、椎の大木の下に天然石の大蹲踞石があつたから、順次漱ぎて之れと向き合ひたる躡口より席中に繰込ば、三疊臺目の新席の床には果して然り、若菜の句ある小野道風の繼ぎ色紙を掛けられたが、其歌は左の通りであつた。

かはかみにあらふわかなのなかれても

きみかあたりのせにこそよらめ

色紙は帖の二ページを繼ぎ合せた者で、向つて左方の中段より上の句を書き、右方に低く其下の句を書き分けた字配りと云ひ、筆行きと云ひ、上代書中の上乗で、戀歌ではあるが若菜に寄せた者だけに、初春の床には一言もなく、蓋し繼ぎ色紙中五指の内、數へらるべき者ならん、抑も此繼ぎ色紙は椿庵主人の舊主大聖寺前田利鬯子の舊藏で、

明治四十二年頃十六枚半の一帖となつて居た者を、今日の正客益田鈍翁等が抽籤を以て同人間に分配された者で、此一枚を抽き當てた椿庵の茶福は誠に健美の至りである、表具は三好竹馬の丹精にやあるらん、上下は淺黄絁、中廻しは絁印金一文字風帯は描き表装で、兆殿司印金と稱ふる者であるさうだが、時代銀紙の臺紙まで如何にも申分なき上出来で、熨斗を載せた白木の三寶を其前に飾られた容態も見るから神々しく、椿庵が此時を以て此會を開かれたのも畢竟此一軸あればこそと首肯された、斯くて庵主立出て、一同に挨拶の後直に炭手前に取掛られたが、其器物は左の通りであつた。

釜 天明八角口
獅子銀附

炭斗 黒塗曲

香合 祥瑞蜜柑福壽文字模

羽箒 青鸞

灰器 ノンカウ焼状

灰匙及火箸時代桑柄

銀 巴形

天明八角口釜は、昨年前田侯爵家藏器入札の際、當家の所藏に歸した者で、地肌美事に其共蓋が極めて珍しい形式である、祥瑞蜜柑福壽文字模様香合は藍色麗しく、春先茶

用には寸分動かぬ組合せなので、茶評家揃ひの今日の顔觸ても唯成程と感歎の聲を放つより外なかつた。

三

椿庵の茶會と云へば必ず椿事が出来する筈と相場が極つて居るのに、今や炭手前が終了するまで庵主が落着き拂つて、何等椿事の痕跡さへ示さぬのは客方の大に意外とする所であつた、尤も庵主が最初寄附まで客を出迎はれた時、右の手に手拭を驚攫みにし障子を明けて黙禮するや、其手拭で敷居の上を一文字に一拭きされたが、是れは江戸千家の茶人中に往々手拭を懷中にして、客に一禮の後、其手拭を出して、敷居の上を拭く者があるのを、庵主が見傲つたものであらう、去るにても初めより手拭を驚攫みにして居るのは頗る異様で、誰やらが庵主は風呂にでも行く氣で居るだらうと云はれたのは、天晴の適評と思はれた併し、炭手前の相濟むまで唯此椿事が一つとは扱て、心細き次第だが、兎に角庵主は引續いて心入れの懷石を運び出され、使用の器具及び献立は左の通りであつた。

- 汁 嫁菜、三州味噌
- 向附 織部、焼のぞき
- 椀 鶉よせ、白魚、花菜、木
- 焼物 黒塗内櫻蒔繪重箱、煮物 萩焼手鉢、椎茸
- 吸物 みる貝、松の實
- 八寸 若鮎、百合
- 香物 斑唐津小鉢、酒器 青磁蓋鉢子、鈍阿焼徳利、柏手及ベルシヤ盃
- 菓子 栗饅頭蒸して

食器はアツサリとして春茶向きを専らとし、懷石は他の奇を衒はずして總て無難なるが何より嬉しく頓て食後の中立と爲るや、寒風にチラ／＼と雪片の舞ひ始めしにぞ、老人優遇の注意周到で、腰掛の前にカン／＼と炭火を焚き、圓座の傍に帽子と眞綿二把を差置かれたのは、中立中老人は帽子を被つて眞綿で頸を巻けとの心入なるべけれど、是れ將た庵主の指圖とも覺えず察する所年寄の冷水を戒められたる令夫人が眞綿で頸の強意見ならんとは、相容の一人の解釋で、是れには余も成程と賛成せざるを得なかつた、去る程に水屋の方より陰々として響き渡つた大銅鑼は、折柄吹起つた風聲に紛れて大小の區別も定かならざる處に、庵主が突然蹠口より現はれ出て、正客に一揖の後頓て引き下つて打ち残しの一點を打たれたのは、今日の珍客を貴人扱ひにしたる庵主の茶略至れり盡せりと感心した。

四

椿庵の後座は床に古銅六角龍頭耳花入を置いて、咲き頃の桃色牡丹一輪を挿まれたが、道風繼色紙に對する花入は斯くもあらうかと思はれた、扱て茶事も佳境に入りて愈々庵主の濃茶手前と爲るや、使用の器具は左の通りであつた。

- 茶入 大名物羽室文琳 盆 藤重藤巖作溜塗四方盆 袋 在中庵廣東織留
- 茶杓 利休共筒 茶碗 名物手井戸 水指 木地曲
- 建水 砂張 蓋置 青竹引切 茶 松の花

上掲器物中羽室文琳は元堺の藥師院に在り、其後土屋相模守所持たり、何時の頃若州酒井家の所藏と爲りしか、大震災直前酒井家藏器入札賣却の節椿庵の寶藏に舞ひ込んだ者で、從來諸茶書に掲載せられ、最近大正名器鑑に詳記せられて居る者だから今又絮說せざるべし、此茶人袋四個の中當日は、小堀遠州が嘗て在中庵と云へる秘藏の茶入(現今藤田平太郎男藏)に掛けたので、在中庵廣東と呼ぶる、名物裂の袋を用ひ藤

重藤巖造の溜塗四方盆に載せて、盆點手前を興行せられた庵主の宗匠振りは一、同をして啞然として驚目駭心の外なからしめたが、餘りに盆點に精神を打ち込んだ結果として、スツカリ茶筌透しを打ち忘れ、茶入を拭き終るや否や、行きなり茶碗に茶をぶちまけて茶筌を動かし始めたので、一回再び啞然として流石は椿庵の御手前なりとて、始めて會心の笑ひを洩らす事を得た、是に於てツラ／＼濃茶道具の組合を案ずるに、前記大名物茶入に配するに利休共筒で筒に壽命參るの直書付ある茶杓と、昨年前田侯家入札會に現はれた名物手井戸茶碗とを以てして、魏吳蜀三分鼎立の勢をなさしめ、孔明裸足の茶戰計畫は、縦令へ背後に如何なる智囊の參謀が控へたりとも、椿庵御大の指揮其宜しきを得たる効果に外ならず、曰く道風繼色紙、曰く天明八角口釜、曰く古銅龍頭耳花入と道具の系統を辿り來つて、到頭右三茶器に想及すれば、今度の茶會が椿庵茶事中の壓卷なるのみならず、大正時代諸名流茶會中に於ても亦錚々の部類に入るべき一會たる事は、余が何等の危険を感ぜずして直に裏書する所である。

五

椿庵新席で濃茶一巡するや、薄茶は同席で多門店の丘崎彌太郎が代點し、水指は土岐二三所持信樂耳付茶入は、金輪寺棗茶杓は象牙、建水は木地、曲蓋置は鐵羽子形と替り、唐物朱菊形盆に不昧公好み若草梅打出總菓子盛りて、一入黒筒曆手高麗茶碗を使はれたが、茶事は是れにて打ち切り、新席開きの事として歸路廊下傳ひに案内せられたる茶室續きの八疊廣間には、床に元人王庭吉の墨蘭自畫讚を掲げ、書院には今年の勅題河水清の圖案とも見らるゝ山水蒔繪硯箱を飾り、床脇棚には松花堂筆卅六歌仙歌色紙帖を置き、茶器の箱書付類を示し、又番茶と水菓子を出して此處で緩々餘談を盡くすべく用意せられたのは、如何にも氣の利いた接待法であつた而して此餘談の中心と爲つたのは、言ふ迄もなく癸亥大震火に於ける當家罹災の情況で、庵主夫婦は當時箱根強羅の別荘に在り留守居は自動車運轉手外男女二三人に過ぎなかつたので、修覆手入れの爲め倉庫外に取り出してあつた弘法大師眞筆般若經解題一卷と大聖寺前田家傳來粉引茶碗を寶藏に取り入るゝ注意を缺き、終に此二名物を火中に委するに至つたさうである、抑も大師筆金剛般若經解題と云へるは、普通經文の文字に二倍

する大きさて行草の間を行つた達筆は大師遺墨中有數の神品たり、其殘缺としては現今加茂神光院所屬の分が一番長く、其他十行前後の斷片は高松宮家外二三名家の古筆帖中に見受けらるゝが、當家のは彼の赤星家入札會に現はれた者で、一卷の長さ二間餘に亘り、眞個國寶中の國寶で、癸亥震火に焼失した世間幾多の什物中第一の貴重品と云ひても宜からうと思ふ、扱て又前田家傳來粉引茶碗は此種中有數の名品で、余は之を大正名器鑑に収録すべく用意して置いたのに、是れ亦祝融子の呪ふ所と爲つたのは洵に無殘の至りである、其處で庵主に無心して右焼け残りの粉引茶碗を一覽せしに、光澤は少しくカセたれども、原形其儘一點の疵をも負はなかつたのは、二重箱に收め置かれた茶人愛護の御蔭で、日本の寶物保存上茶人の功德の洪大なのは、此一事を以ても明白である、斯くて椿庵主人は、尠からず大震火に祟られたが、幸に寶藏が助かつて今回使用せられた數々の名品は一層其價値を増し、新席は従前よりも遙に都合よく出来上つたから、椿庵此處寧ろ焼け廣がりと云つても然るべく、余等同人は今度の茶會の大成功と併せて、玉椿の八千代まで芽出度此點をも御祝申さうと思ふ。

今里茶會

上

(大正十五年二月十二日)

三井物産會社重役藤瀬政次郎君の令室秀子夫人が、爲人快濶で器用で、謠曲を好み和歌を詠じ、其他各方面の趣味に富まるゝは人の能く知る所であるが、斯かる女性の趣味的向上が終に茶事交會の門に達すべきは、晚鶉の時に歸ると一般固より當然の歸着であるから、余等同人が秀子女宗匠より粗茶一服進上との案内に接するのは、遠き將來に非ざるべしと期待して居た處が、果して然り、二月十二日白金今里町藤瀬邸の正午茶會に出席すべく豫想通りの佳招を蒙つた、是に於て昨日は椿庵新席の客と爲り、今日は新進女宗匠の約に趁くの茶福を祝しつゝ、白金より目黒行き電道を進んで、舊火藥庫手前より左折し、程なく藤瀬邸の正門を入りて、母屋と離屋との中間より南向きの廣庭に立出づれば、芝生に續く松杉雜樹の間に於て、前面の遠景を一眸中に

展開する眺望得も言はれず、更に進んで芝生の盡くる處に至り、一段低き木立の間に分け入れば、此處に瀟洒たる一小亭あるが、即ち今日の寄附で、床には蓮月尼の短冊を掛けられたが其歌は、

早春月

川そへの柳の枝にかゝりけり

のこる氷のかたわれの月

と云ふので、初春の景物に就き人の將に言はんとする處を道破して居るのが嬉しかつた。顧みて席上を見れば、縫取敷物の上に加納鐵哉作古文彫刻樺洞大火鉢を置き、之れに銅罐子を掛けて温室用に充て、其傍に桐手爐と緞部嶋筋火入を備へた一閑四方蓑盆を置き並べ、猶ほ小棚に樓閣山水詩繪硯箱を飾り、室隅に桐洞瓶掛を置いて銀瓶を掛け、茶盆に淺間焼茶碗を載せたる寄附飾附は直に以て女主人公の注意周到を卜するに足る。扱て今日の客組は益田鈍翁、原三溪、野崎幻庵、伊丹揚山と余を併せた五人なれば、頓て主人の出迎へあるや鈍翁を先達として順次庭前に立ち出でしに、老樹の

林立する間に傾斜地勢を利用して奇石怪巖の溪流を設け、露地の中間に在る土橋を渡りて石徑忽ち一轉すれば、庵室に對する流れの中に苔蒸したる天然石の蹲踞石あり、四隣閑寂一鳥啼かず山更に幽なりとも謂つべき、斯る仙境を東京市街の町續きに發見せんとは全く余等の意想外であつた。

中

藤瀬邸の庵室は四疊中板で、床に南浦紹明國師の墨蹟を掛けられたが、其文は左の通りである。

曇禪人袖紙來求道號 號之日竺翁 今天下做僧爲比丘者 皆是竺乾瞿曇氏之者也 所以號之日竺翁

時永仁二祀中冬上澣

崇福南浦紹明書印

南浦紹明國師は駿河の人で、初め隆蘭溪に參し、後支那に赴きて虛堂禪師の印可を受け、歸服後太宰府の崇福寺を董し、徳治二年北條貞時の聘に應じて、建長寺に住持し、七十四歳を以て遷化せられた高僧で、後圓通大應國師と諡せられて、大燈國師は實に其

門下より出たのである。而して今日の一軸は書風高雅で自ら名僧の氣格を留め、表具も結構に見受けられた。斯くて一同着席するや、庵主出て、殷懃に挨拶の後直に炭手前に取掛られたが、其器物は左の通りであつた。

釜 蘆屋丸形松竹梅地 炭斗 時代竹組 香合 染附形物竹はじき

羽箒 玄鶴 灰器 慶入焼ぬき 灰匙 火箸時代桑柄

如上器物中染附竹はじき香合は丸筒の甲に竹の葉形のはじきあるに因りて此名あり、形物として番附は低き方なれども類品至つて稀にして、余の之を拜見するは實に今日が初めてなり。扱て女宗匠として彼の紳士茶人が一夜習ひのお手前とは事違ひ、美事に炭手前を終られてより後、更に自ら懷石を運び出されたが、其器具及び献立は左の通りであつた。

汁 蔞三州味噌 向附 寄せ物五種、鯛、山葵、甘酢、椀 昆布、鱒、柚

燒物 海老天、鉄羅 吸物 土筆、鴨梅 八寸 からすみ、若鷲、栗

香物 鈍阿焼、小鉢、澤庵、薄切、酒器 宋胡祿鐵銚子 菓子 うぐいす餅

懷石は何れも時候物で鹽梅申分なく、食器に於ては祥瑞青磁、染附、吳洲、萩焼の取合せに春茶氣分を現はしたばかりでなく、之を寄せ集められた多年の丹精も窺はれて誠に有り難く感服した。

下

今里茶會の懷石終りを告ぐるや、一旦元の寄附に中立すれば、合圖を用ひず庵主自ら出迎はれたから再び入席して床中を見れば、古銅獅子耳花入に木瓜及び佗助を挿まられたる風情、初座の墨蹟と相對して寸分動かぬ取合せである、而して庵主が例の洗練したお手前で濃茶を點出さるゝを見れば、使用の器物は左の通りであつた。

水指 木地曲 茶入 京窯銘雛 茶杓 古田織部作

茶碗 釘彫伊羅保 建水 丹波 蓋置 青竹引切

茶 松 柏 園 詰 代々木の

如上器物中釘彫伊羅保茶碗は光澤濃潤、作行美事にして、然かも一點の疵だに見受けざるは此種茶碗中の佳品と謂つべし、京窯茶入は其形稍金華山青江手に類して居る

が腰廻りに笑靨の如き凹あるなど後窯の特色を發揮して伊羅保との取合せ一言もなかつた斯くて濃茶一巡するや同席にて引續き庵主自ら薄茶手前を興行せられ、水指は出雲焼南蠻寫と代り後本鶴模様茶碗益田鈍翁好み金林寺茶入象牙茶杓木地曲建水でアツサリと後席を切上げたる後廊下傳ひに六疊廣間に案内せられて此處で箱書附を示し又番茶水菓子等を出し緩々餘談を繼がしむる接待振り流石に行届いたものであつた扱て昨年後半期より東都の茶事一段の隆盛を極め新年に入りても馬越幸次郎君やら岩原椿庵君やらの茶會で大分市が榮えたが今度は亭主がガラリり變つて女宗匠が一會を主宰せられたのは斯道の爲めに誠に悦ばしき次第である、惟ふに藤瀬夫人は劇職に當れる夫を控へ通學盛りの子女を持ち廣大なる一家の主婦として日常多忙を極むる其間に餘裕綽々として社交的家族的に種々の趣味を味ひ、堂々たる男子も兎角指を染め難き茶事の主人と爲つて良妻賢母以外に日本女性幽雅高尚なる風趣を示さるゝは余等の感服し又健美する所て其初陣とも云ふべき今回の道具組等に於て多少の長短を云々するは無用の業なり夫人が頓て茶臘を

重ねるに隨ひ天晴一流の女宗匠たるべきは余等の今より保證する所て大正茶界の爲めに先づ此女宗匠を得たるを同人と共に大いに祝福しやうと思ふ。

華甲自祝茶

(大正十五年二月十四日)

上

麻布廣尾祥雲寺境内に自久庵と云へる庵室を構へ居る表千家宗匠宮北宗春は今年華甲の齡に達したので二月十四日正午其自祝茶會を自久庵に開かれた而して當日の客組は馬越化生石黒況翁山澄靜齋と余との顔觸れなので庵主の悦び大方ならず今日は三國一の茶客を迎へ得たりとて一段緊張味を示されたが三疊寄附に少憩の後二疊臺目自久庵に繰込めば床には世尊寺行尹卿の朗詠切が掛つてゐた而して其文句は

九夏三伏之暑

月竹含錯午之風

玄冬素雪之寒

朝松彰君子之德

華甲自祝茶

われみても久しくなりぬすみよしの

きしのひめ松いくよへぬらむ

と云ふので、華甲茶會には寸分動かぬ一軸なれば、庵主の得意嘸かしと思はれたが、頓て炭手前に取掛らるゝを見れば、其器具は左の通りであつた。

釜 大西五郎左衛門作 香合 備前牡丹形 炭斗 松民作葛桶

羽箒 鶴 灰器 柳川焼 灰匙 松花堂好銀

火箸 時代桑柄

如上器物は物柄も銘柄も總て目出度盡してあつた中にも備前焼牡丹香合は身の底に一花開蓋裏に三界薫の文字ありて、作行極めて精巧なのが一段座客の視線を惹いた、斯くて炭手前終るや宗匠自慢のお手料理を運び出されたが、今日早朝自ら芝浦に出張して白魚を調達し來つたと云ふ一事を以ても、其丹精の程を知るべく、椀のきんこ、海老しんじよ、扱ては吸物のスツポン汁など、自から料理通の腕前を現はして、客に並々ならぬ風味を味はせたが、扱て懷石終つて庵室脇の腰掛に中立すれば、香林院の

早梅が今や満開の見頃と爲りて露地に一段の初春氣分を漂はすのを是れも御馳走の一種かと飽かず賞玩なし居る折柄、腰掛より程遠からぬ祥雲寺の鐘樓に時ならぬ一杵の鐘聲が耳を劈いて起つたので、一同何事かと驚けば、是れなん今日の合圖の鐘で撞き出したる其數は五點であつた。

下

宮北宗匠が祥雲寺の許可を得て、茶室の合圖に鐘樓の鐘を撞いたのは近頃破天荒の茶略であるが、今日の次客石黒況翁の談に、自分が鐘の供養を受けるのは今度が實に二回目である、其一回は明治三十一年小松宮殿下に扈從して新潟赤十字社總會に赴かんと、長岡より川蒸氣で信濃川を下る時、與板村某寺の住職藤井界雄師が明日與板御通過の節、殿下の爲めに梵鐘百八、貴下の爲めに同十五を撞いて敬意を表すべしと前日より申込まれたが、頓て與板の川岸に近づく頃果してゴンと撞き出したから、自分は殿下の御名代として甲板に出で其鐘を聞いた事があるが、次は今日の合圖の鐘で、生來實に二度目であると語られたのは時に取つての一興であつた、扱て後席

の床には了々齋作銘三番叟と云へる一重切竹花入に銘壽と云へる薄紅椿を活け、宗匠が濃茶手前に取掛らるゝを見れば、使用の器物は左の通りである。

水指 盛阿彌作眞塗手桶 茶入 織部焼 茶碗 斗々屋銘浦島

茶杓 山本退庵作 銘福祿壽 建水 木地曲 蓋置 青竹引切

茶 好の白

如上器物は何れも目出度き銘柄で、最も雄辯に還暦自祝の意を説明して居たが、濃茶一巡するや同席で薄茶の饗應あり、水指は黄瀬戸遠州好み十個の内、茶入は末廣蒔繪大棗茶碗は片桐家傳來高麗銘八重垣と萩焼とを取合せ、干菓子銘まで長生殿とは誠に目出度き道具組であつた、今や東都に於て茶事の益々隆盛なる反比例に有爲の宗匠は甚だ少く、自庵で茶會を催す者など殆んど皆無と云つても宜い、其中に、口も八丁手も八丁で折々虹の如き氣焰を吐く宮北宗匠は、失禮ながら鳥なき里の蝙蝠と謂つて宜からう、併し宗匠も既に華甲に達したからは、娑婆氣も漸く薄らいで、頓て沈着老熟なる宗匠と爲らるゝ事であらうから、今度の茶會は華甲を境として、其心機一轉

の首途たるべく、余は此意味に於て此茶會を最も意義ある一記念會と看做し、悦んで之を祝福しやうと思ふ。

春宵文星會

(大正十五年二月十六日)

上

三井合名會社理事有賀長文君は、二月十六日の夕刻より、麻布飯倉片町の自邸有節庵に東都屈指の文星を會して、茶味あり雅味ある一會を開かれた、此日は舊曆の正月四日、春もやゝ景色とゞのふ月と梅の實況が目前に現はれた夕景より招ぎに應じて來集した人々は、三上參次、徳富蘇峰、笹川臨風、關野貞、後藤朝太郎、團伊能、大島雅太郎、岩井尊人等博士に非ざれば、學士若くは一代の文豪連であつたが、ドウした風の吹き廻しか、余も亦席末に陪する事を得たのは誠に望外の光榮であつた、斯くて有賀邸では最初珍客を母屋の西洋間に導き、新進の天才と目されて居る三井物産會社員法學士岩井尊人氏を諸先輩に紹介せられたが、三上博士は先刻既に岩井氏を熟知せらるゝ

者の如く、一同に向つて自分は岩井君に三個の特異點があらうかと思ふ、其一は希臘原語よりホーマーのイリヤード・オデッシーを翻譯した事、其二は海外在勤中英佛間の飛行機上で英詩を作つた事、其三は斯の人にして案外にも物産會社の肥料やら人絹やらの商務に當り居る事であると説明せられたのは、一言にして能く岩井其人の特徴を道破した者であらう、岩井氏は何時の間に研究したのやら、夙に萬葉集に通曉して一種の國風を吟詠し、又水彩畫を巧にして英國の藝術に其天才を認められたと云ふ事だ、徳富蘇峰君は興味を以て頻りに岩井君の經歷を傾聽されたが、今夜は主人の希望に任せ、岩井氏が席上水彩畫を揮毫して之を來客に分配する筈なので頓て一同食堂に入つて鄭重なる支那料理の饗應を頂戴し終り、庭先より石段傳ひに崖下の有節庵と云へる茶寮の一構へに動座すれば、八疊二間續きの廣間の床に秋月筆達磨の圖を掛け、書院に文房飾りを爲し、次の間の毛氈の上に筆硯料紙を揃へて、岩井氏の席畫揮毫が程なく開始さるべく夫れ、準備してあつた。

下

有賀邸に今夜來集の群賢が相率ゐて有節庵廣間に着座するや否や、岩井尊人君は直に水彩畫揮毫に取掛られたが、君は洋服姿で胡座をかき、左手に料紙を持ち、右手に畫筆を揮つて、傍人と談話しながら横なぐりに颯々と塗抹する其敏捷驚くべく、而して英國田舎の風景など幾多の畫題を腹笥に蓄へて居る者と見え、四五分間に一枚づゝ描き了る有様には、一同舌を巻いて感服せざる者もなかつた、斯て程なく十餘枚を描き終れば、今度は得意の新體歌をすらくと認めたが、其中に

みづらみをめぐりぬ秋のもなか月

さんくと音あり水のごとひやゝか

しらかはのしげみをとほしてポタリ

月のしたゝるま夜なりしかな

と云ふのがあつた、此時一方では席上の諸星に記念帖を書かすべく主人の運動奏功して徳富翁が先づ帖の題箋に有節と認め、更に巻頭に風行水上自成文と落筆すれば三上、笹川、關野、後藤、團、大崎諸君、又遅れ走せに參會した米山、梅吉君等が思ひの

詩歌俳句を書附けて忽ち記念の一帖が出来上つたのは、會主の役徳とは云ひながら聊か健羨に堪へなかつた、此夜有節庵には六疊の別室に薄茶攝待の用意あり、床には探幽松花堂兩筆の布袋壽老、江月、江雪、江雲三僧讚の一軸を掛け、伊丹揚山が宗匠役を勤めたが、一座の器物は左の通りであつた。

釜 淨圓作廣口

水指 尹部烏帽子箱

茶器 遠州好み木地棗

茶杓 象牙

茶碗 古雲鶴筒

替 一入黒了々齋銘岩

建水 砂張椀形

蓋置 太竹引切

扱て今宵の如き會合では筆歌墨舞も面白く、酒香茶熟も亦結構だが、到頭人氣を集むる者は驚四筵的高談で、處々に虹の如き氣焰が揚がつた中にも、徳富君の頼山陽談後藤君の支那風俗觀は最も一座の感興を唆つた、而して余は後藤君に其頗る有益なる支那見聞談を繼がしむべく、當夜初對面の君を交詢社に紹介して、廿二日午後四時半より幸ひに之を實現する事を得たが、是れは偏に有節庵主の賜であるから、先づ以て斯かる興味ある會合を催されたる好意を庵主に謝し、少しく蟲が好過ぎるかも知

らぬが、今後も折々之を繰返されん事を併せて希望する次第である。

夷川邸鑑器會

(大正十五年三月一日)

我が大正名器鑑も今や漸く進んで第七編の印刷中で、本編には朝鮮茶碗の中堅たる井戸、斗々屋等を收容して居るが、昨年五月京都夷川藤田耕雪君、藤田平太郎男、弟徳次郎君邸で檢覽した同君藏廣島斗々屋、大阪舊大家山口吉郎兵衛君藏青井戸蓬萊和田久左衛門君藏ノンカウ腰簍茶碗等に再調査の必要が起つたので、已むを得ず更に之を耕雪君に懇囑した處が、早速快諾を興へられ、又昨年此事に周旋の勞を取られた京都道具商土橋嘉兵衛翁も大いに盡力して、山口和田兩家の藏器を總て京都藤田家に持ち寄るやう諸事好都合に運ばれたので、余は二月二十八日夕刻東京發京都に向ひ、三月一日午前十時土橋翁と同道夷川藤田別邸に推參して、先づ奥書院に罷り通れば、床には季節柄是眞筆内裏雛の圖を掛け、床脇棚には今日再調査の茶碗數點を並べ

置かれたが、聞けば今日は大阪の山口吉郎兵衛君も出入道具商磯上清次郎子と共に來會せられ、和田久左衛門君は親戚に不幸があつた爲め、大阪の老道具商砂元吉子を代理として腰簀茶碗を持參せしめらるべしとの事で、六點の名物茶碗を容易に再調査する便宜を得たのは誠に無上の仕合せであつた。斯くて午前十時より午後一時頃まで一氣呵成に調査を遂げ了るや、耕雪君夫婦は時分なれば別席にて粗飯を差上ぐべしと言はるゝにぞ、遠來の故を以て余が先達に罷り立ち、先大人香雪翁好み四疊茶席に打通れば、床には江月和尙に宛てた松花堂の尺牘を掛けられたが、其文句は左の通りであつた。

竹采女殿御下向に候間啓上申候、先日極豊州よりの便に尊簡を辱くし即ち御報申上候、定めて相達し可申候、御詠吟被遊付辱く候、乍憚和韻仕御返事に書附申候、只今如此存寄候。

いつよりも今年はおそし九重の

花も咲かてや君を待つらむ

なれし春をわするなあつたがた

都よりけに花は見るとも

御上洛待かね申す外無之候、遠州御下向御茶過ぎたるべく候由、巷説候、急使何事も申残候たゞ御ゆかしさばかりに候、恐惶頓首。

二月廿七日

龍光和尚拜上

惺々翁花押

二

夷川藤田別郎に於て名物茶碗再調査の後、午餐を差出すべしとの事であつたが、呉れも手敷を煩はさぬやうお断りして置いたから、眞の辨當式だと思ひの外、先づ茶室に案内せられ然も其床の掛物が松花堂より江月和尙に宛てた尺牘で、中に後上洛云々の文字あり、又今年はいつよりも後れて花の未だ開かぬのは、君の入洛を待ち居るならんなど云ふ二首の歌があるのは、何とやら主人が余に對する會釋と覺しく重々心入深き待遇に感服した、而して右一軸の前には神尾藏帳品で端反りの形縮り傳

世銅色の美事なる花入に咲頃の淡紅椿一枝を活け、時代黒柿爐縁に與次郎作五徳を置いて、不味公好み淨味作肩霰釜を掛け、主人自ら炭手前に取掛られたが、其器物は左の通りであつた。

香合 染附桃形

炭斗 唐物業籠

灰器 ノンカウ焼抜き

羽箒 鶴

灰匙 時代桑柄、櫻皮卷

火箸 時代桑柄鐵ニ唐草金象眼

如上器物中不味公好み淨味作肩霰釜は、金味蘆屋と見紛ふばかりにして、肩先だけに霰を見るが面白く、菜籠炭斗、ノンカウ灰器など取々優秀品なる其中に於て、殊に一座の人氣を集めたのは染付桃形香合で、手嵩恰好よく、純白地の甲に藍色の葉形鮮かに現はれて、白壁に一點の微瑕なきは所謂一品物と見受られた、斯くて一座は余の外に山口吉郎兵衛君砂元吉磯上清次郎、土橋嘉兵衛の五客であつたが、耕雪主人が自ら運び出された懷石を見れば、一閑半月膳に盛阿彌黒丸椀で其器物及び献立は左の通りであつた。

汁 干大根菜、三州味噌

椀 甘鯛、菜、袖

向附 乾山作笹の繪、鯉、甘草、山葵、甘酢

焼物

備前三足肴鉢、あぶらめ木の芽醬油附焼

煮物

黄瀬戸銅鑊鉢、筍、若布

強肴

安南耳附小壺、生雲丹

吸物

土筆、梅肉

香物

丹波耳附小鉢、深庵薄切

酒器

鐵鉢子、及鈍阿燒唐津、寫德利、青磁香爐形盃

三

夷川藤田邸で前記の御馳走に出逢つたのは所謂犬も歩けば棒に當るの類で、今日はお手輕な辨當頂戴と思ひの外、料理と云ひ器具と云ひ、誠に至れり盡せりて、向附の乾山笹の繪はケンザリとして今焼きたらんが如く、綺麗に、備前三足肴鉢は厚手の頑丈作りで、中高く反り饅頭ヌケ四五點美事に現はれて居るが、是れは關西數寄者間に定評ある名鉢であるさうだ、猶ほ黄瀬戸の銅鑊鉢の黄釉淡く丹礬濃いのが目に着いたが、此名器揃ひの中に一段高く抜け出て居るのは青磁香爐形小壺で、是れは舊冬井上侯爵家藏器入札會に現はれた名品であるが、其雨過天青色の美事に於て、且つ三足の香爐形でありながら、盃として真向きの小形なるが、斷じて天下無類と言つて宜からう、而して彼の強肴を盛つた安南耳附小壺は、頓て彼の青磁と共に盃として上戸連に併用されたが、是れは竹の節形で一面に竹の繪あり、箱に陳元贊筆で安南竹と云へる

金粉字形があつて、青磁と兩々相並んだ處は、小品ながらも座中に一大奇觀を呈して居た。猶ほ此名盃に花を持たせる爲め、徳利をワザと鈍阿焼と逃げられたのは、主人が器物の利用上最も巧妙なる茶略であるから決して之を見逃してはならぬ。斯くて懷石終りを告ぐるや、席上には小形陶器火鉢と冠手火入を備へた松木地合利蓋煙草盆を出し、石州好みと覺しき内朱外青漆船形菓子器に、雛祭を聯想せしむる生菓子と干菓子置き合せて、主人自ら薄茶手前に取掛られたが、使用の器用は左の通りである。

水指 朝鮮唐津一重口

茶入 信樂新次郎彫銘

袋 日野廣東

茶杓 遠州作權左衛門と

茶碗 志野筒籬模様

替茶碗 黄伊羅保小服

建水 高取燒

蓋置 染附蟹

今日は最初より茶事と斷らず、唯名物茶碗再調査の爲め入浴した余に所藏の珍器を示さるゝのが、一會の趣意なので、水指も建水も共に陶器を使はれたるなど、道具の組合せを念頭に置かれぬのが却て嬉しく、且つ薄茶の代りに濃茶を點てられたのも亦誠に有難く、趣向は至つて軽きやうなれども、主人の用意は極めて親切周到であつた。

四

前記藤田邸の一會は前以て茶事と觸れ出さず、無造作に所藏の珍器を余等に鑑賞せしむる趣向であつたから、見渡す限り一品として凡物なく、信樂新次郎茶入は作風頗る京窻新兵衛に類し、底に新の一字のみが彫付けてある場合には、往往新兵衛と誤認せらるゝ者だが、新兵衛同時代の名工で、此茶入は別して彼の傑作であるから、既に大正名器鑑にも収録したのである。遠州茶杓は權左衛門への贈り茶杓で、節上半面黒く、權先の丸くして短きは先般井上侯爵藏器入札會に現はれた同作柏樹子茶杓に酷似して居る。志野茶碗は筒形で籬に梅の模様あるのが、時節柄一言もなく、之に配した黄伊羅保茶碗も高臺に石ハセなどありて、志野と寸分動かぬ好一對である。其他染附蟹蓋置、高取建水等何れも凡物とはないが、別して朝鮮唐津水指の上半黒、下半白釉で内側に瀧の如き純白の一ナダレあるのが、一同の視線を惹き付けた處で、余等が主人の好意に甘へて無遠慮に取籠望蜀と出掛けたのは、懷石中に彼の香爐形青磁盃が出現した以上は、主人が先般井上侯入札會で感得せられた彼の御所丸黒刷毛江月和

尙銘夕陽茶碗を此機會に於て拜見したしとの一事である是れは今日の相客山口吉郎兵衛君が未だ之を一覽せられぬと云ふ理由もあり又余が井上家藏器入札世話方の一人であつた緣故もあると云ふ口實で之を主人に懇願した處が早速快諾あり思ひ掛けなく天下の名茶碗を重ねて當家で拜見する事が出来たので山口君を始め同席の砂磯上兩人の如き生涯中又と得られぬ好運であるとして共に感涙を催されたのは誠に尤も千萬である抑も此茶碗が當家の所有に歸したのは主人が唯珍器を愛翫すると云ふばかりではない先代香雪翁は故世外侯を大恩人として生前最も尊崇せられたので主人は井上家藏器入札の場合に臨み先志を繼ぎて報恩の爲めに是非とも一名品を手に入れたしとして遂に彼の夕陽茶碗並に青磁香爐盃を獲られたので其動機が動機だから愈々落札するまでの心遣ひは尋常に非ず戸田土橋など其事に與つた連中は此落札品に對して主人が非常に歡喜せらるゝ有様を見て皆其篤志に感服したと云ふ事である而して余等が今日更に之を拜見して端なく世外香雪兩偉人の倂をも偲ぶ事を得たのは誠に近來得難き茶福であるから余は相客一同に代つて

謹んで主人に感謝しやうと思ふ。

住友男春翠

(大正十五年三月八日)

浪花の長者春翠住友吉左衛門男は去冬以來風邪に罹りて病褥に親しみ勝ちであつたが今年に入りて狭心症を併發し病勢頓かに革まりて三月二日六十三歳を一期として遂に白玉樓中の人と爲つた男は徳大寺家の出で故實則公及び西園寺陶庵公を兄とし所謂華胄の身を以て明治二十五年入つて住友家を繼ぎ日清日露及び歐洲戰爭に跨りて同家財政の進展に善處し傳家の銅鑛業を恢弘し又銀行業を擴張し其他諸商工事に着々家業を振作して僅々三十年間に世界的富豪の一員に加はられたのは同家祖先積善の餘慶とは云ひながら男が乃兄等に譲らざる聰明の資質を以て内外大變革の間に立ち指揮畫策其宜しきを得たるに外ならず即ち住友家中興の主人として同家の家乗乃至大阪財政史延いて日本經濟史上にも特筆せらるべき者であ

らう、其上男は多方面多趣味で、茶事を嗜み、謠曲を好み、書畫骨董を愛し、建築造庭器具製作等に對して一種の意匠と手腕とを持たれたので、遺作品も數々あるやうだが、何れも高尚優雅なる品性の閃きがあつて、一見其人を思ふに足ると云ふ、其詳細に就ては追つて男の傳記中に掲載せらるゝ事であらうが、余の男と接觸したのは無論茶事風流の方面であるから、他事は差措き唯此方面に於ける余の感想を略叙し、以て聊か哀悼の微誠を致さうと思ふ。

住友男は同家代々の通稱を繼いで吉左衛門と云ひ諱は友純春翠と號し、好日庵と稱された、爲人恭謙眞摯にして、人に接して温好物を處する愼密よく大局を辨じて衆を統率するの才徳あり、大家の主人として實に理想的の人格者たりしは人の好く知る所だが、壯年の際より風流韻事に耽るを避け、最初は傳家の銅鑛業に關係ある古銅器蒐集に専念せられ、徐に年齒の加はるを待たれたから、趣味の漸く向上して進んで茶道に入られたのは其五十五歳即ち大正七年頃であつたらうと思ふ。

二

住友春翠男が大正七年頃より茶事に其心を寄せられたのは、唯自身の物數寄ばかりでなく、明治二十三年に物故せられて雅名を一翠軒と云はれた先代主人の遺志を繼承せられたのである、住友家は二百餘年來銅鑛業を家業として、浪花長者の一員に列しては居たが、維新の大變革を経て家業上屢々危機に瀕した事があるので、所藏の茶器などは至つて手薄であつたらしい、然るに先代一翠軒は晩年漸く茶事に志し、明治十八年には名物古井戸六地藏と云へる茶碗を三千五百圓で買収し、此茶碗を以て一度茶事を催さんとした處が、程なく病を得て其志を果さなかつたので、春翠男は大正八年先代の三十年回忌に當つて、茲に其遺志を成就しやうと云ふ希望を抱き、是れが頓て其茶道に入るの動機と爲つたのである、而して平常愼重綿密なる男の事として、前以て其用意に取り掛り、大正五年頃よりポツ／＼名器蒐集の端緒を開きて、先づ秋元子爵家所藏中興名物打出茶入、加州村家所藏生海鼠手本歌三輪山茶入等を買収し、大正七年頃内試験の爲め寸松庵色紙菊の歌と打出茶入とを取合せ、入魂の人々のみを招いて小茶會を催されたさうだが、男が愈々茶道の本舞臺に立ち、大阪市南端茶臼山本

邸好日庵に於て先代主人の三十年回忌茶會を催されたのは大正八年十一月下旬より十二月月上旬に掛けての出来事、余が初めて男の茶事に遭遇したのは實に此時であつた爾來余は數回男の茶會に出席したが、中にも一代の大出来茶として今猶ほ記憶に存するのは大正十年五月茶白山知足齋初風爐茶會、同年十一月京都東山鹿溪莊口切茶會であつた、而して此等茶會の詳細は大正茶道記に詳記してあるから、今又之を再說せぬが、男は一會の茶事を構成する道具組等に於て丹念に其意匠を凝すばかりでなく、大阪茶白山住宅の經營も京都鹿ヶ谷別莊の繩張りも、一切自身宗匠で會て他人の手を借らず、其他須磨、住吉、有馬の別業の如きも夫れ、其場所に応じて設計し、多年實地の經驗を積まれたので、建築々庭の造詣に至つては當代男に比肩する者甚だ少からうと云ふ事である。

三

住友男の趣味的事業として、古銅器蒐集が如何に國家工藝上に有効有益であつたかは、去冬泉屋清賞と題する一篇中に披露したから、今又之を再說せざるべし、又男の好日庵、鹿溪莊等で開催せられた大出来茶の一伍一什も、其時々茶道記に記載して置いたから、是れ亦之れを繰返すの必要もなからう、本來余は男と東西居所を異にして相接觸する機會が少かつたので、茶事交會以外に於て男に關する思ひ出は至つて少い方であるが、男が義弟三井泰山君と同列で、我が伽藍洞一木庵に來臨せられた時の正客振などより、其平生を推考すれば、明かに其性格を窺ふ事が出来るのである、即ち男の事物に對するや極めて眞摯で、且つ緻密なる研究的態度を取り、隅から隅まで几帳面で、一事も忽にせぬ氣質であつた、余は不幸にして未だ男の遺作物を頂戴して居らぬが、或時戸田露朝の談に、男は何人に對しても恭謙にして會て上下の區別を置かず、お出入道具商等に對しても頗る丁寧で、長時間對坐しても決して怠容を示さず、言葉遣ひも鄭重にして男が居住ひを崩された所を見た事がないと云ふ事である、隨つて茶器などの好みも極めて綺麗にして完全なるを期し、自ら茶杓を作らるゝ時は、其茶杓の綺麗なばかりでなく、筒若くは箱に至るまで心行くばかりに具備せざれば已まなかつたさうである、昨年十月の事であつた、余は兼ねて男に自作の茶杓を呈上せ

んとしたが、唯夫れのみでは物足らぬ心地がするので、恰も西園寺陶庵公の滯京中なのを幸ひ、事由を具して公に筒書を願ひ出でた處が、住友のならば鹿ヶ谷の茶室で使ふであらうから、銘を鹿溪とするのが宜いかも知らぬが、餘り字畫が多くて書き悪いから、東山として置かうとて直に筒に書付けられたので、余は其箱に

拙作茶杓陶庵公銘曰東山野竹生光乃贈住友春翠男男請笑受之

大正乙丑晩秋

箒庵生

と認めて翌月光悦會に出席した時、戸田露朝に托して之を男に呈上した處が、男は大に喜ばれて目下病中であるから、快癒次第直に禮狀を差出すべしと露朝に傳言せられたさうである。

四

住友男は舊臘二十日前後に至つて病少しく間あつたと見え、余に左の一書を寄せられた。

時下寒冷相加候折柄、益御清祥大賀候、扱過日戸田氏を以て御自作御茶杓御惠與被

下不存寄事、早速拜見致候處、總體ワビ景色にして静寂の趣深く、難有存候、尙箱蓋裏御書附等別して難有、茲に好日庵什寶の一を加候事、喜居候、早速御挨拶可申上、筈の處、微恙にて引籠居候爲め、意外の延引御仁免希候、歲月勿々、本年も旬餘と相成候、何卒萬福御超歳の事、禱上候、勿々。

大正十四年十二月吉日

住友吉左衛門

高橋大人清爐下

拙作茶杓は言ふに足らぬ者だが、令兄陶庵公の筒書があるので、男も一入喜ばれた者と覺しく、右の如き禮狀に接したのは余に取りて誠に無上の欣幸であつたが、此手紙の封筒の汚れぬやう、之を二重封にして送り越されたので、男が平常如何に綿密にして且つ綺麗好きであつたかを窺ふに足らうと思ふ、先日藤原曉雲君が大谷尊由、野村得庵、兩君を招待の席上、余は野村君と談端なく男の事に及んだ處が、野村君は肅然として語らるゝやう、茲に故男の高潔なる人格者たるを知るべき一例がある、先年拙者の實弟が病歿した折、某家の藏器入札會に澤庵和尚筆「夢語」の二大字一軸が出た、其

文句が氣に入つたので拙者は如何にもして之を買取り、此一軸で亡弟の追善茶會を營まんと思ひ、植村以文堂をして入札せしめた處が、住友男の註文を受けた戸田露朝が高札で、一軸は遂に男の手に納まつて仕舞つた、其時春海圭三は拙者が追善用として彼の一軸に執心なる次第を傳聞して、之を住友男に語つた處が、男は之を聞くや野村君に左る用途のある者ならば、彼の軸は同君にお譲りしたいから、早速同君方に推參せよとて、圭三に一軸を托送せられたので、拙者は有り難く男の好意を受け、頓て彼の一軸を掛けて亡弟の追善を營んだが、此時拙者は泌々と男の同情深く、其資性の極めて高潔なるに感激したとの事である、今や關西方面茶道大に隆興して、數寄者も追増加するやうだが、春翠男の如き信望一世に高く、性格飽まで高潔なる大家が牛耳を執るに非ずんば、追々餘弊を生ずるの恐れがないでもないから、余は男の長逝を斯道の大打撃として大に痛惜すると同時に、後繼者が男の茶風を繼承して其遺緒を墜さざらん事を希望して已まざる者である、輓詞一首あり聊か以て一瓣の心香に代ふ。

哭住友春翠男

經綸振起一家聲、更博風流絶代名、今日若人乘鶴去、關西茶事孰司盟。

澤庵二大字

(大正十五年三月十二日)

上

前項住友春翠男の記事中に男が野村得庵君の亡弟追善茶會として執心であつた、澤庵和尚筆夢語二大字幅を快く得庵君に譲られた美談を掲げた處が、得庵君は其後余に一書を寄せ、澤庵二大字の添歌又は當時住友男より一軸割愛に關して君に送られた書簡等に就き詳細報告せられたから、余は彼の美談の延長として先づ左に野村君の報告を掲げやう。

此程上京中御話致候澤庵和尚の一軸は、一大横物の一方に夢語の二大字を認め、其一方に稍小さく

とりあつめかれこれみしはあともなし

わか夢かへせ軒の松風

我人のかたらふ聲をこれそとは
寛永元年抄秋日

花押

と書付けたり、小生は大正八年一月實弟を失ひ、幽明相隔たりて夢も中々通ひ申さず、只管悲痛に沈み居りたる折、此一軸が浪花の舊家池内六兵衛氏の賣立に出でしに依り、之を獲て追悼の一會を催さんと大に奮發したれども、住友家よりの註文にて一軸は戸田の手中に落ち、小生は甚だ失望致し居る由、其後春海圭三より男の耳に達せしに、男は直様一軸を小生に譲られ、猶ほ小生よりの禮狀に對して別紙の返書を遣はされたり、左れば其中此一軸を掛けて故男の英靈に一服献茶したしと存じ居り候云々。

野村君は前掲報告と同封で、住友男の書簡、古筆了幽の讓狀及び大正八年池内氏入札會の落札まで悉皆回示せられたが、古筆より池内に宛た讓狀に據れば、此軸は最初京都堀川に住して有名なる古筆手鑑の所藏者であつた浦井徳右衛門が所持して居たが、同じく新町住の巖佐光種なる者が懇望して譲受けたる後、表装を修補して家寶第一と珍重せり、其後巖佐の家道窮迫して之を典物と爲すに及んで、古筆了幽百方苦心して終に其有と爲したれども、久しく之を保持する能はず、明治二年金五十兩にて大阪の舊家池内六兵衛氏に譲りたりとなり、澤庵和尚墨蹟には京都の林樂庵所持擊竹二大字幅の如き名物あれども、此一軸も亦澤庵名物に數へらるべき者なるは、大正八年の落札が二萬三千百圓と云ふを以ても略推知する事を得やう。

下

大正八年住友春翠男が自家に落札した澤庵二大字幅を快よく野村得庵君に譲られた時、野村君の禮狀に對して春翠男の返翰は實に左の通りである。

謹啓過日尊翰に接し候處、俗事に取紛れ即答を呈せず、缺敬の段御仁免希候、扱て澤庵夢語の一軸尊臺御執心の由一向承知致さず、唯稀有の出來榮と存じ求め置き候得ば、いつかは使用の節も之れあるべきか位の考にて入札致させ候處、其後圭三より傳承致し候得ば、此度の御茶事に御使用の御思召にて御注文相成候との事洵に

御氣の毒に存候間、御割愛申上候様の次第に御座候、右軸は實に澤庵中之澤庵と存候間、幾久敷御秘藏相成り度存候、先は延引ながら御答迄一書を呈し候、草々拜具。

四月盡日

吉左衛門

野村賢臺貴答

野村君が令弟追善茶掛として澤庵二大字幅を渴望するに當り、住友男が之れに同情して、潔く其手活の花と爲れる一軸を割愛せられたのは、實に野村君に對する情誼のみならず、茶人が名物に對する禮儀よりするも亦誠に嘆賞に値すべき者である、古來心ある茶人は名物に對して常に敬意を拂ふ事を忘れず、前田利常公は東福寺の什寶無準禪師の墨蹟を所望したる時、同寺が祠堂金三百兩を請求したりと聞き、彼の什寶に對して端金を遣はすは本意に非ずとて、進んで五百兩を寄贈したりと云ふ、又江戸深川の富商冬木喜平治は、京都の某氏が利休の名物尺八花入を江戸に持參して八百兩にて賣却せんと云ふを、一旦京都に持歸らしめ、態々使者を京都に遣はして、金千兩にて之を讓受けたりとなり、前記住友男の場合には聊か右二例とは相違すれども、男が

玩物喪心の常套に陥らず、野村君の心事に同情して、快く名幅を割愛したる其一事は、直に此名幅の聲價を増し、後世相傳へて其歴史上に一美談を附加する者なれば、澤庵夢語幅が住友男の如き高潔の人に遭遇したのは、眞に勿怪の幸ひと謂はざるを得ぬ、野村君は已に余に洩らしたる如く、此一軸を掛けて住友男の英靈に献茶する底意があるさうだから、余も幸に其席末を汚して、親しく彼の幅を目撃する機会があるかも知らぬ、余は成るべく其機会を逸せず、一軸の詳細を更に同好者に報告する時節の到來を、今より樂み居る者である。

五味八珍

(大正十五年三月十九日)

聽松大倉喜七郎君が數年前より支那料理研究を思ひ立ち、彼の國割烹の名手雇氏を聘し來りて思ふが儘に其庖丁を揮はしめ、時に同好を會して、試食の口福を願たる、由兼て傳聞して居たが、先頃横濱の原三溪君に逢ひて、談此事に及ぶや、君は已に二回

程右試食會に臨まれたさうで、其感服振尋常に非ず、支那料理に就ては拙者は満更の門外漢でもないが、大倉君のは殆んど無條件で降参したのは其風味に得も言はれぬ氣品の高い處があるからである、拙者は先日淺野侯爵家の徽宗皇帝筆鶉水仙の繪を拜見して其氣品の高きに撃たれたが、今若し彼の料理の風味を形容せよとならば、恰も徽宗の繪を見るが如しと言ひて可ならんと物語られた、是に於て余は食指頻りに動いて居る折柄、三月十五日或る方で大倉君に邂逅したので、直に此問題を提出した處が、君は早速快諾して先づ雇氏招聘の際の奇談を語り出てられたが、大倉君は大正十一年北京で鐵道借款問題に就き、梁士詒と談判二箇月に亘つた末結局或る條件を讓歩するの餘儀なきに至り、鶴彦大人よりも之れに同意せよとの電命を受取つたので、君は此時梁に向ひ、此上は枉げて貴需に應ずべけれど、茲に附帶條件として當方より要求すべき者ありと申すは他に非ず、先夜貴邸にて頂戴した料理は殊の外拙者の氣に入りたれば、彼の時の料理番を十年間拙者に借用したき事即ち是れなりと言ひ出でたるに、梁は之を聞いて一時の座興と思ひ、好しく委細了承せりとて談判首尾

よく纏まつた此時君は支那の大官連が料理番を一種の家寶の如く大切にする事を知り、梁が實際彼の料理番を手放すまじとは信じながらも、一番彼の様子を試して見んと、歸朝に先つ一週間前梁に一書を送り、先日御約束の料理番に對して、乗船切符の外に支度料として金五百兩を差出し候へば、宜しく御承知ありたしと申込みたるに、梁の驚き一方ならず、早速秘書官を遣はして彼の料理番を手放す能はざる事情を訴へたので、君は此處ぞと其違約を責め、左らば其代人として彼と互角の腕前ある料理番をと所望したので、梁は百方物色して紹興の産で久しく張某の厨頭たりし雇氏を世話せられたのであるさうだ。

二

支那の文化は或時代に於て爛熟の域に達したかと思へば、革命其他の事故に因りて忽ち頽廢の淵に沈み、盛衰常なき有様であるが、唐宋以下の状態は概ね墮落一方に傾き、工藝美術百般の事何れも舊觀を留めざる其中に就き、割烹術即ち料理道は時代に伴ふ多少の變遷はあつても、數百年來支那國民中に流れ來つた文化の脈絡を絶たず、

革命や騒亂の爲めに其正傳を失ふに至らなかつたやうだが、是は形以下享樂を日常の生命として居る支那國民が、人の大慾たる飲食に對して不斷一齊に其向上を期望して居るからであらう、斯くて國民が絶えず割烹の善美を慾求すれば、其需要に應じて斯道の名手が出現するのは當然の事で、現今でも北京大官の料理番中には、彼の子相傳の調理法を守つて其職分に忠實なる者少からず、其奥義に達した者の心掛を聞けば、古人の所謂道也進乎技矣に相當する程度を窺ふに足る者があると云ふ、現に大正十一年より大倉聽松君に仕へて居る雇氏の如きも亦其一人で、職分に對する平常の用心頗る感すべき者あり、彼の癸亥の大震災の節彼は葵町の大倉邸に在り、猛火炎々として庖厨の邊に迫り來れども容易に立退く容子がなないので、人々彼を促して避難せしめんとせしに、彼は頭を掉つて今此部屋にある鍋、庖丁其他一切の料理道具は自分が永年手馴れた品々で、是れなくては最早料理も出來難ければ、縱令自分が焼け死ぬとも此道具を棄て、立去るに忍びずと云ふにぞ、大倉家の人々も彼が其職事に忠實なるに感じ、二臺の自動車を雇氏の料理道具運搬に差向け、彼の商賣道具は一

品残さず取出したる代りに、自家の家財は悉皆灰燼と爲したと云ふ事だが斯かる非常の場合に當りて、雇氏が生命を賭しても我が藝術上の權威を保持せんとする心掛は、大に之を多とせねばならぬ、雇氏はコンナ意氣であるから料理に當つては極めて神經質で、材料の選擇器具の用法、鹽梅の調和、配食の順序より、客人の位地職業等にまで注意して、夫れ々々風味を加減するので、時々己れが頭を叩き、料理番はコレ痛めるから、我が子供には決して之を繼がせませんと述懐する事があるさうだ。

三

三月十五日余が大倉聽松君に邂逅して談彼の支那料理の事に及んだ時、君は早速御馳走方を引受けて、扱て自分は二十日過ぎに轉宅する都合であるが、左すれば當分料理番の調子が狂つて三四箇月間は之を實行する事が出來ぬ、就ては其前來る十九日午後六時半より試食同勢七人を引連れて、麴町紀尾井町宅に來臨あれかしと云ふ、是に於て余が八方に電話して誘ひ出した連中は、近藤滋彌、彌男、有賀長文、野崎幻庵、岡山高蔭、八木岡、春山、諸氏の外に、十六日兒玉伯入、江氏主催の故山縣元帥傳記材料展示會で

邂逅した徳富蘇峰君を誘引して、余と共に七人の同勢が纏まつた處で定刻大倉邸に
參集すれば十疊二間續きの上段の床に山陽木米書畫双幅を掛けられたが、山陽のは
五絶で

愛此白水山

白水流清潤

但病行談處

時被水聲亂

と云ふので、木米のは其詩意を寫した淡彩山水圖である、双方とも非凡の傑作で、近年
まで伊藤博邦公が所藏中、西文人士畫愛好家の垂涎する所と爲り、其後波多野古溪翁
が所持して暫く當る可らざる氣焰の種と爲つて居たが、昨年翁の藏品入札會より何
方へか其蔭を潜めて仕舞つたのに、今夜突然之れに出會して少からず吃驚させられ
たのである、猶ほ本席には此名幅以外數々床飾があつたが、中にも享保年號入破笠翁
作青貝浪に片輪車模様亂函が一段人目を惹き付けた、斯くて程なく食卓の用意整ふ
や、一同次の間に動座して主客八人圓卓を圍んで陣取れば、蓮實と水瓜實との外一品
の小菜をも出さず、食單は何れも銘々中血に盛り切りて、順次左の十種を出された。

清湯燕菜

炒伊府麵

紅燒角翅

鷄粥銀耳

龍鳳腿

高魔蝦仁

四川竹孫

火腿餅

炒蟹粉

三仙鍋

余等は最初清湯燕菜を啜つた時、清淡中に得も言はれぬ上品な風味のあるに感じて、
原三溪君の徽宗皇帝の鶉水仙繪と其氣品を比ぶべき料理であると評された、其一言
の果して我を欺かざるを知つた、其れより三種までは風味漸く濃厚を加へ、凡手の容
易に眞似得ざる龍鳳腿に至りて、滋味のクライマックスに達するや、四川竹孫を以て
忽ち元の淡泊に返り、濃淡剛柔相交错して飽まで味感の變化を促す五味八珍配劑の
妙に至りては、日本食にも西洋料理にも遙に超絶する所があつて、割烹の一事は支那
を以て世界第一とするとの提議があらば、到底之れに賛成せぬ譯に行くまいと思は
れた。

四

大倉聽松君が支那料理研究に熱心せらるゝのは唯食道樂と云ふばかりでなく、帝國
ホテル會社長として職務上内外各種の調理法を心得置くべき必要があるからであ

らう、道理で斯道の研究談は滾々として盡る所を知らず、曰く支那料理の食鹽は渾て山鹽である、而して之を使用するには先づ豚肉中に含ませて空干と爲し、凡そ十年間位保存し置きて鯉節のダシを取るが如くサツと湯の中に入れて引き上げるので、軽くて上品な鹽加減が出来るのである、曰く雇氏は十人前位までの料理は一切一人にて之を辨じ、客と同様に自身も一品づゝ且つ食し、且つ出し、以て風味の濃淡變化を調節するのである、而して客が如何なる身分か又初めて試食か、但しは二度目か三度目かなど其邊の事情を承知して、材料と風味を加減するので、時に面白き挿話を生ずる事がある、先頃衆議院議員を招待した時、雇氏の問ふがままお客は代議士さんだと答へたるに、當夜の料理の分外に鹽辛かつたのは、近來議員が議會で擲り合ひの喧嘩をすると云ふ噂を耳にし、彼等を腕力労働團と看做して、斯かる手加減を爲したるならんと果ては大笑ひに終つた事がある、曰く雇氏の料理材料は大概支那より取寄せるが、日本の家庭に入つて時々奥さんや子供衆の注文に應ずるので、漸次其味感が日本化し知らず識らず本格が崩れて來る爲め、二年目に一度位は暫く北京に立返り、

斯界最近の情況を究め、兼て日本化したる味感を復舊するの必要があるなど様々面白く説明があつた、斯て最後の三仙鍋だけは一同一つ鍋を突き合ひて茶人の濃茶呑み廻しと同様大に親密振を味はひ、茲に大牢の滋味を満喫したので、再び前席に立戻つて緩々餘談を續けたが、今夜は主客八人で歌人、書家、畫伯、文豪等の集會なれば清談湧くが如くなる中にも、床に頼山陽の書幅が掛つて居たので、彼れに關する話題最も多く山陽景眞の徳富蘇峰翁が、彼れの艶聞否女犯問題やら、耶馬溪の買被りやらに對する攻撃の矢面に立ち、無料辯護の勞を執られたのは、山陽に對する無上の陰徳と謂はねばならぬ、斯くて一同近來得難き口福を主人に謝して、深更大倉邸を辭去したが、余は歸宅後枕上に七絶三首を得たので、翌朝未定稿の儘之を聽松大人と蘇峰先生に送呈して置いたが、其後聊か推敲を費したから、今左に之を掲げやう。

酒酌紹興春色浮
食單渾是殊邦味
鳳腿龍肝足飽殮

華堂綺饌盡珍羞
一口併吞四百州
敕厨滋味入焦燔

布衣客在春宵宴

嘯歌風流萬乘尊

春醞瓊堂列八仙

酒豪書聖又詩賢

高談雄辯誰驚座

中有蘇翁醉卓然

對茶杞憂

(大正十五年四月九日)

四月九日の朝岩原椿庵より一葉の端書が舞ひ込んだ其文言に

拜啓極到生金杉英五郎君より別封の雜誌を送り來り候間御參考までに差出申候

若し機會も之れあり候得ば茶人總代表として御辯駁願ひ上げ候

とあつたが之れと前後して三月六日及び十三日發行の日本醫事週報が到達した扱

て何が書いてあるかと披いて見れば石黒況齋先生に答ふる書と再び之れに答ふる

書と云ふ二篇があつて大要石黒況翁の所謂和敬清寂の茶風には賛成するが近來流

行する俗惡の茶事に對しては極力之を排斥せねばならぬと云ふので其文中に

迂人が數年來招待されたる茶席の状態を察するに華美の競争是れ事とし雅致を

主とせずして高價の器物を自慢するを本旨とし(中略)其器物を陳列して是れは二

十萬圓に落札しこれは十萬圓にて買入れたりと誇稱して茶の本道を解せざるも

の、如く恰も豪奢競進會の如く迂人等より之を觀れば此無用の金圓を或は基金

少きの學校に寄贈し或は諸史編纂の資に供するが如きことあれば蓋し天下を益

する事少からざるべきを確信する者なり

との一節あり其末尾に附け加へて

時事新報續載の高橋箒庵茶會記事は俗華をして華美競争の煽動機關たらしむべ

く茶道として餘り益なしと信ず何れ閑を得て箒庵に一矢を酬ひ大いに論ずる所

あらんとす

の文句があつた處で余は岩原椿庵の教唆に乗りて金杉博士に筆鋒を差向けんとす
る意思なく又博士が大正茶道記を如何様に批評するとも夫れに對して躍超辯駁す
る積りはない左れど博士の如き批評は毎度余の耳にする所で機會があつたら之に

對する余の所見だけを披露して置かうと思つて居た處であるから、敢て反駁の辯解のと云ふ理由でなく、唯如是我觀として此問題に就き一言を述べて見やうと思ふが、夫れが幸にして金杉博士に對する答辯の一端ともならば、所謂一彈兩兔を獲る者で誠に望外の仕合せである。

二

余は茶道の門外漢より近來成金茶人が無闇に高價な名物を買集めて茶室を豪奢の競進會の如く心得るのは以ての外の不都合である、そんな無用の金があるなら學校に寄附するとか、慈善事業に使用するとか、今少し社會有益の事に使つたが宜からうと云ふ苦情を聞かざるゝが、斯かる所見を抱く者は第一名器の何物であるかを理解せぬのである、余の所見では名器は其品質の陶、銅、漆器又は其他の物質なるに拘はらず、要するに千百年間に於て、我が祖先が國家に遺した稀有の優秀品で、夫々の方面に於て見本ともなり、模範ともなるべき國家の重寶である、凡そ美術工藝の意匠工夫は祖先より累代蓄積し來つて、名物名器中に傳はつて居る者で、若しも一國に一切此等

の傳統を失ひ、一人一代の工夫だけで美術工藝に従事する者とせば、今日生産する所の陶、銅、漆器其他の器物が如何に今日より劣等なる可きかは、何人でも容易に推測し得らるゝであらう、即ち名器を一部茶人の玩弄品の如く心得て、動もすれば之を無用の長物と看做すは以ての外の心得違ひである、西洋諸國に於ては國家が美術館だの博物館だのを建設して自國の名器名物を保護して居るのに、日本に於ては此等の重責をすべて個人と神社佛閣とに託し、國家は之れが爲めに殆んど半文錢をも費さぬと云ふ始末である、左れば古來國家に代りて其保護に任じた茶人名家若しくは神社佛閣等は、最も深く國家の感謝を受くべき筈で、此名器を買入るゝ者を豪奢なり、贅澤なりとて他の學校や慈善事業よりも劣等なる行爲の如く思ひ做すは畢竟名器名物に對する根本的の大誤解と謂はねばならぬ、先年歐洲戰爭中佛蘭西が獨逸軍の侵入を恐れて巴里の美術品を先づボルドウに移したるが如き、又自耳義政府が之れと同様油繪其他の名品を安全地帯に搬出したるが如き、彼の國人が如何に自國の名品名物を尊重するかの一端を觀るに足るであらう、從來茶道の門外漢が名器名物を餘り高

價なりとて憤慨し延いては之を茶人攻撃の材料と爲すが如きは畢竟此觀念に乏しきが爲て先づ此點を理解せざる者とは共に茶事を談ずるも無益だらうと思ふ。

三

名器名物と國家若くは個人との關係に就ては極めて複雑なる議論があるが是れは姑く他日に譲り兎に角名器名物は國家の重寶で之を買収する者は其意思の趣味より出づると名聞より出るとに論なく其結果は國家の重寶を保護する善行と謂はねばならぬ先づ此論據を定めて置いて更に彼の金杉博士等の憂慮する俗悪なる成金茶人が大金を出して名器名物を買収し茶室を豪奢の競進會と爲すと云ふ問題に論及せんに既に俗悪茶人と云ふ其行爲の俗悪なるは決して恠むに足らぬであらう然れども若し念佛が殊勝なる者とすれば空念佛でも猶ほ爲さざるに優るではないか若し彼の俗悪成金連が茶事に入らずして他の道樂に耽りたらば如何金杉博士等の註文の如く彼等が果して學校やら慈善事業やらに出金するであらうか否往時の成金が吉原の大門を打たせたり節分に黄金の豆を撒いたりしたやうな眞實の俗悪に

陥るは當然の成行と思はねばなるまい凡そ世の中に至善は容易に得られぬ者とするれば幾分善行に接近する者は次善でも三善でも先づ以て之を嘉尙せねばなるまい況や實際の事實に於ては門外漢の想像するが如く十萬圓だの二十萬圓だのと云ふ名物を湯水の如く買込まんとするも其品なく又之を買ふ者もなく結局道樂は其人の資力相應と云ふ事に歸着するのである一體華美だの豪奢だのと云ふのは抽象的に言ふべき事ではない乞食より言へば一杯の汁も贅澤である天下の富豪より云へば名器名物も格別の華美ではない鼠は一勺の水をも多量としやうが象は一斗の水でも少量と見るであらう而して茶事は古來其人相當を程度とするので多數の茶人中には固より鼻持ちのならぬ俗悪もあらうが又所謂和敬清寂の本體に合致する者もあらうから少しく膽玉を大きくして清濁併せ呑んでは如何であらう一國の上より見渡せば高價の道具とても日本人が賣つて日本人が買へば金も品も皆日本の物で金杉博士等の如くクヨ〜と杞憂を抱くには及ぶまいと思ふ。

四

金杉博士は時事新報に續載する余の大正茶道記は、俗輩の華美競争を煽動する機關と爲りて、茶道上餘り益なしと言はれたが、大正茶道記が果して博士の觀察するが如き影響を社會に及ぼすべきや否やは余の知る所でない、余が明治四十五年二月より、最初は東都茶會記として茶事報告の筆を執り、中頃大正茶道記と改題して今日に至るまで足掛十五年間當代茶道の狀況を報道しつゝあるのは如何なる意思であるか、余は斯る機會を以て之を一言して置きたいのである。

茶道は東山時代より隆興して、今日に至るまで四百五十餘年の歲月を閱し、其間之を大成した天正時代即ち利休時代に於ては、上に信長若くは秀吉の如き大バトロンがあつて、非常の盛況を呈したのは人の能く知る所である、其後徳川時代に入つては、多少の浮沈消長はあつたが、斯道は幸に地に墜ちず、更に明治の末期より大正時代に亘つては茶道大に振興して、歩武を天正時代に接するの觀がある、而して茶事は社會の中流以上に行はれて、之を嗜好する人々は朝野に論なく多くは當代の名流であるから、此人々の風流韻事を傳ふるのは、即ち其人物の側面觀ともなり、延いては當代歴史

上の傍證ともなるであらうと思ふ、故に余は茶事交會の有様を寫すに當りて、常に其中に出動する人物の言行をも傳へて、聊か後世の參考と爲す積りである、試みに天正の昔を顧みるに、豊太閤、細川幽齋父子、蒲生氏郷、徳川家康、黒田如水、其他知名の英雄、或は僧侶、宗匠等の性格を觀るべき歴史上の證據は極めて不明瞭なるに非ずや、而して彼の茶事上の記録たる神屋宗湛の宗湛日記、山上宗二の宗二之記、南坊宗慶の南坊録等より往々貴重材料の見出さるゝ所より觀れば、若し筈庵が天正時代に在つて、當時の茶會に於ける英雄豪傑の言語舉動を記録して置いたならば、今日の歴史家が其中より如何に多く當時の人豪に關する材料を得られたであらう、而して大正は天正に比して夫れ程無趣味殺風景の時代とは思はれぬから、後の今を觀るは猶ほ今の昔を觀るが如しと考へ、今日執筆する茶道記は、實に現代人の爲めのみでなく、千百年後の人々に當代社會の側面觀を徵すべき史的材料を與ふる爲めと思つて、今後も猶ほ之を繼續する積りである、而して其記事は明歴歴露堂々見聞其儘を寫すのであるが、夫れが金杉博士等の心配するが如く、果して俗輩の華美競争を煽動する機關と爲る

や否やは余の與り知らざる所で、是れは總て世上有識者の觀察と批評とに任せる外はないのである。

心月庵忌

(大正十五年四月十三日)

上

故心月庵主松浦詮伯薨去後、今年は早や十九年回忌に相當する、扱て松浦家の向柳原邸は癸亥大震災の節辛うじて罹災を免れたので、其後邸宅を巢鴨に移轉せらるゝに當り、風月樓と云へる二階建の母屋、廣間の皎潔軒小間の心月庵をソックリ其儘彼の地に移築せられたさうだが、今度庭園諸共スツカリ出來上つたので、四月十三日午後二時より右新邸に心月庵忌茶會を開き、故伯に縁故ある人々を招待せられた、其中に余も亦幸ひに寵招を蒙つたから、定刻松浦家に推參すれば、母屋の風月樓上には正面の床に故伯の遺墨

守鐵石之深衷

勵松筠之雅操

丙午冬詢齋詮書印

の二行豎幅を掛け、其前なる青貝中央卓には、當家に有名なる故三島姥口名物香爐と蒔繪桃實香合を載せ、書院の方には左の文房飾りがしてあつた。

頓阿作歌聖木像

定家卿筆藤原興風集

龜田鵬齋遺物文房銅器一揃

頓阿作の柿本人丸像は丈五寸ばかりで、無造作なる中に自から朴雅の味あり、定家歌書は稀に見る高雅の筆致で古色愛すべき者である、而して鵬齋の文房具は一切銅製で、銅硯及び硯屏には極めて精巧なる蛟龍を彫刻し、背後に銘と號とを鑄出してあつた、更に其次の間を觀れば、床に高卓を置いて鶴峰燒伊達家青磁三足香爐寫と淳喜甲子仲春泮宮製の銘ある唐銅長角香合を置き、其上に梅道人筆墨竹横物を掛けられたが、無類の傑作で、自讚の七絶は左の通りである。

揮毫摸與可

覓句愧東坡

半幅瀟江意

清奇不在多

至正二年秋八月十日

梅道人

以上風月樓の飾付を拜見して、今度は此樓前を過ぎ、飛石傳ひに楓樹蔚生する大築山の麓を廻りて、樹木の間より遙に南方を見晴らす高臺に出れば、少しく母屋と掛け離れて向柳原邸に在つた心月庵、皎潔軒を有形の儘茲に移築してあつたが、腰掛中潜門、蹲踞石、石燈籠ばかりか、樹竹飛石に至るまで、總て舊來の通り其位地を變更せぬので、故心月庵主人に招かれて屢々出入した彼の向柳原邸茶會の有様が歴々と眼前に浮び來り、俯仰低回今昔の感に堪へなかつたが、今日來會の石黒況翁、馬越化生兩老の如き必ずや余と同感であつたらうと思ふ處で皎潔軒と云へる六疊廣間には、故心月庵主の束帶畫像が掛けて居ると云ふので、順序として先づ同軒に打通れば、床の正面の畫像の上には故人の色紙が張付けてあつて、其歌は左の如くであつた。

露にめて月にながめて菊の花

あかぬ盛りぞ久しかりける

中

前記心月庵公東帶像を掛けた皎潔軒の床には、青貝平机に鶴峰燒三ツ具足を置き、床脇棚には時代蒔繪銘銘逢坂と云へる硯箱を飾り、爐邊に石州好み及臺子を置いて左の品々を置き合はされた。

釜 大西淨玄作 梶葉紋

水指 三河内燒 浮牡丹

茶入 藥器盛阿彌作

茶碗 とゝや銘草野

茶杓 心月庵作

建水 南蠻メ切

蓋置 青竹引切

如上器物中とゝや銘草野茶碗は平常よりも稍深目で、總體土器色の中に草色の飛釉ムラ／＼と漂ひ居るので此名を得たのであらう、盛阿彌作藥器は平棗形で、赤黒の塗分けが頗る面白い者である、又梶葉紋散らし釜は、當家先代の好みか否かは知らぬが、梶葉は當家の定紋である、松浦家には定紋が二つあつて、一つは梶葉、他は三星である、當日鸞洲伯の物語に據れば、當家は嵯峨天皇の皇子河原の左大臣即ち融の大臣の苗裔なので、三台を現はす爲め三星を紋所としたのである、又梶葉を用ゆるのは鎌倉時代龍造寺氏の爲めに平戸の領地を攻められた時難を梶の谷と云へる處に避けたの

て、其後再興するに及んで終に梶葉を定紋としたのであるさうだ、又當家は正月の門飾りに松を立てずに椎の木を立つるさうだが、是も祖先が戦陣中正月門に椎の木を立てた嘉例に因るとの事である、扱て皎潔軒で心月庵主畫像に焼香し、前記飾付を拜見し終るや、廊下傳ひに引返して心月庵に繰込めば、床には宋の無準國師筆器宇の二大字横物が掛つて居た、無準は徑山寺の大徳で、我が東福寺開山聖一國師を始め、日本より入宋して彼の鉗錘を受けた僧侶は甚だ多く、大字が最も得意であるが、此器宇二字は墨色淋漓として筆力雄勁、蓋し彼の傑作なるべく、而して蜀紅錦龍模様の表装が一段中味を引き立てたやうである、顧みて爐邊を見れば、名越善正作阿彌陀堂の釜を掛け、傍に南蠻芋頭の水指を置いて茶道の薄茶手前があつたが、後水指の箱書を拜見すれば、澤庵和尚筆で芋頭の二字の金粉字形あり、如何様大々として凡物ならず、無準の墨蹟に對しては寸分動かぬ組合せと一言もなく敬服したのである。

下

心月庵には床に無準の大字墨蹟を掛け、阿彌陀堂の釜、南蠻芋頭の水指で堂々の陣を

張られたが、其他一座の道具組は左の通り。

茶入

散し 梨子地蒔繪梶葉紋

茶碗

繪御本銘蘆の葉

茶杓

小猿動閑利休寫

建水

砂張

蓋置

染付榮螺形

菓子

朱花形盆
松葉花形

如上器物中繪御本銘蘆の葉茶碗は薄茶ねらひの氣の利いた作行で二葉蘆の粗畫が如何にも面白く見受けられた、小猿動閑の利休寫茶杓は何人の筆にや筒に利休居士作のウツシとして其傍に、此茶杓は利休が瀬田掃部に送つた者で、桑山左近より同可齋に傳はり、其後可齋が動閑に寫させた者であると書付けてある、小猿動閑は小堀遠州の茶友で、彼が伊達家の招ぎに應じて仙臺に赴かんとする時、遠州が有名なる猿若の茶入を贈られた逸話は人の能く知る所だが、今此茶杓を一見すれば、彼が其盛名に負かず大力量ある茶人であつた事が直に夫れと分るやうである、而して松浦家が新邸へ移轉、勿々寶藏も大に混雜して居ると云ふのに、急所を外れぬ如上各席道具組の斯く行き届いて居るのは甚だ敬服の至りである、抑も故心月庵公は明治時代の大茶人で、其名家にして名器に富んで居ると云ふばかりでなく、爲人高雅、敏達にして萬藝

に精通し、和歌に長じ、筆札に達し、巧に諸茶器を好み、又故實に精しくて、何時やら皇子御誕生の時、墓目の弓を奉仕せられた事などもあつた。來年は其二十年祭に相當するの、松浦家では目下頻りに傳記編纂を急いで居るさうだから、來年の心月庵忌は最も盛大に營まるであらう。回顧すれば公は和敬會同人の元老として、或る時當心月庵で一年百回茶會を催された事があつた。百回茶會は利休以後之を催した者が絶無ではないが、甚だ稀有で、鎮信流の大宗匠に非ずんば容易に之を遂行する事能はぬのである。左れば公の生前は茶會頗る頻繁で、和敬會同人十六羅漢は公の獎勵の下に毎月順會を催したが、此舊茶友も漸次凋落して、今日現在する者は石黒況翁、馬越化生、益田鈍翁、其他一二輩を數ふるに過ぎぬであらう。余は今日心月庵中に座して、今昔の感に堪へず、拙吟一首を得たから之を左に掲げやう。

丙寅晚春、松浦鸞洲伯、移先公遺構、心月庵於巢鴨新邸、修追福茶事、余亦辱寵招、乃次床頭所揭梅道人五絶詩韻、賦呈

心月庵如舊

移來倚曲坡

茗筵修遠忌

故老已無多

花季茶會

(大正十五年四月十五日)

上

府下大崎戸越の里に住める八田圓齋より、花の頃一服差上げたしと兼ねて申込まれて居たが、夫れが愈々四月十五日正午と定まつた。其處で彼の「花咲かば告げんと言ひし山里の、使は來たり馬に鞍おけの古歌も思ひ出されて、風はあつたがウラ／＼と霞渡れる春の野に、あこがれ出で、五反田を過ぎ、戸越の里なる圓齋の閑居に辿り着けば、例の二疊寄附に仰木魯堂夫婦、伊丹金藏、竹内竹有、二老が先着して居た。扱て一同の勧めに余が正客を失敬して、廊下傳ひに六疊茶席に繰込めば、床には澤庵和尚筆横物を掛けられたが、寛永二年初春下旬水間觀音に參詣した時の口號とて、前に七律一首を書き、其末尾に

かぞへてよ峰にいくすぢ花の瀧

の一句を認めてあつた、更に床脇を見れば松の木盆に唐銅雁の香爐を置き、爐には金象眼入鏡鎖で寒雉鬼面銀付瓢形ツマミ蓋釜を掛け、庵主出て、一應挨拶の後直に炭手前に取掛られたが、其器物は

炭斗 組物唐人笠

香合 御室燒彩色木の葉

羽箒 大鳥

灰器 南蠻盞蓋

火箸 時代桑柄

如上器物は取立て、評判すべき程ではないが、アツサリとして嫌味なく、花季氣分に相當した老練の取り合せに感服した斯くて懷石に移りて山崎形盆に小丸椀、引盃の代りに染付漁樵問答の銘々盃を用ゆるなど、愈々老練振りを發揮したが、懷石の器具及び献立は左の通り。

汁 蔞三州味噌

向附 九谷燒角皿、きす、黃瓜、岩茸等白あへ

椀 鶉よせ、かれい、木の芽

烹物 祥瑞平捻鉢、竹の子、花かつを

八寸 乾山繪替皿、若鮎、そら豆

香物 黃瓜、西瓜、奈良漬

酒器 備前瓢形徳利

菓子 三色團子、青竹串

懷石は至極の上出來て、何處までも花見氣分を忘れぬのが何より嬉しく、器物に於て

は祥瑞鉢で一同の膳を控ぎ、八寸代りの乾山小皿で其活用の老巧を示された。

下

八田圓齋の茶會で中立後再び入席すれば、時代竹組瓢形籠に赤椿、白桃、小米櫻の三種を活けられたが、前座で床脇棚に飾つた唐銅雁の香爐を何時の間にか取り去られたのは、花を見棄て、歸る雁と云へる趣向ではあるまいかと、皮肉な批評を下した者もあつた。又道具疊に黒塗蓋の赤繪魁鉢、水指を置いて、金銀一松に繪巻物切を張り交ぜた風呂先を裏返しにし、前座の時と反對に其紺無地の方を立てたのは、赤繪の水指を引き立たすが爲めて、其茶的用意の周到なのがヒシシと客の胸に響き渡つた、斯くて庵主が濃茶手前を見れば、使用の器物は左の通りである。

茶入 薩摩燒銘青苔

茶杓 宗且在判一閑黒塗

茶碗 是閑唐津

建水 信樂燒

蓋置 青竹引切

茶 初音

如上器物は澤庵和尚一軸より割出した手頃の組合せて、佗て氣の利いた處に無限の茶味を含んで居る、薩摩茶入の銘を青苔と云ふのは、白樂天の詩に

白雲似帶遠山腰

青苔佩衣懸巖肩

とあるより思ひ附きたる者なるべく、岩崎小彌太男藏中興名物膳所焼茶入に銘白雲と云ふのがあるが、彼は白釉が帯の如く腰を遶つて居るので彼の銘あり、此れは青味が全面に漂つて居るので此名を得たのであらう、而して挽家の金粉字形は蓋し權十郎邊かと思受けられた、是閑唐津茶碗は一見古井戸と見らるゝ者で、高臺内外にカヒラギのやうなる景色があるが、内側のなだれ釉には確に唐津の約束あり、誠に面白い大寂び物である、而して右茶入茶碗の中間に思ひも寄らぬ宗旦在判黒塗一閑茶杓を差込んだのは庵主が近來無類の着想で、之れが爲めに愈々佗茶の眞髓を發揮するに至つた、斯くて薄茶一巡するや同席にて若主人の薄茶代點あり、水指は備前種壺と替り、茶入は貝詩繪眞慶塗中次で、瓢箪菓子器に麥落雁を盛り、御本松竹梅茶碗と仰木魯堂夫人手造の黒樂平茶碗で、アツサリと後座の埒を明られた輕妙さは、十數年來圓齋が一年に幾度となく興行した茶事中、殆んど壓卷とも謂ふべき大出來茶である、近來世間には茶事が益々贅澤に走つて名器の競進會の如く、是では容易に茶道に入る事が出來ないなど云ふ苦情が多いが、前記圓齋の趣向を玩味すれば、茶事は其人の身分相當で、手軽く樂める者なる事を理解し得られやうと思ふ。

晚春茶會

(大正十五年四月十九日)

上

花開いて風雨多しとは例年此頃の通り相場だが、今年には雨の少ない代りに風が多く、三日見ぬ間に開いた櫻は早や散り果て、青葉が遠慮なく之れに代つたとは云へ、陰幽草とまでには猶ほ若干の時日がある、正に是れ青葉がくれの遅櫻を賞玩する時、茶席は暖からず寒からず、好事家の類りに一服を思ふ處に、永坂三井主人泰山君より四月十九日正午彼の巍々庵への案内を辱うした、乃ち例の三疊寄附に推參すれば、相客は馬越化生石黒況翁、磯野良吉、山澄靜齋の顔觸れて、席上には時代桐三足火鉢と志野火入を備へた一閑瓢すかし手附蓑盆を置き、棚に渦巻模様詩繪丸形硯箱を飾り、染付茶碗で素湯を汲出された、扱て例に依つて石黒馬越兩老の間に正客争ひがあつ

たが、戸籍調べの結果八十三で況翁より一歳年長者なる化生翁が先達に推され、順次三疊臺目の巍々庵へ繰込めば、床には元柳營御物で櫻田御殿に在つたと云ふ、一休和尚筆岩蘭自畫讚二幅對の一を掛けられたが、細長い堅物で玉腕子に似た墨蘭の上に、

空聞惠佩世傳芳

楚國詞人吟興長

湘水不須言逆耳

汨羅江上送春香

東海純一休老畫與詩一筆印

の七絶一首を題したのが非凡の傑作であつた。顧みて爐邊を見れば、久以作澤栗なく、り爐縁に古天明竹地紋獅子銀附丸釜を掛け庵主出てて一同へ挨拶の後直に炭手前に取掛られたが其器物は、

炭斗 時代竹組

香合 形物吳洲都鳥

羽箒 鶴長羽

灰器 永樂了全

火箸 時代桑柄

上記器物中古天明丸釜は故三井松籟翁遺愛で、當庵主が先年初陣の時に借用した儘、終に捕獲品として巍々庵什に編入せられた者だと云ふ、而して其獅子銀附の嚴めし

き割合に、丸形の愛らしきは此釜の最も優れた特徴である、吳洲都鳥香合は形物としては軽き者だが、染付隅田川よりも一層珍しく、而して東都花時の茶會には共に適合の適品である、斯くて庵主が能代塗の葵盆で順次運び出された懷石及び器具は、

汁 わらび三州味噌

向附 繪唐津柳燕模様
あぢ濱防風、山葵

椀 鱸、唐瓜、木の芽

燒物 青吳洲龍の繪鉢、
かしわ富貴

吸物 海蔘花梅肉

八寸 若鮎、そら豆

香物 虫明燒三又手附小鉢
小燕淺漬

酒器 絲日鏡銚子新木蓋

菓子 大阪鶴屋製銘花衣

下

巍々庵懷石は春先でもあり又間の茶會でもあるので、兎角重苦しきを避け、器物も少く、献立も無事を旨としたのが庵主老巧の致す所と一同大いに感服した、扱て中立後銅鑼七點の合圖を聞いて復席すれば、遠州作寂竹尺八花入に、赤椿一輪と鶯神樂を活けられた風情、又なく好く、道具疊には緋だすき水指を置いて庵主自ら濃茶手前に取掛られたが其器物は、

茶入 瀬戸芋子銘山櫻

袋 銀欄雲紋

茶杓 官休庵一翁宗守共
筒銘山姥

茶碗 三島外花

建水 木地曲

蓋置 青竹引切

茶 好の白

如上器物中瀬戸芋子銘山櫻茶入は遠州藏帳品で、普通芋子形と違ひ、丸形で肩が張り、釉色頗る野田手に近い手替り物である。三嶋外花茶碗は京都の故松岡嘉兵衛老人が故山縣含雪老公に納めた者で、先般老公の遺品が處分せられた時、當家の所藏に歸したのだが、茶碗の外部に花紋があるので、外花の名あり、現今世上に知られた者では大阪の高谷宗範翁所持銘八重垣と云ふ茶碗と、唯二個あるのみで、甚だ珍しい名物である。處て茲に一翁宗守の銘山姥と云へる大寂び茶杓を配したのは、似たもの夫婦の諺通りて、之を玩味すれば、茶趣津津々たる者がある、斯くて濃茶一巡するや、庭先より飛石傳ひに六疊廣間に動座すれば、床に仙臺家傳來孫君澤筆着色樓閣山水幅を掛け、床脇棚には黒塗四方羽田盆に赤繪四方香爐を置いて、名香東山を薫じ、爐には鐵鎖を以て、遠州好み淨清作七寶紋釜を掛け、故住友春翠男好み桐遠山すかし風呂先の前に七寶すかし品川棚を飾つて、春海圭三の薄茶代點があつたが、一座の器具は左の如し。

茶入 七寶紋黒塗藥器

茶杓 如心齋作象牙

茶碗 一入作赤樂

替 音羽燒彩色山水

建水 唐銅合子

蓋置 染付花莊子千切

菓子 青貝八角盆、有平

廣間も小間の輕妙を受けて、アツサリと遣つて除けられたのは、晚春茶會の見本とも謂ふべく、而して其間に七寶揃ひの道具を組み合はされたる物、數奇など一言もなく、相客の一人が七寶は出したが、尻尾は出さぬと洒落たのは、正に此茶會に對する總評と云つても宜からふと思ふ。

金澤松雲庵

(大正十五年五月六日)

東都實業紳士中重役肩書の最も多い、隨つて勤務の最も忙しい、隨一人と目されて居る博文館主大橋新太郎君が、相州金澤の新築別業松雲庵で、五月三日より連日初陣茶會を催されたのは、世人が往々多忙だから茶の湯が出来ぬと云ふ口實を根柢より覆

へしたばかりでなく、多忙の人にして始めて茶の湯の必要がある事を證明したかと思ふ、今大橋君の述懐を承はるに、先般肺炎の大患に罹り、臥床中つらく思ふに、若し此儘にして此世を去らば、屢々茶會に招がれながら終に其返茶をも爲さず、大橋は御馳走の喰ひ逃げしたりと指さされんも、残念なり、且つや人間の精力は一張一弛が必要にして、馬車馬的奮闘は健康上大不經濟の基なりと自覺し、病後保養を兼ねて茲に一會を開くに決したるもの、扱て愈々茶會の主人と相爲る以上は、他人の代點を乞ふも強腹なり、イザ左らば濃茶手前を稽古せんものと、裏千家宗匠藤谷宗仁老の教を乞ひたれども、六十の手習ひ思ふに任せず、屢々茶杓を投出したく爲つたが結局茶さへ立てば手前はどうでも宜からうと、茲に糞度胸を据えて、初日より益田鈍翁を招ぎたるに、手前中停電だらけは未だしもの事、濃茶が茶筌の間に挟まりて湯ばかりながらと爲つた、猶ほ其上に彈丸が茶碗の底に残りて、末客が其始末に困じ果てたる有様を見て、同席の岩原椿庵は仲間が一人殖ゑたと思ひてか、イヤ斯う來なくては叶はぬとて手を拍つて感嘆する、正客の鈍翁も亦大悦びにて翌日早速禮狀を送り越された

其文中に、昨日の御手前は逆も凡慮の及ぶ所に非ず、今後は大橋流と申す點茶の一流をお立てなされん事希望に堪へずなどありて、末尾に

新室に友をまねぎて木の芽に

その手振さへもてなしにして

と書き添へられたが、拙者の手前が今更器用に行くべき筈なく、其不器用が若し慰みの一端とも爲れば、主人として拙者は寧ろ満足せねばなるまい、何れにしても生來初めて接觸する新境界で、病後の餘勇を保養するには之れに勝れる妙案あるまじと感じたとの事である、世間若し大橋君と同境遇の人あらば、以上君の實驗談に依りて必ず大に發明する所があらうと思ふ。

二

余が大橋君の金澤松雲庵に招かれたのは五月六日正午である處で、午前十時東京發汽車に乘込めば、當日の相客團狸山夫婦、有賀長文、仰木魯堂と期せずして同車に落ち合つたので、逗子着後出迎ひの自動車に同乗して正午近くに金澤六浦なる大橋別業

に着到した、扱て此別業の位地如何と見れば、北方を繞れる屏風の如き松山の背合せに有名なる稱名寺あり、同境内に在る金澤文庫とは殆んど相隣接して、鎌倉時代の史蹟歴々として見るべし、南方は六浦一帯を見晴らして近く夏島を控へ、横須賀港も亦指顧の間に在り、彼の松山に抱かれたる山懐の平地、約五六千坪は最近まで畑地であつたさうだが、楠樺などの老木は鎌倉時代の遺物と覺しくて、自ら古蹟の風光を添へ、山海の勝景を一處に集めたる當莊の、正門は慶長の昔片桐且元の居城茨木に在りしを、後年石州流祖石見守貞昌が、其領邑たる大和國片桐村の山莊に移して、今猶ほ同所に殘存する二階建矢倉門の摸寫で、當別業の建築奉行たる仰木魯堂の物數寄であるが、如何にも好く場所柄に篋りて、入口より先づ好感を來訪者に與ふる者である、扱て此門を入れば、右手に今を盛りと咲き満ちたる牡丹園あり、正面には母屋に引き續きて茅葺の廣間、殘月亭と、猶ほ其先きに張り出したる瓦葺の小間松雲庵が並び立ち、其手前に當つて亭々たる楠樺の大木三株、天を摩する、其下を右折して突き當れば、此處に一棟の廣やかなる寄附ある、其三疊袴付に打通れば、床に近松門左衛門が澤庵和

尙の法語を認め、た一軸が掛かつて居たが、其文句は

此世の人客に來たと思へば、苦勞もなし、世話もなし、心に叶ひたる食事にはむかひては、好き馳走とおもへ、意に叶はぬ時も客なれば、譽て喰はねばならず、夏の暑さもたしなみ、冬の寒さもこらへて居ねばならず、孫子兄弟も、相客と思へば、よくくもてなし、跡に心をのこさず、おいとま申候かし。

父母によばれてかりの客に來て

こゝろとゞめずかへるふるさと

右澤庵和尚の坐中の示し

近松門左信盛花押

三

金澤松雲庵の寄附は楠の大木の下に在つて、彼の松山の方に面し、今を盛りの牡丹園を眼前に見下す構造であるが、壁床には前記近松門左筆澤庵和尚の法語を掛け、棚には爲相卿伊勢物語帖の上に古銅親子猿書鎮を置き、其他一座の飾付は左の通りであ

つた。

瓶掛 唐銅圓窓地紋

鏡瓶 寒雉瓜形

香煎入 織部瓢形

茶碗 半介草花繪

茶盆 圓覺寺什栗木地丸

蕘盆 壽福寺什來四方

火入 乾山蘭繪詩入

上記の器具を一見すれば、庵主が場所柄に取り合ふべく豫てより如何に其蒐集に苦心せられたか、推し測られて、寄附より先づ敬意を表せざるを得ぬ、斯くて待つ程なく庵主の出迎ひあるや、當然狸山翁が先達たるべきに、有賀翁まで口添へして一同余を推し出さるゝにぞ、左らばとて此寄附を出て、松山の麓に通ずる一條の長露地を辿りて、突き當りの腰掛前より左折し、松花堂昭乗筆松雲二大字横額が掛かつて居る梅見門を入つて、青竹の笕より苔蒸したる蹲踞石に、進り落つる山水で、漱ぎ頓て庵室へと繰込めば、席は長四疊で、躡口と鍵の手形を成した一方に、四枚引の障子があつて、庵主の明快なる氣分を現はした一種無類の構造である、而して床には寧一山が後宇多法皇の御製に和した七言一偈を掛けられたが、一風白地古金欄中紫印金上下茶地北

絹の目の覺めるやうな表装で、其文句は左の通りである。

去斯地曷向東關

莫謂中霄貪賊艱

今日欣々辭一偈

雲蹤永卜瑞龍山

右大覺法皇和韻之作

正和乙卯七月晦

一山一寧書

後宇多法皇は鎌倉に於ける寧一山の道譽日に高きを聞かせ給ひ、正和二年召して瑞龍山南禪寺を董さしめた、而して正和乙卯は同四年であるから、或は其頃一山が鎌倉へ呼び返さるゝやうな事があつたのを、法皇が御製の詩を賜はつて御引止めなされたので、一山は其詩に次韻して宸慮のまに、永く南禪に留まるべき決意を奉答した者ではあるまいか、字體は草書で磊落なる出來の面白ばかりでなく、其表装の彼れが如く美事なる此幅が、昨秋井上侯家入札會に出たのだと云ふのに、如何にして余等が之を見逃したのであらう、是れは殆んど神隠しとも云ふべき者で、益田鈍翁も亦同感と見え、其禮狀中に簡程の名幅の公會場に出たのに氣の附かなかつたのは、吾れ

と我が眼を疑はざるを得ぬと云つたやうな文言を認めてあつた。

四

松雲庵には前記の如く床に寧一山の墨蹟を掛け、道具疊に宗全作黒面取風爐を置いて、之れに蘆屋桐地紋角耳釜を掛けてあつたが庵主は着流しに拾徳姿で挨拶に出て、一亘り茶會開催の徑路を演説し終るや、春齋作溜塗丁斧目角切膳で左の懷石を運ばれた。

汁 根芋、あんひ、三州味噌

向附 メ古九谷草花繪、瓜、黄、瓜、藤、酢

椀 きんこ、海老寄せ、そら豆、まづ菜

焼物 繪志野肴鉢、水鴨寄せ、茄子丸煮

吸物 板わらび、針しうが

菓子 越後屋製卵の花

香物 染付小鉢、西瓜うす切、水菜

酒器 青磁獅子蓋鉢子、芙蓉手徳利、染付魚の手及ひ唐津盃

右懷石は清吉の庖丁とて固より悪からう筈なく、又食器は場所柄に對して概して寂び物を選まれたが、古九谷向附など最も能く溜塗丁斧目膳に取合ふて、普通の金欄手などより却つて面白く思はれた。斯くて懷石終るや庵主自から炭手前に取掛られたが、其器物は左の如し。

炭斗 宗全藤組平

香合 鎌倉彫牡丹隨流直書付

羽箒 鶴

火箸 明珍作鏡繩

灰器 宗品作

鑲 徳元在銘鏡象眼

前記器物は取り、見所があつたが隨流直書附の鎌倉彫牡丹香合は、場所より見ても季節より云つても將た寧一山墨蹟との對照より考へても、寸分動かぬ適品と感服した。扱て炭手前拜見後、梅見門外の腰掛に中立すれば、合圖は大銅鑼を六點打ちて、残る一點を打たずに庵主自ら出迎はれたから、頓て引き退りて後、更に一點を打たる、のかと思へば、庵主の出迎ひが則ち右一點の代りだとして、其後何等の音沙汰なし而して是れが近來の流行であるさうだから、庵主は實に斯道の流行に後れぬハイカラ黨と謂ふべきである。斯くて再び入席して床内を見れば、前田侯家傳來古銅柑子口花入を、道惠塗矢筈板に置いて、大山蓮華を投げ入れられた風情、得も言はれず、頓て庵主の立出て、濃茶手前に取掛らるゝを見れば、其器具は左の通りであつた。

水指 伊賀唐犬耳

茶入 大永年號彫銘肩衝

袋 茶地金襴

茶碗 古井戸銘田はらや

茶杓 小堀遠州共筒、銘六浦

建水 木地曲

蓋置 青竹引切

五

松雲庵濃茶器物中、大永年號彫銘茶入は瀬戸窯にやあるらん、胴に大永寺奉寄進又底に大永二年三ノ内と彫文字あり、肩衝の出来面白く一風變つた茶入である、井戸茶碗田はらやは井上侯舊藏で、箱書付は小堀宗慶であるが、古井戸で高臺作の一際勝れた茶碗である、而して之れに配した遠州共筒銘六浦は權十郎箱書で、權先二段だめであるが、六浦の茶會に同銘の茶杓とは、是れ以上の適所適品なかるべしと一同唯々感服の外なかつた。

斯くて濃茶一巡するや、薄茶は殘月亭にて差出すべしと言はるゝにぞ、庭先より飛石傳ひに茅茸の廣間に動座すれば、床には馬麟筆祖師の圖を掛けられたが、圖上隆蘭溪讚は

萬事呵々撫掌間

誰人打透箇機關

祇因迦葉微開口

放引寒山大破顏

とあつて小品ではあるが、堅物絹本で、今日の相客團狸山君藏同筆同圖と兄たり難く弟たり難き名幅である、猶ほ此一軸の前には青貝長角梅月盆に、硃青磁竹の節の香爐を置いて、名香時鳥を薰じ、書院には黒地伊勢海小貝埋物、蒔繪文臺硯箱と堆黒花鳥彫軸盆に載せた藤原の光俊筆和漢朗詠集二卷を飾り、其他一座の道具組は左の通りであつた。

風爐先 澤栗木地遠州好

風爐釜 庄兵衛作四方切合

水指 仁清雪月花

杓立 赤繪瓢形

火箸 砂張鳳凰頭

蓋置 青磁輪違

茶入 原田抱悦色漆棗

茶碗 祥瑞胴紐

替 八代燒

茶杓 象牙

菓子 唐物菊形盆
青紅葉、短册

以上器具にて薄茶は令嬢が代點し、今回の茶會に内助の功の最も多かつた須磨子夫人も一座に加はつて、初日以来の面白き挿話も數々披露されたが、庵主が暫時の間に濃茶手前に長足の進歩を現はし、初日益田鈍翁、岩原椿庵來會の節は鈍翁の歌に、その手振さへもてなしにしてとあつたが、余等の參會した六日に至りては、手前中多少の

停電はあつたが、濃茶の殊の外上出来て、何等初陣らしき餘興のなかつたのは、客に取つて寧ろ失望の方であつたから、余は鈍翁の反對に

物なれしあるじの手ぶり見る人の

物足らぬ顔する茶の湯かな

と口吟んで之を庵主の笑覧に供した、斯くて茶會後庵主の案内で彼の松山の半腹にある明治神宮、弘法大師堂等を巡覽し、猶ほ又母屋の各室をも拜見したが、之を細記すれば殆んど際限がないから先づ此邊で打切つて、最後に今度初陣茶會の大成功を祝し、併せて庵主が佳招の芳情を感謝しやうと思ふ。

目黒の筍飯

上

(大正十五年五月十三日)

道具商としては近善茶人としては竹有庵で知られて居る竹内廣太郎老が、目黒比翼塚前の茶寮にて、新緑の頃竹の子飲を振舞ふべしとの清約は、五月十三日正午竹有庵

茶會と爲つて實現された、扱て當日寄附に打通れば、酒井正吉、山澄靜齋が先着して居た處に、八田圓齋が臨時飛び入して余と共に四客と爲つたが、塗床には染付丸額大字を吊し、備前四方瓶掛に時代霰鐵瓶を掛け、栗木地茶盆に繪高麗茶碗と青磁小瓶子香煮入を置き、例に依つてキビ／＼とした飾付であつた、中にも時代杉手附蓑盆に取合はされた志野焼竹の子繪火入は、庵主の凝性に徹底して居るかを一同に示して、覺えずイヨと叫ばしむる價值があつた、斯くて庵主の出迎へあるや、先づ庭前に下り立てば、母屋や庵室は言ふに及ばず、近所合壁の茅葺屋根が若葉隠れに見え流るのが得も言はれぬ田園氣分を唆つて、豫々評判の筍飯には誠に相應はしき場所柄と感服して、二疊臺目中板の竹有庵へと繰込めば、床には本阿彌光悦の消息文を掛けられたが、其文句は

芳翰令拜讀候、晩に茶をひき可申候、來儀可爲本望候、但數寄屋にては無之候、人數可申承、又は山王祭へ參る事をも可申合候、必ず待ち申候、恐惶かしく

十四

光悦花押

として、追て書に晝迄に待ち申候とあり、大佗びの揉み紙表具で、光悦が洛北鷹峰村に於ける日常の生活ふりを見るべき如何にも面白い尺牘である、更に道具疊を見れば小形の鬼面鐵風呂に小雲龍釜を掛けて、之を極めて小振の寸松庵瓦の上に置きたる風情、追て何かな奇抜なる趣向が出現し、さうに思はれたが、頓て庵主の挨拶あるや溜塗丁斧目膳で直に得意の懷石を運び出され、向附は志野焼鶯宿梅繪、焼物は阿蘭陀菊形鉢、香物は雲鶴小鉢、酒器は染付寶蓋し模様蓋銚子、佛前焼德利金欄手盃等であつたが、何れも例の凝性が現はれて主眼をお約束の筍飯と爲し、器物料理も之れに相應すべく、夫れく用意周到なる物數寄は、當庵主の獨擅場として一も二もなく感心するより外なかつた。

下

目黒の竹有庵で竹の子飯を満喫するや、お負けに葛羊羹まで平げて炭手前拜見匆匆々庭前の腰掛に中立すれば、合圖を用ゐず庵主自ら出迎はれたから再び入席して床内を見れば、稍小形で焦げと青白さ釉の頗る美事なる耳なし伊賀焼種壺に、鐵線とあざみを投げ入れた風情又なく好く、前刻披露して置いた小形鐵風呂釜の傍には果して然り、備前ひだすき捏ね鉢、大水指を置いて、大小正反對の意匠を示し、茲に庵主の濃茶手前があつたが、使用の器物は左の通りである。

茶入 薩摩燒鶴首

茶杓 遠州作空中筒

茶碗 平熊川

建水 木地曲

蓋置 青竹引切

茶 鶴の白

如上器物中薩摩燒鶴首茶人は、遠州時代薩摩の帖佐で焼かれた者で、遠州好みに瓢箪茶入あり、宗甫が十個好みたりとて之を甫十瓢箪と稱する名物だが、鶴首の方も亦或は遠州の好みてがなあらう、茶人は之を帖佐鶴首とも云つて居る、而して此極めて小さくて氣の利いた茶入を平熊川茶碗、遠州作空中筒茶杓と取合せて、彼の大捏ね鉢、水指の前に置き並べ、相撲取りなら幕下十兩請合なる大兵山の如き庵主が、ドツカと其間に構へたる有様は、主人と器物と相待つて自然に大小互用の妙相を示現して居た、斯くて濃茶一巡するや、同席で薄茶の饗應あり、彼の大水指は其儘置き附け、茶入は遠州好み鐵刀木藤花紋蓋茶杓は象牙茶碗は仁清作、蘆に橋の繪、替茶碗は魚屋、建水は瀬

戸蓋置は乾山糸巻形で、一閑菓子盆に豆粉渦巻を盛り、アツサリと薄茶が相濟めば、歸途に廣間で番茶を差出すべしと言はるゝにぞ、一同竹有庵を出て、庭先より更に八疊廣間に移れば、床には土佐光起筆極彩色翡翠の圖を掛け、其下に饅頭ぬけある備前焼物長板を置いて、之れに青々と石菖の生へたる盆石を飾りたる意匠何とやら余等の歸りを藪疊の中に待ち受けて、竹槍一本グザと横腹をお見舞申さん魂膽とも思ひ做され、庵主の愈々出て、愈々奇なる腕前には到底太刀打ちかなふまじと、僅に一方の活路を開いて、一同竹有庵をぞ辭したりける。

糟谷耕雲庵

(大正十五年五月十四日)

上

名古屋の敬和會員糟谷徹三郎君は、余が五月十五日桑名の諸戸精太君の茶會に出張する由聞き傳へ、同會員森川如春君を介して、其前日正午西區鹽町自邸耕雲庵に臨席すべく申越された、聞く所に據れば、敬和會は會員五名より成り立つて居るさうだが、

余は其中四名の茶會に參席して居ながら、掛け違ひで未だ糟谷君の耕雲庵を訪ふの機會を得なかつたので、早速欣諾、十四日午前旅宿丸文より今日の相客横井二王を伴ひて程遠からぬ糟谷邸に赴き、正門より兩側に立ち並ぶ土藏の間を通り抜けて、左手の露地門より松楓雜樹生ひ茂れる平庭に進み入れば、茲に土間附きの瀟洒たる待合あり、楣間に獨樂二大字額が懸かつて居たが、席上に鍋島緞通を敷き、出雲焼瓶掛に瓢形鐵瓶を掛け、茶盆には道年焼茶碗と唐津香煎入とを載せ、おふけ焼火入を備へた一閑手附煙草盆を置合されたが、程なく森川如春君も參會して、茲に三客打揃ふや、頓て庵主の出迎へあり、正客は余が失敬して寄附と木の間隠れに相對する耕雲庵へと繰込めば、露地の左手老樹の下に高さ七八尺もあらんずらん大石燈籠があつて、是れは大石良雄の山科閑居に在つた彼の遺物だと云ふ事だが、偉人の名譽は其餘光を石燈籠にまで及ぼす者かと今更ながら感激に堪へなかつた、斯くて二疊臺目の耕雲庵に入席すれば、床には藤原定頼卿筆古今集歌切を掛けられたが、其歌は左の通りである。

夏ひさのてひさの絲をくりかへし

里人のことは夏野のしけくとも

事しけくともたえんと思ふな

かれゆく君にあはさらめやは

藤原定頼卿は公任卿の男で、其歌切には烏丸切下繪歌集切などがあるが、是れは古筆家が大江切と稱する者で、金砂子臺紙に書かれた筆蹟が頗る能く、其父に類して居るので時々見違へらるゝ事があるさうだ。

中

耕雲庵主糟谷徹三郎君は嘗て干鯛問屋を営み、中京實業成功者の一人だが、數年前より敬和會員と爲りて漸く閑生涯に入り、昨年など例の鱒、鯉審判會に於て鯉方の代表者と爲りし事あり爲人温順洒脱にして街はず飾らず、率直の間に雅致多きを以て茶趣も自ら其性行を現はし、最も同人に敬愛せらるゝさうである、斯くて庵主は余等に一應の挨拶あるや、春慶丁斧目膳を以て直に懷石を運び出されたが、其献立は

- 汁 根芋、三州味噌 向附 阿蘭陀黄藍繪唐草模様 鮎くるみ、和へ 椀 鮑、茄子、干大根、柚花

燒物 常滑燒 編笠鉢

吸物 牛海鼠

八寸 時雨鮑、蠶豆

香物 小蕪、胡瓜

酒器 織部蓋鐵銚子、鈍阿燒德利 黄瀬戸六角盃

菓子 銘初鯉

懷石は例の川文の庖丁ならん、時候相應にて風味申分なく、器物も向附の阿蘭陀黄藍繪唐草模様又は酒器の織部蓋鐵銚子など、初風爐氣分に適應して誠に清々しく感ぜられたが、茲に初鯉の銘ある淡紅色煉莖を出されたのは、目に青葉と云へる今日此頃の季節に於て、鯉黨の旗頭たる當庵主の茶會になくて叶はぬ景物と首肯された、扱て懷石終りを告ぐるや、庵主自ら炭手前に取掛られ、其器物は左の通りであつた。

釜 天貓四方尾垂

風爐 宗全尻張

炭斗 竹組唐人笠

香合 天川青貝布袋寶盡

羽箒 鶴、黑白替り羽

灰器 南蠻朱摺

火箸 砂張椎の實頭

如上器物中天川香合は、赤地に青貝の布袋寶盡し、模様精巧にして、且つ頗る雅味あり、而して竹組唐人笠炭斗とは何とやら一道の氣脈を存する者の如く、其組合せの面白きに感服した、扱て右炭手前終るや、茶席より石階數級を降つて右手の平地に構へた

る腰掛に中立すれば、合圖を用ひず庵主自ら出迎はれたから、余等は後座の趣向如何を豫想しつゝ、再び耕雲庵へと繰込んだ。

下

耕雲庵後座は床に片桐石州作一重切を掛けて、大山蓮華を挿みたる風情又なく好く、今年茶席で此花を見るのは實に今日が最初なので大に初風爐氣分を咬つたが、頓て庵主の濃茶手前に取掛らるゝを見れば、

水指 木地曲

茶入 瀬戸焼銘八橋

茶杓 小堀遠州共筒銘盧

茶碗 無地刷毛目酢次

建水 砂張

蓋置 青竹引切

茶 初昔

前記器物中茶入の瀬戸銘八橋遠州茶杓の盧橋など、時節相應の銘柄として其名を聞くだに何となく茶味津々たる者あり、而して之に配した無地刷毛目酢次は片口を切取つた痕跡が口縁下に残つて居るが、普通頗る大形なるに引換へ是れは非常に締りて、初めより茶碗に生れたるが如き形状なるが珍らしく、純白の刷毛目釉も亦一段優

れた者であつた斯くて濃茶一巡するや同席にて引續き薄茶を出されたが、水指は膳所廣口と替り、茶入は宗和好み朱尻膨棗茶碗は象牙茶杓は宗入作馬盃で、内朱唐物四方菓子器に有平結び外一種の惣菓子盛つて出された、而して今日は三客なので薄茶に時節物の馬盃一つを用ひ、他の替茶碗を出さなかつたのが誠に奥床しく感ぜられた、斯くて薄茶手前を終るや、茶事は是れにて終局したれど歸途廣間にて番茶など差出すべしと言はるゝにぞ、一同耕雲庵を出て飛石傳ひに母屋の廣間に動座すれば床には狩野縫之助の傑作花鳥の圖を掛け、箱書附拜見の間に番茶やら果物やらを出して、緩々餘談を繼がせた庵主の取廻し企まずして自ら能く機宜に適したのは、其淡泊なる性格の現はれとや云はん、余が今回桑名諸戸家の茶會に赴く途中圖らずも此一會に參會する事を得たのは所謂行掛けの駄賃で誠に勿怪の幸ひであるから、先づ以て庵主の好意を謝し、併せて紹介の勞を取られた相客の森川如春君の好意をも謝さうと思ふ。

諸戸伴松軒

(大正十五年五月十五日)

勢州桑名の山林長者諸戸精太君は、五月十日より桑名町本邸伴松軒に連日盛大なる茶會を催して、廣く同好者を招請せられたが、余は同十五日正午の客組に加はつて之れに列席する茶福を得た、扱て精太君は故清六翁の嫡男だが、余は明治二十五年故翁と相識りてより、東京又は大阪に於て數次面會して略其性行を知るの機會を得た、想ひ廻せば今より三十五年前、余は東京三井銀行に在つて抵當物整理の事を管掌して居たが、其時抵當流れ地所中に奥州四竈村と云ふ廣大なる荒蕪地があつて、其處分に窮して居た處に、一日大兵頑丈で身に粗衣を纏ひ、然も尻端折の儘なる壯漢がスツと余の事務室に入り來り、卒然口を開いて此方に抵當流れの四竈村の荒地があるさうだが、何程なら譲つて呉れませんかと問ふので、君は何人かと問へば私は伊勢の諸戸清六と云ふ者だ、植林が商賣で日本國中の荒蕪地を探つて之を買収しつゝあるが、四竈

村の事を聞いたので早速相談に來たのだと云ふ、其處で余は渡りに船の思ひをなして原價若干なりと答ふれば、翁は左様かと云つた儘、フイと立ち去つて何處へ行きしか音沙汰がないので不思議な男もあればある者だと思ひ居りしに、凡そ一週間を経つてフラリと銀行に顔を出し、イヤ一寸四竈を見て來ましたが、其地勢は斯々水理や地味は斯様々々で、結局我が用に適せざれば是れはお断り申すべしとて又候フイと立ち去られた、其後三年余が三井銀行大阪支店長たりし時、翁は又卒然として店頭に來り、時の經濟問題に就き此程大隈伯の意見を徴して來たが、貴下は何と考へらるゝやなど質問の後、凡そ山林程國家の爲めにも自分の爲めにも利益なる物あらじ、私が寢て居る間にも樹木は休まずに成長し、一夜明ければ私の財産は早や昨日より幾分増殖し居れり、而して最近まで舊大名某侯爵家が、日本一の山林所有者なりしが、今日では私の方が其上に出て、漸く日本一と爲つたばかりでなく、大名華族などは唯在來の山林を所有するに止まれども、私は悉く荒蕪地を開いて新に植林する者なれば、國家の利益は彼等と同日の談ではありませんと、眞率素朴なる田舎漢口調で大に氣焰を

吐かれたのである。

二

今度桑名の伴松軒で盛大なる茶會を催した諸戸精太君の先大人清六翁は精力絶倫で東奔西走殆んど寧日なく急用の場合は人力車を次ぎ立てにして、乗り替へ疾驅を續けるのを例とした、平素直情徑行で眼中人なきが如く、人の言ひ難きを言ひ又行ひ難きを行ひて平然として意に介せず、汽車中に乗客の呑み棄てたる土瓶あれば、天物を暴殄するは冥加を知らぬ者なりとて必ず之を持ち歸れり、彼の天津事件とて露國皇太子が天津で遭難せられた時、翁も拜觀者の一人であつたが、非常の群衆雜沓中人力車夫が翁に乘車を勧め高價の賃錢を貪らんとするを翁は値切りつつ彼一步、此れ一步、何處まで行きても折れ合はず、頓て驟雨の降り來りて翁の衣服を濕すを見て、車夫は得たりと翁に向ひ旦那ソナに賃錢を値切つて居る間に着物を雨に濡らしたら却て御損ではありませんかと言へば、翁は頭を左右に振り、イヤ、夫れは夫れ、此れは此れで問題が違ふよとて、到頭目的地まで歩み續けたと云ふ奇談がある、

左れば翁は儉約一方の人かと云へば左に非ず、今度精太君が茶會を催された伴松軒の一構は、桑名藩時代の大名金貨御用達山田彦左衛門の舊宅で、建築庭園の豪壯目を驚かすばかりなるを、更に擴大して今日の名園となしたのは實に故翁の遺業である、又獨力を以て桑名町に水道を設け、町民をして永く其恩澤に均霑せしめたのも同じく故翁の功績である、今度精太君が數々の名器を並べて茶事を興行せらるゝのを見て、或は彼の親にして此子あるかと思ふ者があるかも知らぬが、明治二十年前後桑名町の運漕問屋山中氏の道具大賣立があつた時、故翁が當時レコード破りの五百圓を投じて仁清鶏の香爐を買ひ取り、其座に並み居た無數の數寄者をして、殆んど顔色なからしめた一事を思ひ合はすれば更に不思議はないのである、昔時伊勢に月僊と云へる畫僧があつて、其業體に似ず頻りに潤筆料を貪るので、人呼んで乞食月僊と稱せしが、他年大飢饉のあつた時、悉く其蓄財を散じて多數の人命を救つたので、世人始めて其深意に感服したと云ふ美談があるが、故翁は同じ伊勢人として頗る月僊と類似點があるやうだ、兎に角奇人肌の大活動家で、獨力を以て日本第一の山林長者に成り澄

した偉人であるから、後年太史公が出て、明治の貨殖傳を撰述する事もあれば、翁は故安田松翁など、肩を比べて其傳中に異彩を放つべき一人であらうと思ふ。

三

諸戸精六翁が明治三十八年耳順を越ゆる一二年の年配で易簀せられてより、春雨秋風已に二十年を過ぎ、名跡を繼いだ次男の現代精六君も、別に一家を成した嫡男精太君も共に二代守成の名聲を墜さず、殊に精太君の如き久しく茶道の修養を積んで、今度花々しく一會を催すに至つたのは、修身齊家何れの方面より見ても誠に祝着の至りである。斯くて余の佳招を蒙つた五月十五日正午の相客は、中京の好事家森川如春、山内清玄、高橋龍溪、横井二王の面々で、余を併せて五客であつたが、午前十一時半桑名驛に着到、出迎ひの自動車に同乗して程遠からぬ諸戸本邸に繰込み、先づ正門を入れ、ば露地の兩側に亭々たる老松の七八本枝を交へて、駢立する光景、流石に山田彦左衛門の舊庭園に背かずと頷かれた、更に進んで庭前に出づれば、左手に宏壯なる母屋があつて、其前面に横はる池邊には、當主精太君が木曾川の上流より運び來つた大石が、

臥牛の如く奔虎の如く、奇々怪々の状態を成して亂立して居る其間に多種類の杜若を植並べあつたが、今は空濠なれど、花盛り季節には全面に泉水を湛へる趣向だと云へば、定めて盛觀を呈する事であらう。而して此池には八橋式の石橋又は澤飛などの通路が設けてあるから、先づ池の中心まで進み出て、更に右折して對岸に渡れば、池に面する大藤棚は紫雲瓔珞として、今が花盛りの最中なれば、一同其下を潜り抜けて、突當りの樂庵と云へる廣さ十疊許りの一亭に着到した、即ち今日の寄附で床には松花堂郭公の歌入消息文を掛けられたが、其歌は

聞かばねんむぐらの宿とほとゝぎす

いくよの月にむかふ夏山

と云ふのである、其處で席上を見廻せば、備前四方瓶掛に寒雉、太手鐵瓶を掛け、時代春日盆に肥後焼香煎入、染附壽老の繪茶碗を取合せ、其傍に古銅糸巻蓋置、古丹波建水を置き、唐津口紅火入を備へた時代、桐天然木煙草盆に、鎌倉彫、莖壺と青樂焼煙管を添へられた飾附は、昔時大名庭園の休息所などにも似通ひて如何にも奥床しく思はれ

た。

四

諸戸伴松軒の寄附樂庵にて待つ間程なく庵主精太君が自ら出迎はれたから、遠來の故を以て余が正客を承はり、元來し道の池邊に沿ひ、母屋の前面を通り抜けて夏木立鬱蒼たる奥庭の溪流を渡れば、流れに臨んで小高き一構の茶室あるが、即ち今日の本席だ、而して蹲踞石が低く溪流の中にあるので、岸邊の石段を降つて青竹の筧より迸り落つる清泉にて漱ぎ、順次席中に繰込めば、是れは松尾流宗匠の意匠に成つた茶室で、六疊の中に洞床を取り、床の前に長板があつて、廣々とした茶室であるが、床には一風崩黄地印金中萬曆高麗紗上下茶地北絹表具の江州永源寺開山寂室禪師三行墨蹟を掛けられたが、其文句は左の通りであつた。

若人靜座一須臾

勝造恒沙七寶塔

寶塔畢竟化爲塵

一念靜心成正覺

右一軸は元と京都の望月宗匠が所持して居たのだが、今より二十年前京都で宗匠の

遺品入札があつた時、當庵主の自ら買収せられた者で、此一事を以ても庵主の嗜好が如何に久しき以前より發芽して居たか、分るであらう、斯くて庵主立出で、一同に挨拶の後、時代紅溜角切折敷宗哲上り子椀で運び出された懷石は左の通りであつた。

汁 桑名産小蛤三州味

向附

斑唐津割山椒、五月鰈短册

椀

車海老崩し、岩茸

燒物 乾山色繪阿蘭陀寫

吸物

いかに子

八寸

染附柳山水繪、小こち、新芋鹽ゆで

香物 尹部鉢、瓜粕漬、小燕

酒器

時代鐵染附桃蓋銚子、刷毛目德利、藍繪阿蘭陀花鳥及び繪唐津盃

菓子

銘藤浪

如上器物の細評は餘り煩雜に渉るから茲に之を省略するが、庵主が今日あるを期して多年準備の疎かになかつた事は懷記に依つて容易に判斷せらるゝであらう、而して懷石も亦頗る結構な中にも、汁の實に小蛤を使はれたのはお場所柄當然過ぎる程當然な趣向と頷かれた。

五

伴松軒茶席にて懷石終るや、庵主自ら炭手前に取掛られたが、其器物は左の通りであつた。

- 香合 青貝内朱松月圖 炭斗 唐物竹組底四方 鑲 時代鐵大角豆
- 火箸 徳元在銘鐵表素張 羽箒 青鸞 灰器 南壁内澁
- 灰匙 石州好み

庵主は松尾流宗匠に就て十餘年前より茶禮を練習せられたさうで、今日など初陣茶人に共通なる滑稽的餘興は露程もなく、キビく炭手前を終られたが、扱て中立となるや折柄天氣も淡晴で綠陰幽草の好時節なれば、飽まで客に庭前の風景を賞翫せしむる心遣ひにて、中立は寄附樂庵の附近に在る雨月亭と云へる小亭に設けられたが、此亭は益田鈍翁が西行法師の故事に因みて命名されたと云ふ事で、楣間に同翁筆の匾額も見受けられ、床には更衣と題する白河樂翁の短冊を掛けてあつたが、其歌は

花ごろもかへてもおなじ白妙の

たもとに春のなごりをぞみる

と云ふので、桑名の茶席に樂翁公の短冊は如何にも相應はしき一品と感心した、此時合圖はなくて庵主自ら出迎はれたから再び入席して床中を見れば、細川三齋作一重

切にさんざし、乙女百合を活けられた風情又なく好く、庵主が半宗匠然として濃茶手前に取掛らるゝを見れば其器物は左の通りであつた。

- 茶入 佐竹家傳來漢作山 袋 金入花兔紋 盆 松平不味箱書附若
- 水指 杉木地曲 茶碗 雲州家傳來玉子手 茶杓 古田織部作隨流筒
- 建水 砂張棒の先 蓋置 青竹引切 茶 松柏園詰初昔

前記器物中漢作山櫻大海は、先年佐竹侯家藏器入札の際京都の上野與吉氏の手に入り、最近上野氏の入札會で更に庵主の所藏に歸した者だが、爲尹卿千首歌の内餘花と云ふ題詠で

あそかりし恨みもいまは山櫻

花なき頃の花にむかへて

と云ふ歌意に因て命名せられた者で能く之を玩味すれば茶入の風情も略推察し得られやうと思ふ。

六

伴松軒濃茶器物は山櫻大海茶入を主眼として、之に雲州家傳來玉子手茶碗古田織部茶杓を配用されたが、玉子手は黄味勝ちで高臺内に黄釉のナダレ込んだ景色が面白く、織部茶杓は茶入茶碗と貫録の權衡上誠に其當を得たものであつた、斯くて濃茶一巡するや同席にて薄茶の饗應あり、其道具組合せは大要左の通りであつた。

水指 ノンカウ作赤筒 茶入 不味公好棗 茶碗 鬼熊川呼銘うつせ

替 瀬戸唐津おはぐろ 茶杓 益田鈍翁作歌銘君 建水 木地曲

蓋置 木米作祥瑞寫 惣菓子 萬曆年製存星丸盆 莢盆 一閑手附木爪形

上記器物中益田鈍翁作歌銘君が代茶杓は筒に自筆で樂翁公の歌を書附けてあつたが、其歌は

松風もなみのひゞきも君が代の

めぐみにもるゝ音やなからむ

と云ふので、茶杓も書附も非凡の出来であるから、織部の茶杓も結構ではあるが、余は寧ろ之を濃茶に使はるゝ方に左袒したいと思ふ、斯くて濃薄茶會終局するや、此地方

で御殿と稱し居る舊建物の一覽を乞ひたしとて庵主自ら先導せられたから、茶席を出て、樹木の間を通り抜ければ、此處に築山を遶らした大池があつて、對岸には何々閣とても云ひたげな大書院が屹立して居た、其光景大名なれば三十萬石以上の威容を示して居たから、築山を一週して一同右書院に繰込めば、是れは上段下段二間打通して凡そ五十疊敷もあらずらん大伽藍に入側及び板椽を繞らし前面近く池邊の雪見燈籠若くは中島の噴水などを見渡し、遠くは伴松軒一帯の建物やら樹木やらを一眸中に納むる純然たる御殿式建物で、之を故清六翁が汽車中の土瓶を集めて持ち歸つたと云ふ奇行と思ひ合すれば、其間の距離の如何に隔絶して居るかに驚かざるを得ぬ、然れども創業と守成とは自ら其地位を異にする者なれば、當代精太君が今日先代の遺物を利用して長者に相當する人格と家格を向上すべく、進んで茶道に透入せられたのは誠に賢明なる選擇と信ずるから、余は茲に君が鄭重なる待遇を感謝すると同時に伴松軒茶會の成功と併せて其一門の隆盛を祝福するものである。

丙寅昭乗會

(大正十五年五月十八日)

上

洛西鷹峰光悅會洛南男山昭乗會は、今や京都の確定的年中行事となつた、而して昭乗會は從來濃茶を紳士數寄者、薄茶を元老道具商が受持つのを常例としたが、今年は濃薄双方を大阪の道具商戸田露朝子一手で受持ち、茲に所謂獨演會を催したのは、縱令へ其飾付道具の幾點か、網島藤田家の援兵であつたにもせよ、流石關西道具商の元老たる其手腕を認めざるを得ぬ、扱て昭乗會は例の通り五月十八日午前九時より舉行されたので、余は當日京都より自動車を驅つて午前十一時頃八幡に着到、會場に入るや先づ松花堂昭乗墓前に額づき、夫れより濃茶席なる閑雲亭に繰込んだが、床には知家三首懷紙定家加筆の一軸を掛けられ、其文句は左の通りであつた。

卯花

知家

遅櫻ちりし名残やのこるらむ

青葉まじりに咲ける卯の花

夏草

山人の朝ゆく道の夏草は

かへるゆふべやなをしげるらむ

郭公

ほととぎすをしと思ふより啼くこゑを

寢てあかすらむ人は聞かすや

ほととぎす今はまたじと思ふこそ

せめてつれなき初音なりけれ

如此風にていか

定家

表具と云ひ歌句と云ひ、今日の床に一言もなき此一軸の前には、繪刷毛目徳利形花入に山牛蒡春女郎花を挿み、道具疊には宗全瓢箪形風爐に與次郎小萬代屋釜を掛け、其他一座の飾附は左の通りであつた。

- 炭斗 唐物一文字
- 灰匙 朝鮮砂張
- 羽箒 大鳥
- 茶杓 探幽共筒
- 建水 木地曲
- 香合 雄徳山什物、松花堂
- 鑲 徳元竹の節
- 水指 仁清山水繪四方手
- 茶碗 青井戸銘朝香山
- 茶 柳櫻園詰初昔
- 灰器 南蠻内澁
- 火箸 砂張
- 茶入 膳所燒肩衝權十郎
- 蓋置 青竹引切
- 菓子 松屋製八重成

下

昭乗會濃茶席閑雲亭飾附は前記の通りて、急所々々に數々の名器を配置し、水も漏らさぬ作戦計畫と見受けられたが、中にも膳々焼肩衝茶入銘玉篠は此窯中無類の傑作で、釉色の美事なるばかりか其姿も殊勝にして、之に掛けたる安樂庵袋まで申分なく、青井戸銘朝香山と云へるドツシリとして濃茶眞向の茶碗との對照極めて妙なるに、更にツゲ物の探幽茶杓を配用した亭主の意匠慘憺は大に之を多とせねばならぬ、斯くて濃茶一巡するや更に本堂の方に立戻り、庫裡の二階に於て齋食の饗應を受けたる後、頓て青松居と云へる薄茶席に繰込めば、床には松花堂筆陶淵明に澤庵和尚の讚

ある長上一幅を掛け、床柱の時代籠花入に雪篋、紅薊を活けられた風情又なく面白く、時代鐵面取風爐に五郎左衛門四方釜を掛けて、露朝の一子音一子がキビくと薄茶手前を興行さるゝを見れば、一座の道具組は左の通りであつた。

- 炭斗 時代蒔繪さくず箱
- 鑲 紹爲好蟲喰
- 茶器 阿蘭陀藍繪
- 替 左心齋銘山市晴嵐
- 干菓子 時代木地高坏 青楔有平
- 香合 不味公好竹
- 羽箒 白鶴
- 茶杓 一翁宗守共筒銘お
- 茶碗 兒 黄伊羅保松浦鎮信 銘松慶
- 火箸 時代大角豆
- 水指 宗且在判ヒシギ藥
- 茶碗 建水 湖東燒
- 蓋置 宣徳蓮

如上器物は取々面白き中にも、宗且在判ヒシギ藥罐の如き數寄者をして垂涎三千丈たらしむべく、又官休庵一翁宗守共筒銘お兒茶杓の如き、如何に今日の茶會に相應しきかは今更多言を要せぬであらう、兎に角濃薄兩舞臺を双肩に背負うて斯かる大茶劇を演じ、從來大家の飾付に對して更に強弩の末勢を感ぜしめざりし今度の茶會は、疑ひもなく露朝父子の一世一代たるべく、地下の松花堂も之を見て必ずや過分々々

と其勞を謝せらるゝ事だらうと思ふ。

網島夜會

(大正十五年五月十八日)

余は五月十五日桑名諸戸家の茶事終了後直に南都に赴き、同十八日八幡の松花堂昭乗會に臨席すべく、其前日を以て入浴した處が土橋無聲老卒然余が旅宿に訪ね來つて、當月初より大阪網島東邸に於て藤田耕雪君が初風爐開會中でありますが近來無類の大出來茶でありますから、私は是非とも御參會相成る事をお勧め申したく今日御尋ねしましたと云ふ、誠に有難い仕合せだが、余は十八日昭乗會に臨席後同夜汽車にて直様歸東の都合なので遺憾ながらお断りするの外なしと言へば、無聲老例の智囊を絞つて然らば貴方は出立つを一汽車延ばされ、先方には夜會を催して貰つては如何と言ふ、其儀ならば至極好都合なりと答ふれば無聲老萬事心得て耕雪君に交渉の上、十八日午後五時半より網島東邸蘆庵に臨席を乞ふとの案内を齎し來られたの

て、昭乗會に臨席後、當夜の相伴たる右土橋無聲老と、水屋の手傳を爲さんとする林樂庵子と相伴ふて八幡より大阪行き電車に乗り込み、頓て天満停留場に着するや、余は堂島に磯野良吉君を訪ふて暫く時刻を待ち合せ、夕刻網島東邸に推參すれば、今夜は當時在阪中の馬越化生老、同嫁御寮幸次郎氏、室安子夫人が相客なりと云ふに更に一段の興味を感じ、先着の土橋無聲老と先づ席中を見廻せば、壁床には宗旦作銘烏帽子と云へる花入に添へたる同人筆消息を掛けられたが、其文句は

烏帽子出來、爲持上候、此頃の筒に候、猶ほ拜上候、恐惶頓首

五月七日

今日庵書判

とあり、傍に尙々書もあつて、宛名は一坂齋主と爲つて居る、箱書は如心齋で、大佗び表具であるが、之を此寄附に掛けられたのは、今夜本席に於て其花入を掛けらるゝ前觸れたるや言ふ迄もない、而して席上には絞り氈敷物の上に、樂白釉三足火入を備へた一閑柿形菘盆を置き、永樂の仁清寫茶碗で白湯を汲出された、折から化生翁及び安子夫人も參着したので、一同先づ腰掛まで立出づれば、此處に出された赤味ある上出來

の志野四方搦座火入が美事なので、一同之を賞翫しつつ待つ間程なく庵主の出迎へあり、東都茶壇の元老當年取つて八十三歳の化生翁は、黒髮童顏齋藤別當實盛然として當然今夜の先達役に當り、一同を率ゐてゆらりと蘆庵の方へと繰り込まれた。

二

網島東邸蘆庵は先代江雪翁好みて二疊臺目席であるが、夜會の事として花を先きにし、寄附の消息文で先刻承知した宗旦銘烏帽子と云へる一重切花入に大山蓮華一技を活けられた風情、客をして遺憾なく初風爐氣分を味はしめたが、此花入は寂び竹で、其下部が三角形を成して居るのを稍前下りに切つたので、正面より見れば何とやら烏帽子形をして居るが爲め、宗旦が此銘を選んだ者であらう、兎に角一風變つた此竹花入に對して、それく品評を試みて居る處に庵主出で、挨拶あり直に一閑半月折敷道惠作椀で心入の懷石を運び出されたが、其器具及び献立は左の通りである。

汁

合せ味噌、蕁菜

向附

乾山笹の繪、鮎卵の花和へ、蓼

椀

海老丸、白瓜輪、岩茸木の芽

強肴

黄瀬戸鉦鉢、山葵、加茂川海苔

同

御本刷毛目飯櫃鉢、茄子煮、花かつを

同

萬曆赤繪手桶、鹽辛雲丹

吸物

かやせん、割梅干

菓子

銘若葉庵主好み

香物

丹波耳附鉢、澤庵、西瓜、奈良漬

酒器

鈍阿燒朝鮮唐津德利寫、安南竹の節ぐる呑、染附丸紋酒呑

如上懷石は當地で有名なる堺卯樓主阿部吾市が茶事執心で自ら庖丁を執らるゝ事として、其風味の並々ならぬは言ふまでもないが、懷記に依つて略ぼ想像せらるゝ通り、其器物が取りく、優秀なる中にも、乾山笹の繪向附はケンザリとして今焼きたらんが如く、備前足附平鉢は稍大振りて厚手で焼拔も十分にあり、ウネくと歪んだ作行の面白さ、蓋し備前看鉢中の巨擘と謂ふべき者であらう、其他強肴酒器中に出現した名器の數々は殆んど應接に暇あらざる程であつたが、別して萬曆赤繪手桶丹波耳附小鉢、安南竹の節ぐる呑など何れも一品當千の珍器ならざるなく、斯かる懷石は舌で味はふと同時に眼で味はふべき者で、是れぞ世界に誇るべき日本茶道の精華と稱して宜からうと思ふ。

三

網島東邸蘆庵に於て懷石終りを告ぐるや、庵主自ら炭手前に取掛られたが、宗全面取

風爐に掛けられた名物古天明鞠形釜は大徳寺天祐和尚の内箱書附に利休より少庵より萬江萬江より宗意宗意より宗珉宗珉より天祐紹果和尚に傳來した者だと云ふ、而して其外箱には獨庵宗讓和尚筆で、此鞠釜が天祐紹果和尚の箱書通り、大徳寺三玄院に傳來した次第を書附けてある、如何様ふつくらとした蹴鞠形が宗全面取土風爐に取り合ひて得も言はれぬ風情であつたが、此風爐釜の前に端座したる庵主は、頓て炭手前に取掛りて左の器物を使はれた。

炭斗 唐物透し組小判形

香合 保元時代蒔繪四方錫縁籬菊模様

灰器 宗和好宗品作雲華

灰匙 利休形一燈時代

羽箒 白鶴宗中箱

火箸 時代桐透鐵金筋金

銀 徳元素張

如上器物は雜品に至るまで夫れ々々特色を備へて居た中にも、保元時代錫縁四方香合は形狀と云ひ頃合と云ひ、錫縁の窠れ、籬菊の圖樣等天下蒔繪香合中有數の逸品と稱すべく、之れに手を觸るゝさへ勿體ないやうな心地がした、扱て手前終りて元の腰掛に中立するや、型の如き名鉦の合圖があつたが、正客化生翁は銅鑼聞きの名人として

腰掛より飛石二三段前に進みて瞑目して無念無想の體は翁が一種獨得の趣味で、之を彼の感服七種の奥の手とのみ観る事は出來ぬであらう、扱再び入席せんとするに當り、躡口より一見して忽ち驚心駭目したのは、床に掛つた俊頼卿赤地大色紙の一軸である、此色紙は赤地の唐紙中に白抜き的人物模様があつて、臺紙其物が已に珍奇なる其上に、稍肉太の文字の麗はしさ得も言はれず、而して其歌は左の通りである。

大江千里

やとりせし花たちはなもかれなくに

なとほとゝさす聲たえぬらむ

表具は一文字紺地上代紗中風帶白地銀紗上下茶地唐物緞子で、初風爐の一軸としては之に上越す者あるべしとも思はれねば、一同相顧みて暫く感嘆の聲を絶たなかつた。

四

蘆庵後座の床に掛つた俊頼卿赤地大色紙で、一同酔へるが如く恍惚たる處に、庵主出

て、濃茶手前に取掛られたが、其器物は左の通りであつた。

水指 木地釣瓶

茶人

中興名物 古瀬戸尻 彫銘浪花

袋

花色金地二重蔓大 牡丹

茶杓 利休共筒、江岑、如心 箱書付

茶碗

金海洲濱形銘藤浪

蓋置

青竹引切

建水 南蠻ハンネラ

茶

初摘の白笛紹清詰

前記器物中興名物古瀬戸尻彫銘浪花は名物記著者松平左近將盛乗邑の箱書附て、瀬戸薬の景色に富んだ小形茶入であるが、委曲大正名器鑑に掲載してあるから其説明は之を略せん、利休共筒茶杓は江岑及び如心齋箱書附て茶杓が傑作なばかりでなく、其共筒が極めて殊勝に見受けられた、而して之に配した宗旦所持金海洲濱茶碗銘藤浪は江岑箱書附て、天下の名物金海茶碗中高谷宗範翁所持平瀬家舊藏銘西王母と伯仲の間に在る者である、而して彼には金海と云ふ文字の彫銘ある代りに、口縁より腰に達する一筋の堅樋があるが、此には彫銘なき代りに白壁に一點の微瑕もなく、其高臺廻りに於て鼠色と薄桃色との釉色變化極めて面白き者あり、且つ猫搔きの少いのが寧ろ此茶碗の特長と謂ふべく、外部腰以下の出来榮えに至つては、金海茶碗中推

して第一と爲すも決して過褒であるまいと思ふ、斯くて濃茶一巡するや薄茶は廣間残月にて差出すべしとの挨拶に連れて、一同廊下傳ひに廣間に動座すれば、床には江月和尚筆聽松二大字横物を掛け、夜分の事として其前に盆石を飾られたが、正午茶會の時は青磁不遊環下燕花入に紅白牡丹を挿まれたと云ふ事なれば、特に乞ふて其花人もも拜見したが、天龍寺最上手で青色湛らんが如く形式極めて優美なる名器であつた。

五

網島東邸の廣間残月に於ては、茶道執心で内助の功最も多しと傳へ聞く令夫人が、天成の麗質花も羞らふ容姿にて、腰に紅帛紗を挿みしづく、と出座あり、慇懃に一同に挨拶の後、炭手前に次いで薄茶手前に取掛られたが、當席は利休所持前田利常侯箱書附五郎左衛門釜を、唐物宣徳年製鉤及び環を以て釣り、惺齋好み腰唐紙桐紋風爐先の前に木地四方棚を置き、朝鮮唐津一重口水指を飾られたが、先づ炭手前の器物より記せば、

炭斗

宗全好二枚重碌々
齋書附寶笠

香合

染附桃

灰器

ノンカウ焼拔

釜敷

時代透し組

又薄茶器具如何と見れば

茶入

宗長大棗宗且箱

茶杓

原叟在判象牙竹形

茶碗

遠州所持信樂花橋
本歌

替茶碗

古三島小服銘連

蓋置

南蠻鐵象眼輪花

建水

交趾寫大徳寺形

以上道具組で席上には遠州好み四方手附一對煙草盆に古染附雲堂火入を備へ、茲に薄茶の饗應があつたが、木地四方水指棚に納まつた朝鮮唐津一重口水指は上半白釉の景色得も言はれず、宗全好み二重炭斗より取出された染附桃香合は、其形と云ひ藍色と云ひ、此手に於ての天下一品と領かれ、又薄茶母茶碗、遠州所持信樂橋は、中興名物として古來其名高き者で、然も庵主が最近の功名品と承はるが、庵主が道具狩の作戦は常に大將分を捕獲するに在りて、殘兵小卒を眼中に置かざる美風があるさうだが、此茶碗の如き最も適面に其お手柄を物語る者だらうと思ふ、斯くて濃茶一巡するや連日詰切りの表千家惺齋宗匠、戸田露朝、江村茶道等も入り替はり同座して緩々餘談

を續けたが、抑も茶事は主人が第一、次は道具、其次は客の三者が具備するを以て上乘とするさうだ、而して今回は庵主と道具の二者に於て慥に此條件を備へたやうだが、客が果して之に相應したか否かは甚だ覺束ない次第である、併し余は幸にして此佳會に陪する事を得たから、拙筆を揮つて茲に所見の大略を報告し、以て聊か庵主厚遇の萬一に報じやうと思ふ。

觀空庵初陣

(大正十五年五月廿四日)

嘗て保險勸誘員の談を聞くに、最初保險嫌ひと稱する人は却つて大に勸誘の望みあり、漸次接近して程よく其嫌ひと云へる論據を説破すれば、忽ち納得して進んで被保險者と爲る者なりと云ふ、茶事も亦頗る之に類する者あり、最初茶事を頭ごなしにする者は、其時既に菩提の種を宿し居るにや、時來り境變ずれば、即身成佛して、立派な茶人に爲り澄すの類例に乏しからず、而して我が觀空庵主前山久吉君の如き此類例中

に於て最も著明なる者だらうと思ふ、回顧すれば今より十餘年前余が未だ下界に在つて王子製紙會社専務たりし頃、庵主は同社取締役で北海道苦子牧工場建設工事を管掌して居たが、余が其工事監視の爲め時々同工場に出張するや、晩食後徒然の折々談茶事に及ぶ事あれば、君は痛烈に之に反抗し、殆んど茶事亡國論者なるかの如き權幕を示し急言竭論、口角泡を飛ばすの概があつた然るに其後數年君が或る名家より名幅を掘出したりと云ふ噂がフト余の耳朶に觸れたる事あり、扱ては先生御座つたなど打領き居る間に、或る時其名幅を携へて雅友會合の席上に現はれたる事あり、又或る時は拙者もそろ／＼お弟子入しませうとて古陶器の鑑定を余に乞はれた事も、ある斯て近年に至りては名古屋出身たるお國柄の本色を現はして、建築造庭等にも趣味を持ち、例の明晰なる頭腦を以て分解的研究的に其方面に突進するので、君が多年の意匠を費して造り上げた麴町下二番町の現住の如き、當世實業紳士邸宅の好模範と稱すべく、斯くて漸次に向上した趣好は當然茶事に歸着して、最近觀空庵の造作と爲り、遂に今度の初陣茶會まで漕ぎ付けたのであるが、君が觀空庵一區額の背面に

書き付けたと云ふ記文を見れば、直に今日の意境を窺ふ事を得るから左に之を掲げよう。

予實業界に在る事二十有餘年、齡知命を越え初めて一小庵を結ぶことを得たり、名けて觀空と云ふ、蓋し此庵中に坐するの間、賓主渾融、人境雙忘、俱に清閑を樂まんとするの意に外ならず、般若心經曰、照見五蘊皆空、度一切苦厄。

大正壬戌晚秋

前山久吉識

二

觀空庵主前山久吉君は東京信託社長にして、金融工業其他雜多の實業に關係し、旦夕俗務多忙中に、時々安息する別乾坤を求め得たのが、即ち觀空庵茶席で、五月二十日頃より開庵し初めて自ら茶會の陣頭に立たれたのであるが、余は其二十四日正午の一會に加はり、團狸山根津青山牧田環山澄靜齋の面々と相客たるの光榮を得た、斯くて當日下二番町の前山邸に赴き、正門を入りて玄關前より左手の寄附に罷り通れば、是

れは不規則なる三疊席で、片隅の丸爐に天明霰鐵瓶を掛け、床には加賀の千代藤花畫讚の小幅を掛けられたが、其句は

地にとゞく願ひはやすし藤の花

とあり、何とやら他の一句を借りて客に一撈を與へんとする意匠と覺しく、今度の開庵に就き庵主が並並ならぬ丹精の程も窺はれたが、席上には阿蘭陀木綿敷物を敷いて、仁清寂袖日々新文字白抜きの火入を備へた桑木地蓑盆を置き、根來未茶盆に新萩茶碗と祥瑞在銘瓢箪香煎入とを取合せ、庵主好み松木地茶臺をも添へ置かれた、即ち庵主の痼性は寄附よりして既に其鋒鋒を露はし、祥瑞在銘瓢箪香煎入の如き、底に五郎太甫吳祥瑞の彫銘があつて、先輩茶人の家に於ても容易に見る能はざる珍器なるにぞ、客も一見肅然として此敵侮る可らずとの緊張味を帯びざるを得なかつた、斯くて庵主の出迎へあるや、青山、狸山兩老の年齢戸籍調べなどが始まつたが、結局青山老が正客の任命を承はつて、順次庭前に降り立てば、露地は格別廣からざれども、右手に庵室あり、左手に木彫大日如來を安置した小堂があつて、露地は其中間に開き、飛石傳

ひに鉢前に至れば、南都仕込みと覺しき時代古き蹲踞石に對して同様の伽藍前石を据ゑ、之に配した石燈籠の大寂なるにも自ら庵主の好事が窺はれ、斯くまで十全を期しては開庵の遅々たりしも誠に尤も千萬なりと頷かれた。

三

觀空庵の露地は、前記の如く奈良仕入の時代役石を要所々に配置してあるので、一石も等閑に看過する能はず、到頭彼の苔蒸したる蹲踞石で漱ぎ、更に顧みて庵室の破風を見上ぐれば、觀空二大字を白抜きにした偏額が懸つて居たが、是れぞ庵主が其背面に例の記文を認めたものであらう、扱て順次繰込んだ庵室は三疊臺目寸松庵型で、床には藤原公任卿唐紙地朗詠切を掛けられたが、其文句は

甕頭竹葉經春熟

階底薔薇入夏開

苔生石面輕衣短

荷出池心小蓋疎

わかやとのかさねやはるをへたつらん

夏さにけりと見ゆる卵の花

夏夜

風吹枯木晴天雨

月照平沙夏夜霜

風生竹夜窓間臥

月照松時臺上行

と云ふので出来も美事に文句も好く、表具も亦頗る殊勝な此一軸は、今回の開庵初陣に就き、庵主の茶想の果して那邊にあるやを最も雄辯に説明して居るやうな心地がした、而して今度は新席とて一軸の前なる白木臺に熨斗を飾り、頓て庵主の挨拶があつて、溜塗膳で直に懷石を運び出されたが、其器具及び献立は左の通りである。

汁 水前寺菜、三州味噌 向附 吳洲赤繪、昆布、鯛、山葵、加減酢

椀 早松茸、老つくね、早松茸、夕顔、口柚

燒物 仁清幕の繪香鉢 鴉寄せ青串差煮ゆき加子

吸物 鯨骨、芽紫蘇

八寸 風干鳥賊、藤豆

香物 古染附四方鉢 胡瓜、新大根、薄切

酒器 阿蘭陀蓋鐵引盃 渦卷蒔繪朱引盃

菓子 薯蕷羹

懷石は時候向きて鹽梅も至極結構なり、器物も取り、美事であつた、中にも吳洲赤繪向附は形稍締りて模様も通常のと變り、初風爐用としては一言もない適品であつた、斯くて懷石終るや庵主自から炭手前に取掛られたが、其器物は次の如し。

釜 古蘆屋平柳燕地紋

風爐 鐵面取瓦 織部敷瓦

炭斗 唐物藥通

羽箒 大鳥

香合 青貝一羽鶯

火箸 砂眼菱角椎の實頭

風爐釜は合せ物なれども、殆んど共作の如くに能く取合ひ、其柳に燕の地紋が青貝香合の一羽鶯模様と相對して、一段初風爐氣分を味はせたのは庵主苦心の存する所であらう。

四

觀空庵に於て炭手前終るや、元の寄附に附屬する腰掛に中立すれば、合圖を用ひず庵主自ら出迎はれたから、再び入席して床中を見れば、宗旦作細竹尺八花入に大山蓮華一枝を活けられたが、此花入は古來千家名物として知られた者で、筒裏に是樂周學公傳として且の一字及び花押あり、其内箱には宗徧が宗旦よりの傳來を記し、外箱には更に之を證明する原叟の書附がある、猶ほ其外には是樂と云へる名稱の由來を知るべき左の副書がある。

元伯アル時ユビ一本入程ナル竹にて尺八ヲ切り花ヲ入レ被申候是ニテモ樂ミニ

なるとて則其花入銘ヲ是樂ト附被申候件の花入徧子に給はりし此已後尺八にだんく細き竹ヲモ用候なり。

宗旦には烏帽子其他の名物花入があるが是樂は其穴に指一本入る程なる細竹なれば當に宗旦とのみ云はず世間名物竹花入中に於ても極めて異風の一品であらうと思ふ斯くて庵主は今度が初陣なりと云ふにも似す例の明晰なる頭腦で複雑なる濃茶手前を何の苦もなく練習し終り縦令へすらすらは行かぬまでも何等初陣的滑稽味を現はさず服加減さへ申分なくて首尾克く濃茶を點てられたが其器物は左の通りであつた。

水指 木池曲

茶入 唐物丸壺

茶碗 高麗燒銘ヤセ男

茶杓 遠州作銘しづはた

建水 一紹鷗信樂

蓋置 青竹引切

茶 代々木の森

如上道具は新席開きと公任朗詠切の一軸より割出した組合せて庵主が多年苦心の結晶とも謂ふべき品々なり又其銘柄に於ても自ら深長なる寓意あるやうに思はれ

たが他にお師匠番と云ふべき者もなく庵主自身が宗匠で一切萬事獨裁せられた此一會の主品に於て斯くまで選擇の能事を盡されたのは新茶人觀空庵主の大成功として大いに之を祝福せねばなるまい。

五

觀空庵で濃茶一巡するや廣間にて薄茶を差出すべしと云ふにぞ一旦茶室を出て飛石傳ひに八疊廣間に動座すれば床には牧溪筆五祖悟逸讚の一軸を掛け唐物若狹盆に青磁鯁鱗形香爐を置き名香春日野を薫ぜられたが此牧溪一軸は地紙長さ二尺八寸餘幅一尺一寸餘あり五祖が歛の先に松苗を掛けて立ち居る圖で紙中も綺麗に表具も美事に且つ筆勢神に入つて其相貌自ら人を壓するの氣韻あり其上に題した悟逸の讚語も亦謹嚴なる筆致で書畫双絶の妙得も言はれず而して其文句は左の如し。

白髮垂々 弊衣檻樓 投胎不擇人 錯入江頭路 鈍饜無鋒
青松有子 破頭山下多風雨

淨慈悟逸贊

此一軸は元某子爵家所藏で、大正五年頃、日本美術協會に出品せられた時余は中材歌右衛門と同時に參觀して、此幅の前に至り、扱てもく、名幅なるかな此幅を見て腰を抜かさぬ者はなからうと云へば、歌右衛門怪訝なる顔付して何で腰が抜けますかと言ふにぞ、余はハタと其説明に窮して果は大笑ひと爲つた事があつた、左れば余は無論垂涎三千丈でありながら及ばぬ戀と諦めて居たのに、觀空庵主は何事にも精力家だけに、到頭之を口説落して己が手活の花と爲した其艶福誠に羨むべく、而して今日之を廣間の床に掛けられたのを見ては愈々今昔の感に堪へなかつた、扱て此席には鎌倉時代菊の紋手箱棚に黄瀬戸一重口杜若釘彫八橋コゲ水指を置き、了全取風爐に古天猫霰竹地紋釜を掛けて薄茶の饗應があつたが、其器物は

茶人 盛阿彌黒棗

茶杓 象牙

茶碗 了入寫ノンカウ毛

替 禮賓三嶋

建水 木地曲

蓋置 古銅波透し地紋

菓子 砂糖盆、ユカリ、木の葉

如上道具組で薄茶一巡するや、新席の事とて更に吸物取肴等を運び出して祝酒一献

の趣向もあつたが、相客一同は庵主が多年經營の苦心を多とし、母屋の各室扱ては庭園彼の小堂内の大日如來木像までも巡覽して、彌其意匠と精力とに感服した、兎に角獨力を以て今日の初陣を張るに至るまで、一切合切經營せられた其宗匠振を見れば、後來の進境必ず人を驚かす者があらうから、余は今茲に觀空庵初陣の大成功を祝し、更に刮自して發展如何を注視しやうと思ふ。

一木初風爐

(大正十五年自五月二十七日)

上

五月中旬余の中京敬和會員と會同するや、同會員舉つて二十六日益田鈍翁の品川御殿山茶會に出席する豫約ありと聞き、左らば余も驥尾に附いて其翌二十七日赤坂一本庵に初風爐茶會を催し、聊か返茶の眞似事を爲すべしと申合せたので、十九日歸京勿々直に其準備に着手し、二十七日正午は無論敬和會員諸君の入來を乞ひ、爾後六月二日まで引續き正午又は夕景より連會同好者を招持せしに依り、今茲に其大要を報

告し併せて此茶會中に於ける所感を述べ様と思ふ、扱て一木庵の寄附は三間續きの客間の内十疊中の間を以て之に當て、中程に綾り氈を敷いて其上に志野播座四方火入を備へた松尾流好み竹手附朱塗蓑盆を置き、白湯は汲出しにして其他一品をも出さず、唯床隠しに應舉筆曉月杜鵑の圖六枚折屏風半双を立並べた、此屏風は天明壬寅初冬寫應舉の落款で、紙地六枚折の中程より稍左手に寄つて、寫生的に半空を啓き過ぐる杜鵑一羽を畫き、少しく下つて淡墨の隈取りで落月一痕を寫し出した、彼が一種飛び放れた意匠なので、客の入席に先だち其初風爐氣分を唆るべく之を寄附に立て廻したのである、而して本席一木庵床には松平不味公筆庭前柏樹子五大字一行物を掛けたが、是れは公が大字中の傑作で、公も餘程得意であつたらしく、宗納の印と松江城主の二印を重ね、尙一々齋の關防をも押されてある、斯くて後順次運び出したる懷石は。

汁 尊菜、三州味噌

燒物 染付繩耳藤蔓手附平鉢、鮎鹽燒唐津猪口に蓼酢

向附 阿蘭陀繪替菊形皿、鯛ソギ身、防風甘酢

椀 ナヰき、隱元、柚花

煮物 吳洲赤繪小鉢、茄子丸煮、花鱈

吸物 松の實、芽紫蘇

八寸 越後産燻し鮭、松露

香物 黒織部小鉢、胡瓜

酒呑 染附桃の繪蓋、絲目銚子、蒲前小德利、黃瀬戸竹の節及合榻手盆

菓子 水羊羹、青葉敷きて

下

赤坂一木庵に於て懷石終りを告ぐるや、續いて炭手前を興行したが、其器物は左の通りであつた。

釜 蓋屋若松地紋琴柱、風爐 天下一宗四郎作道、炭斗 唐物藤組四方入平

香合 堆朱鬼屈輪周明道、羽箒 鶴、灰器 松齋作雲華燒

右炭手前終るや一旦客に中立を乞ひ、銅鑼七點の合圖を以て更に之を迎へたが、後座の床には唐物木耳竹籠花入に濱茄子、姫百合、都菊の三種を掛け、濃茶手前に使用した器物は次の通りである。

水指 木地釣瓶、茶入 祖母懷播座丸壺底、茶碗 呼銘沖伊羅保

茶杓 小堀大膳作銘笥、建水 ハンネラ、蓋置 青磁竹形

前記濃茶器物中、祖母懷播座丸壺茶入は、今回茶事の動機が名古屋の敬和會連を招待

するに在つたので、特に此同國産茶入を選んだのであるが、之れに配した沖伊羅保は千家名物茶碗で、堺の沖與右衛門所持に因りて此呼銘あり、頃合が初風爐茶會に適するのて之を用ひた次第である而して此處に青磁竹形蓋置を使用したのは、此蓋置が不味公遺愛で雜器ながらも名物の資格を備へて居るので、之を濃薄双方に共用して珍器の權威を保たしめたのである。斯くて濃茶一巡するや薄茶は同席で、水指は出雲焼管耳と代り、茶入は藤村庸軒好み朱面取茶碗は斗々屋編笠形及び益田無爲庵手捏黒樂建水は木地曲で砂張青海盆に不味公好み干菓子二種を盛りて今度の一會を終結した、而して此上詳しく説明するのは聊か自茶自讚の恐れがあるから之を省き、唯今回余の工夫とも謂ふべきは夜會の折にも猶掛物を先にして花を後にしたる事である。從來夜會は花を先にして掛物を後にする習慣だが、是れは往時席中に短檠若くは蠟燭を用ひた時代の規定で、茶席に電燈を用ふる今日に於ては、晝間の如く掛物を先にして一會の趣意を表明する方が順序として寧ろ當然の事だらうと思ふ、即ち余が舊例を用ひず夜會に掛物を先にしたる次第であるが、世間若し之に異存を挿む宗匠あらば幸に高教を吝む勿れ。

無別法茶會

(大正十五年五月廿日)

一

茶事は發句の如く一句即ち一會で終結する者もあれば、又連歌の如く初句二句三句相承けて數會相續する者もある、而して其連歌的會は前を承後を起し、不即不離の間に其妙味を發揮する者で、不得道者の容易に催し得べき所でないが、左ればとて始めより企んで催すべき者に非ず、偶然の機會に左る場合が發生するので、催主の臨機應變が愈必要と爲るのである。扱ても五月二十九日我が一木庵茶會に臨席せられた益田鈍翁は、當日の相客熊澤一衛君より、近頃高田太郎碗手造無別法の文字ある茶碗を贈られたので、此機會に於て君を御殿山太郎庵に招き、彼の茶碗開きの一會を催さんと、其翌日即ち卅日正午君の來庵を乞はれたが、此太郎庵茶會に於て熊澤君が更に又鈍翁及び余等を静岡市なる月臺莊に招がるゝ事と爲り、夫から夫へと茶會が連

續して各主人が夫れく工夫を凝さるゝ所に得も言はれぬ茶味が含まれて居た、因つて今先づ太郎庵茶會より記さんに五月三十日正午同庵相客は熊澤一衛、仰木魯堂、横井二王、山澄、齋齋、壁床には高田太郎庵筆茶席見取圖を掛け、其下の通し棚に名古屋の指物師長谷川甫齋作竹硯箱を飾られたが、茶席見取圖は所謂太郎庵なるや否やを知らざれども、庵室、樹木、飛石の配置まで一目瞭然に圖解して片隅に良齋の落款あり、又竹硯箱は平扁なる大竹を二つ割にして、其表面に四分一製の蝸牛を止まらせてある、是れが即ち水入で最も突飛な新意匠である、尚ほ席上には古銅瓶掛に鐵瓶を掛け、根來裏朱梅鉢茶碗に赤繪角瓢香煎入と新茶碗とを取合せ、織部耳附火入を備へた、杉木地手附煙草盆を差置かれた風情、太郎庵茶碗開きの意匠が寄附より既に十分に顯はれて居た、斯しく庵主の出迎へあるや、熊澤君が頻りに正客を辭せらるゝに依り、余が已むなく之れに當り、朝來降り歌まぬ梅天に各自露地笠を翳しつゝ、青竹より滾々と迷り落る清泉で漱ぎ、例の含雪公筆太郎庵扁額を仰ぎつゝ、順次庵中に繰込めば、床には一休和尚筆看盡江山千萬里七大字一行長上幅を掛けられたが、是れは大河内

子爵家舊藏で、上下北絹、中風帶紫印金の表具目覺しく、古來一休大字中の巨擘として知られて居る名幅である。

二

太郎庵に於て庵主鈍翁の挨拶終るや、遠州好み絲目膳で庵主自ら心入れの懷石を運び出され、太郎冠者の令嬢即ち庵主の孫女が甲斐くしく給仕を手傳はれたが、其献立と使用の器具とは左の通りであつた。

- | | | | | | |
|----|-----------------|----|----------------------|----|---------------------------|
| 汁 | 鶴菜、三州味噌 | 向附 | 阿蘭陀黃藍繪菊四方、さより山獨活胡瓜あへ | 椀 | 海老しんじよ、隠元きんこ |
| 燒物 | 祥瑞鐵拐仙人圖肴鉢、あなご寄せ | 煮物 | 古三島小鉢、新小芋 | 吸物 | くらげ、あんず |
| 八寸 | 鯨の子、蠶豆、松露 | 香物 | 伊賀杓小鉢、あちやら漬 | 酒器 | 黄瀬戸獅子蓋鐵鉢子、粉引徳利、青磁八角及び刷毛目盃 |
| 菓子 | 葡萄餅 | | | | |

懷石は當庵獨得の風味例に依つて申分なく、今日は當席に初めて駿河茶人を迎へたる事として、器物もイの一番を選みたるが如く、向附の阿蘭陀菊四方、祥瑞肴鉢、酒器の粉引徳利など何れも一品物ならざるなく、大抵鈍阿焼で間に合さるゝ香物鉢まで、今日

は眞實正銘の伊賀沓鉢を出さるゝなど、主人の接待振が如何に緊張して居たかを知るに足る、扱て懐石終るや直に庵主の炭手前あり、使用の器物は左の通りであつた。

釜 蘆屋茄子銀附狂歌 風爐 遠州好黒丸 炭斗 一文字細竹組小堀
地紋

香合 黒塗内朱青貝鶏蝶 羽箒 大鳥 灰器 南蠻内壺

火箸 砂張椎一の實頭

如上器物中一文字竹組炭斗は、明治二十五年頃星ヶ岡茶寮で行はれた故渡邊驥翁藏器入札會に出で、雜器ながらも今尙ほ人の記憶に留まつて居る者で、久し振にて之を熟視し愈々其精作無類なるに驚いた青貝鶏蝶香合は時代古くして然もケンザリとした處に其價値あり、今日の器物は總て所謂大臣級を繰出されたやう見受けられた、斯くて炭手前終るや、庵主の心遣ひで雨天なれば中立を省くも苦しからずとの挨拶であつたが、雨中の露地は却て風情あるべしとして一同腰掛まで立出づれば、銅鑼七點の合圖の青葉を傳ふて響き渡る妙手、果して雨中に於て一段人を感ぜしむる者があつた。

三

太郎庵後席の床には利休所持唐物竹組籠に高山植物敦盛草、二人静の二種を活けられたが、籠は井上世外侯遺愛で細川三齋の箱書附あり、利休所持後南都東大寺塔頭四聖坊什物と爲り、其口大きく頸締りてブヨくと下腹の膨れ出した作行の雅味言ふばかりなく、是れは昨年井上家藏器入札の際、今日の相容熊澤一衛君も競争者の一人であつたが、何かの手違ひで當庵主に横奪せられたので、此處君は籠に恨みは數々ござると言ひたげの面持あり、當庵主が今日之を使用したのは聊か手活の花を誇るの穉氣なきに非ざれども、入札戦場の儀は是非なしとお諦めありたしと云へる心意氣も亦中々に興味なしとせず、斯くて庵主の濃茶手前を見れば、其器物は左の通りであつた。

水指 木地曲 茶入 八幡名物柳藤四郎 茶杓 中興名物遠州作江
茶碗 高田太郎庵作銘無 替 名物手井戸 建水 砂張
蓋置 鷹司甫信公作竹 茶 好の白

前掲器物中、八幡名物柳藤四郎茶入銘蛙は其形殆んど獨樂の如く肩廻りに青釉にて蛇の目の如き模様がある、本來此手には青釉ナダレ柳の枝の垂れたるが如き景色あり、其柳に因みて蛙と銘されたるも面白く、又思ひ做しにや此茶入の形が蛙と見れば見られぬでもない名物茶入中一種異風の珍器である、又茶碗は先刻披露した通り熊澤君より到來品で、名古屋の高田太郎庵手造なり、黒樂の外部一方に一圓相を描き、他方に無別法の三字あり、光澤なき寂び出來て太郎庵其人の茶風を偲ばるゝ面白い者だが、此人の手造は至つて少く、余等は今日初めて拜見する位なれば、大正の太郎庵主に此上もない進物として、此茶碗を探し出したる熊澤君の芳情は、庵主も必ず深く感佩せらるゝ事であらう、斯くて今日は熊澤君に對して無論此茶碗を主用されたが、全局の器具組合より云へば、副用として之を補佐する茶碗なかる可からずとの作略ならん、替茶碗として名物手井戸を使はれたが、是れは至つて沈着なる出來て、高臺廻りのカヒラギ騒がしからず、若し從來大宗匠のお目に掛つて居たらば必ず何の某と云へる名字を頂戴せしならんに、左はなくて今日無名の茶碗で居るのは誠に氣の毒千

萬なれば、余は庵主に一策を献じ、今度の一軸一休和尚の看盡江山千萬里の文句中、江山の二字を粉字形にして庵主自ら其外箱に書付しては如何と云ひたるに、庵主も是れには大賛成で不日之を實行すべしとの事であつた。

四

太郎庵にて濃茶一巡するや、薄茶を同席にて令孫女が代點せられたが、其器物は左の通りであつた。

- 水指 萬右衛門作空中箱 茶入 遠州藏帳青貝藥器 茶杓 象牙
- 茶碗 斗々屋呼銘市原 替 空中在印 建水 木地曲
- 蓋置 青竹引切

如上器物中斗々屋呼銘市原茶碗は、庵主の亡弟無爲庵舊藏にして、薄茶眞向きの小服なり、薄青色と枇杷色と片身替を成し、小ぢんまりとして氣の利いた作行で、箱の張札には秋草とあるが、何時頃より何人が言ひ慣はせしにや、市原の呼銘を以て通用するのは蓋し其釉色が市原野邊の景色を聯想せしむるが爲めであらう、而して此美麗な